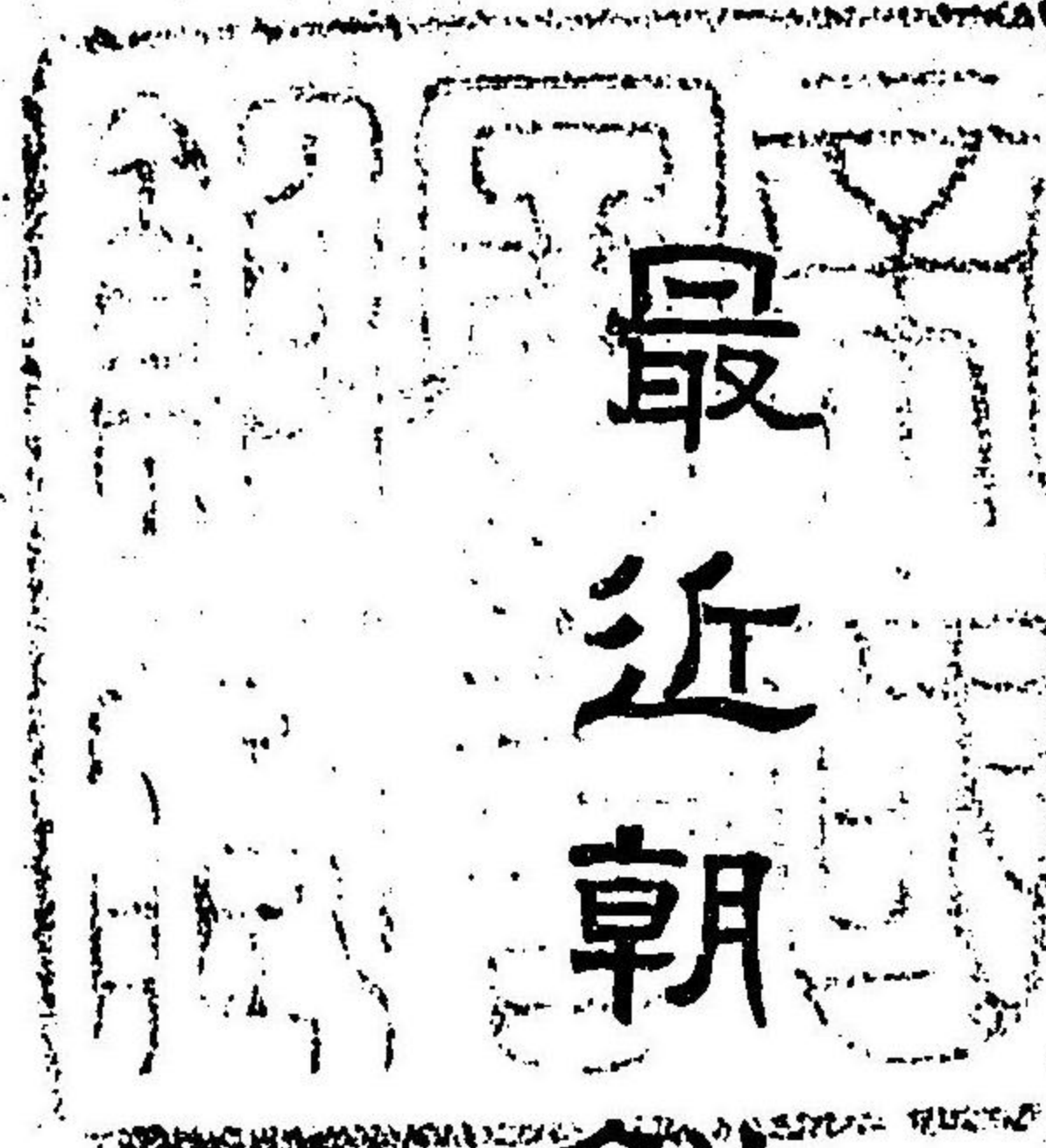


4H81

特61
793

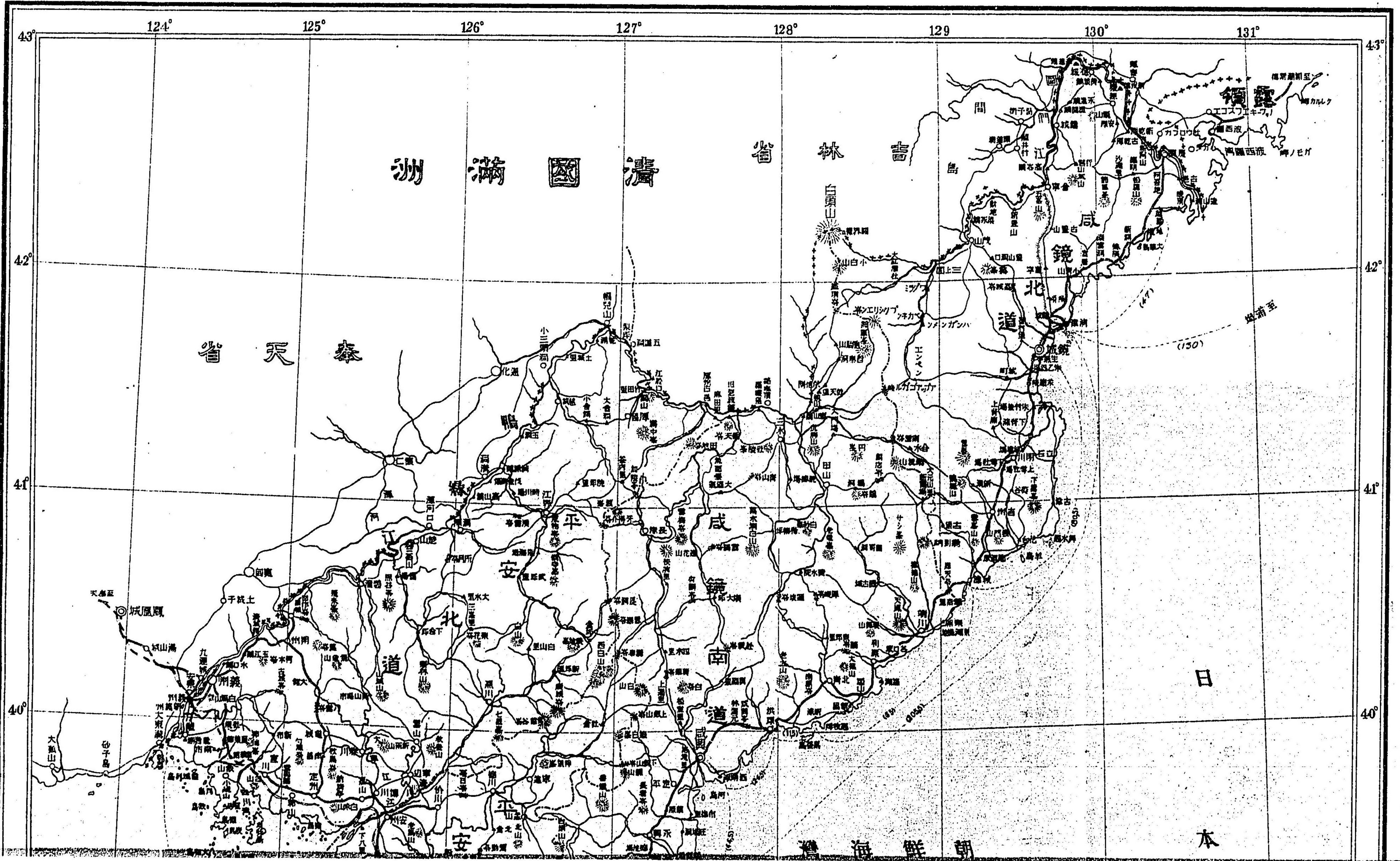


朝鮮總督府編纂
最近朝鮮事情要覽

公府出版

明治
45. 4. 1
寄贈

朝鮮地圖



日

本

海

朝鮮海峽

40°

40°

39°

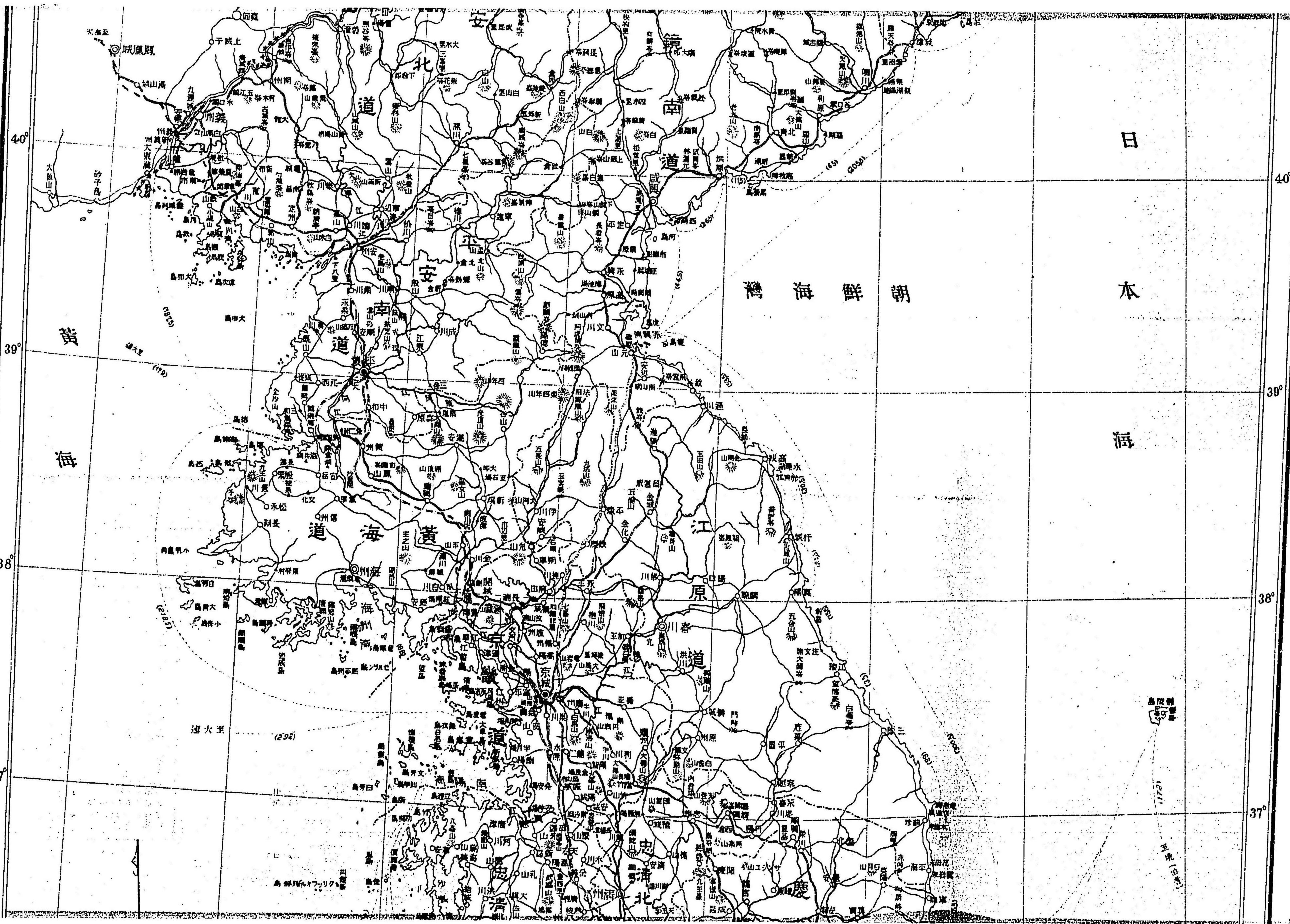
39°

38°

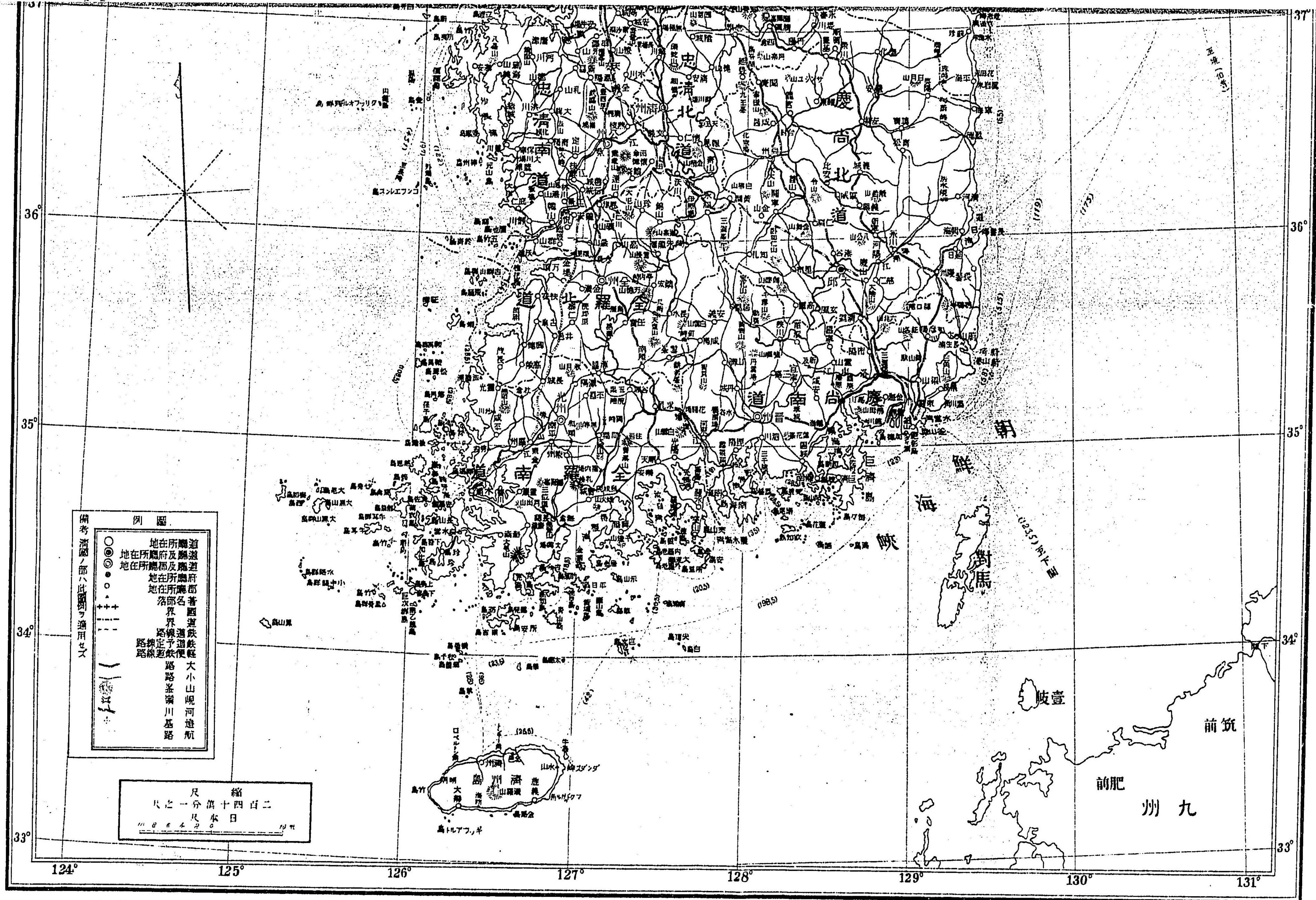
38°

37°

37°



朝鮮總督府



例圖

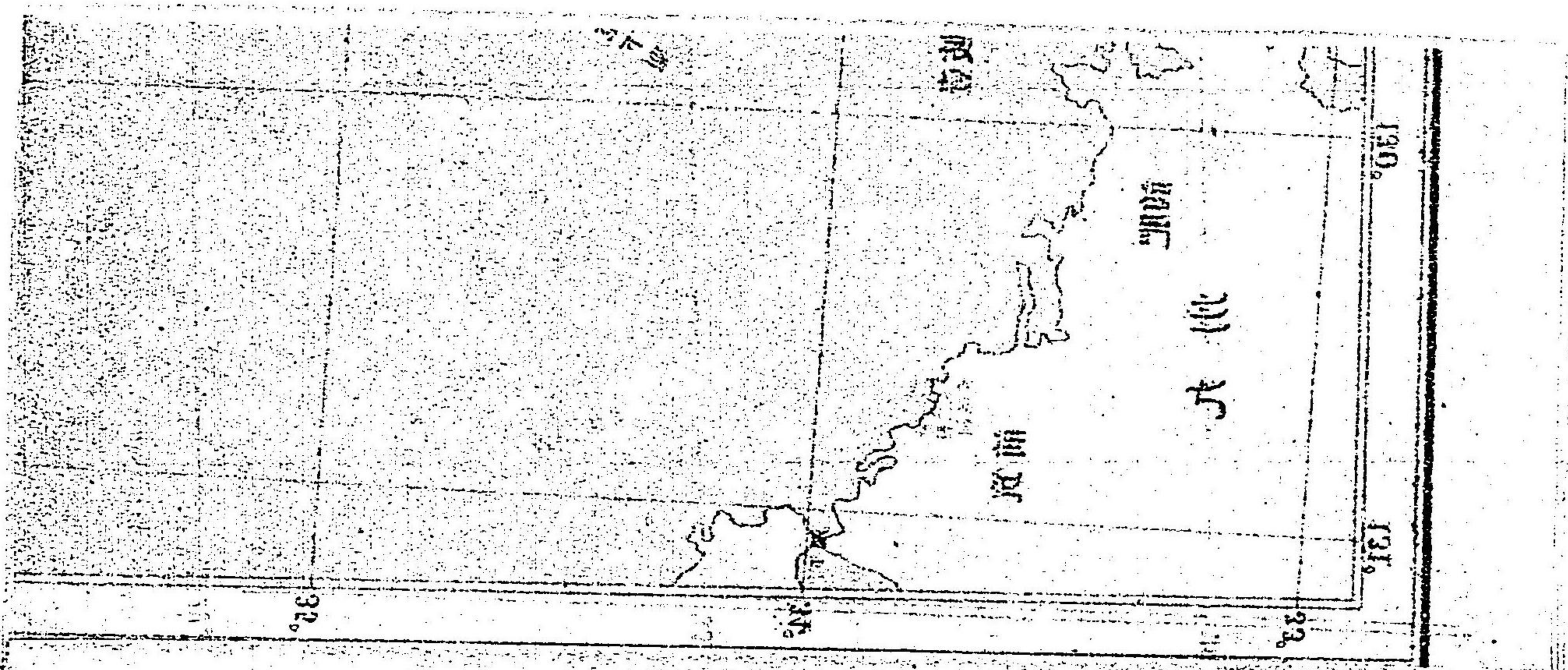
- 地在所屬道
- ◎ 地在所屬府及廳道
- ⊙ 地在所屬郡及廳道
- 地在所屬府
- ⊛ 地在所屬郡
- ▲ 著名部落
- 國道
- 道鐵
- 道輕
- 道便
- 道大
- 道小
- 道山
- 道峴
- 道河
- 道造
- 道航

備考 道圖ノ部ハ此圖ニ適用セズ

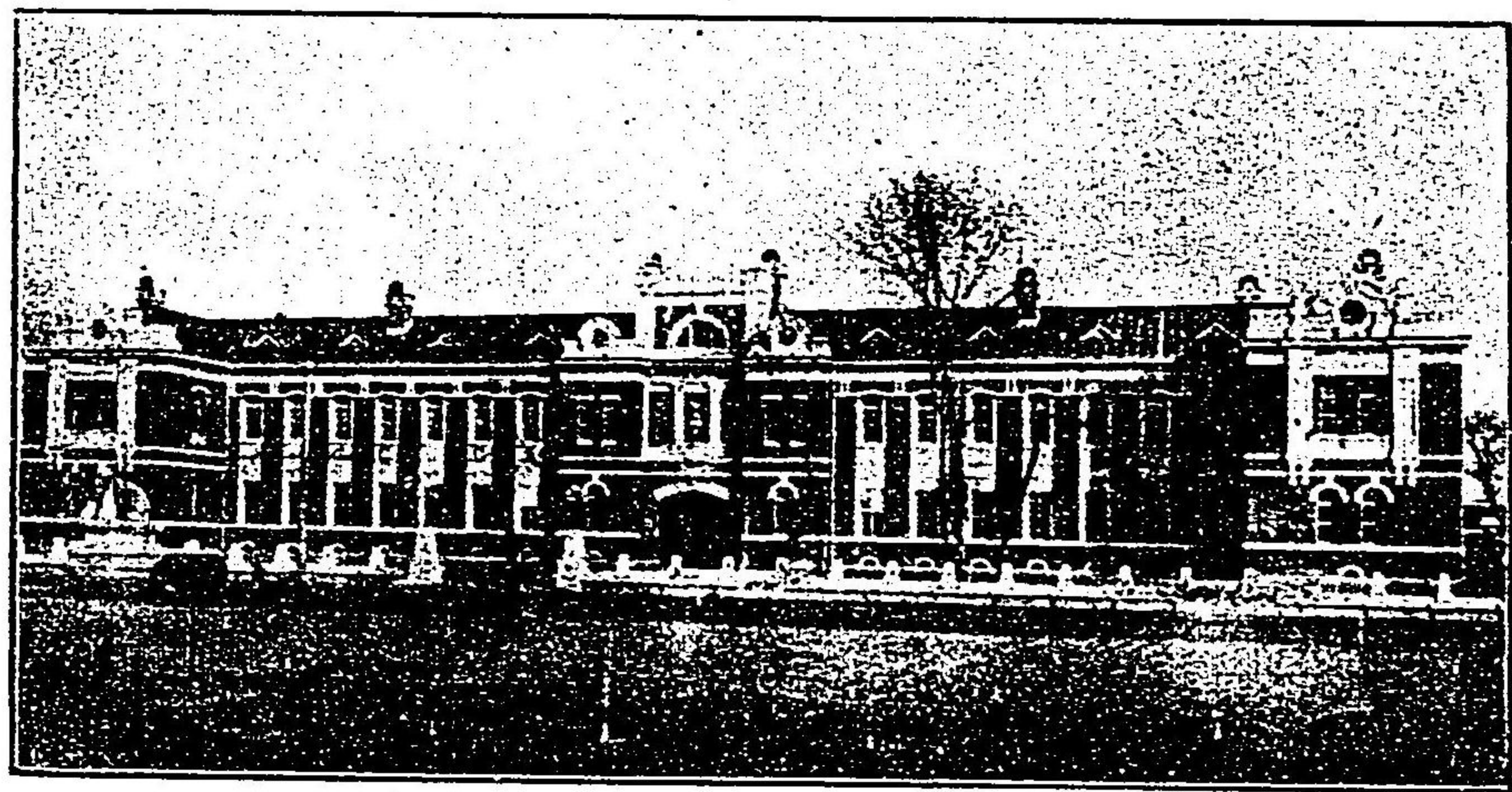
縮尺 二萬四千分之一
日本尺

124° 125° 126° 127° 128° 129° 130° 131°

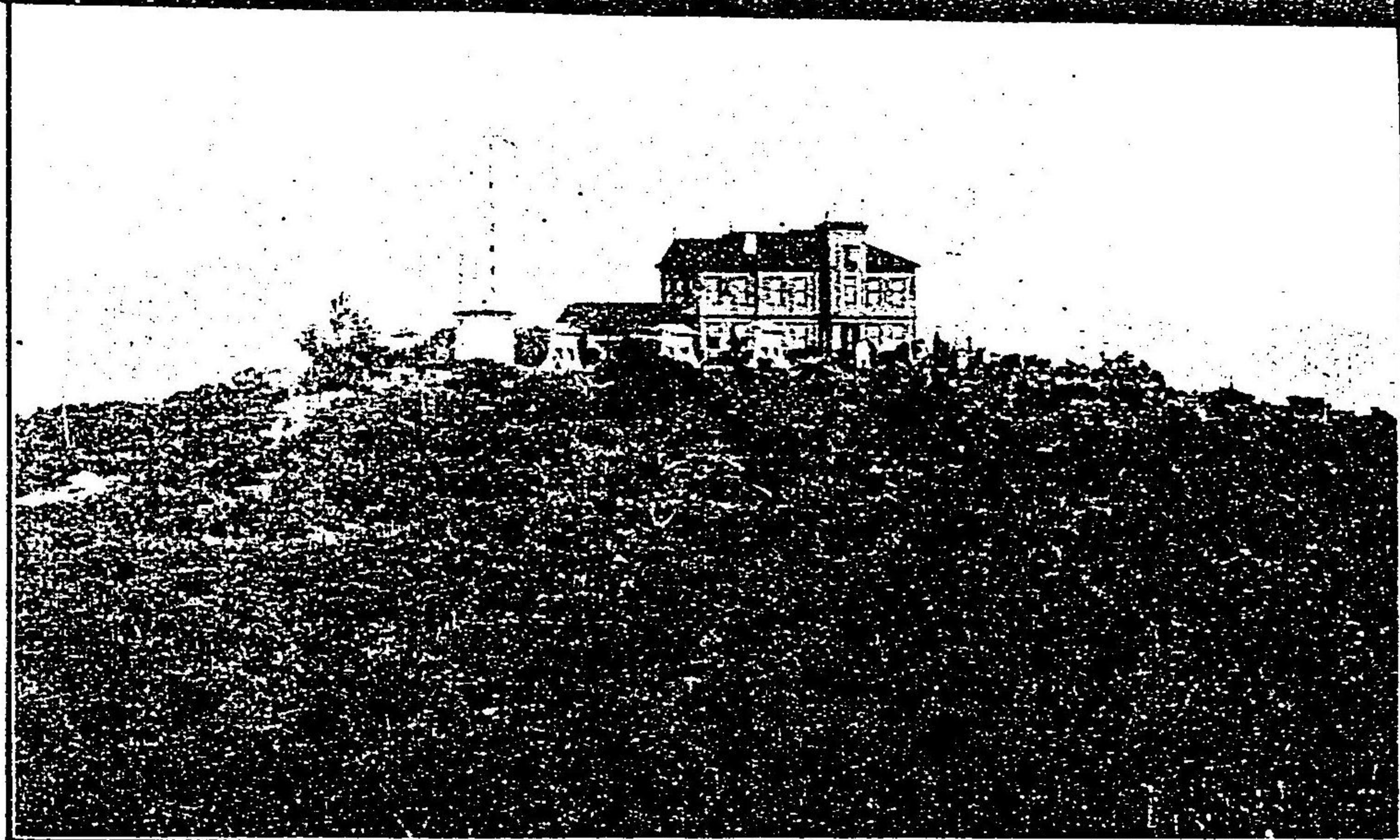
33° 34° 35° 36° 37°



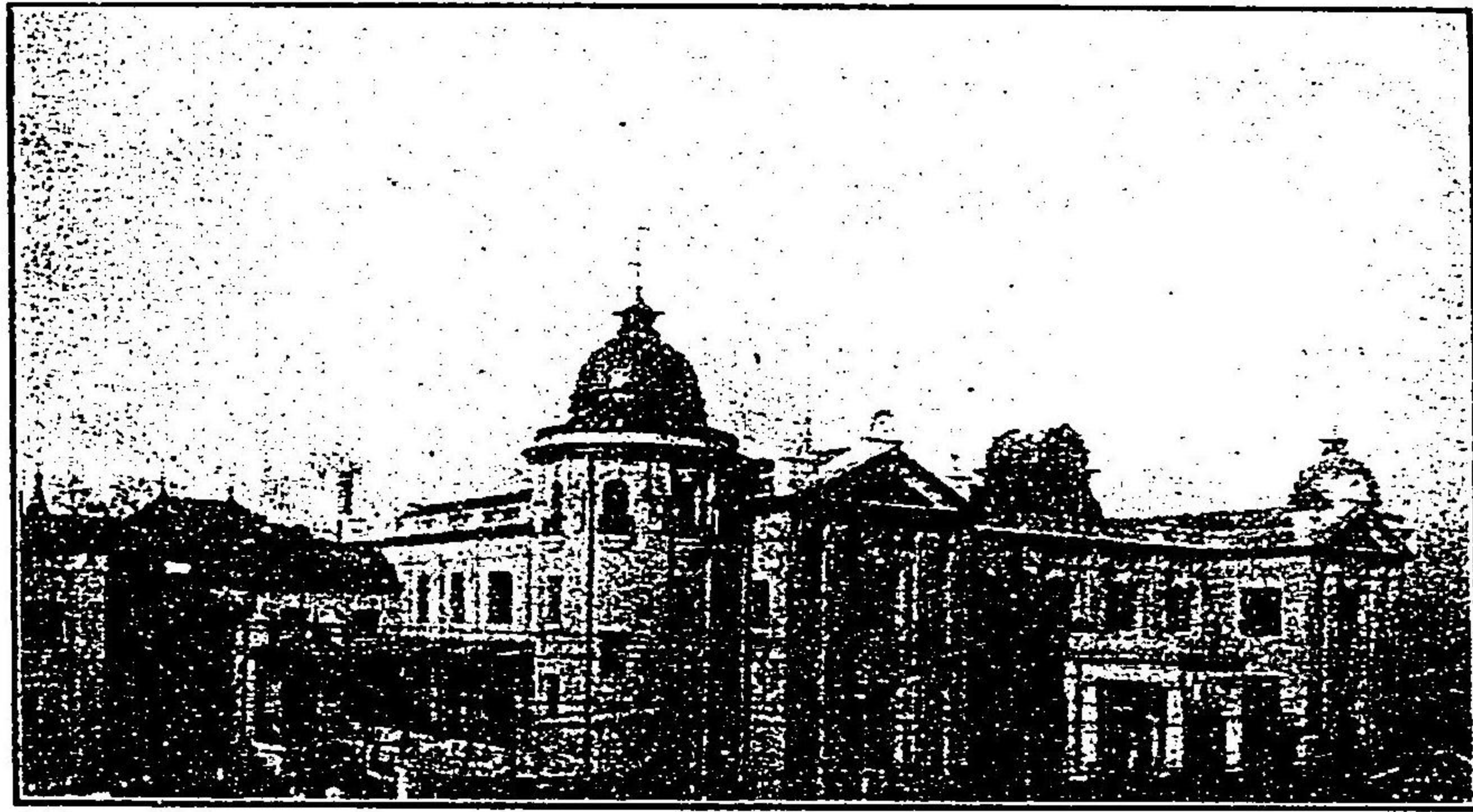
朝鮮總督府



京 畿 道 總 廳



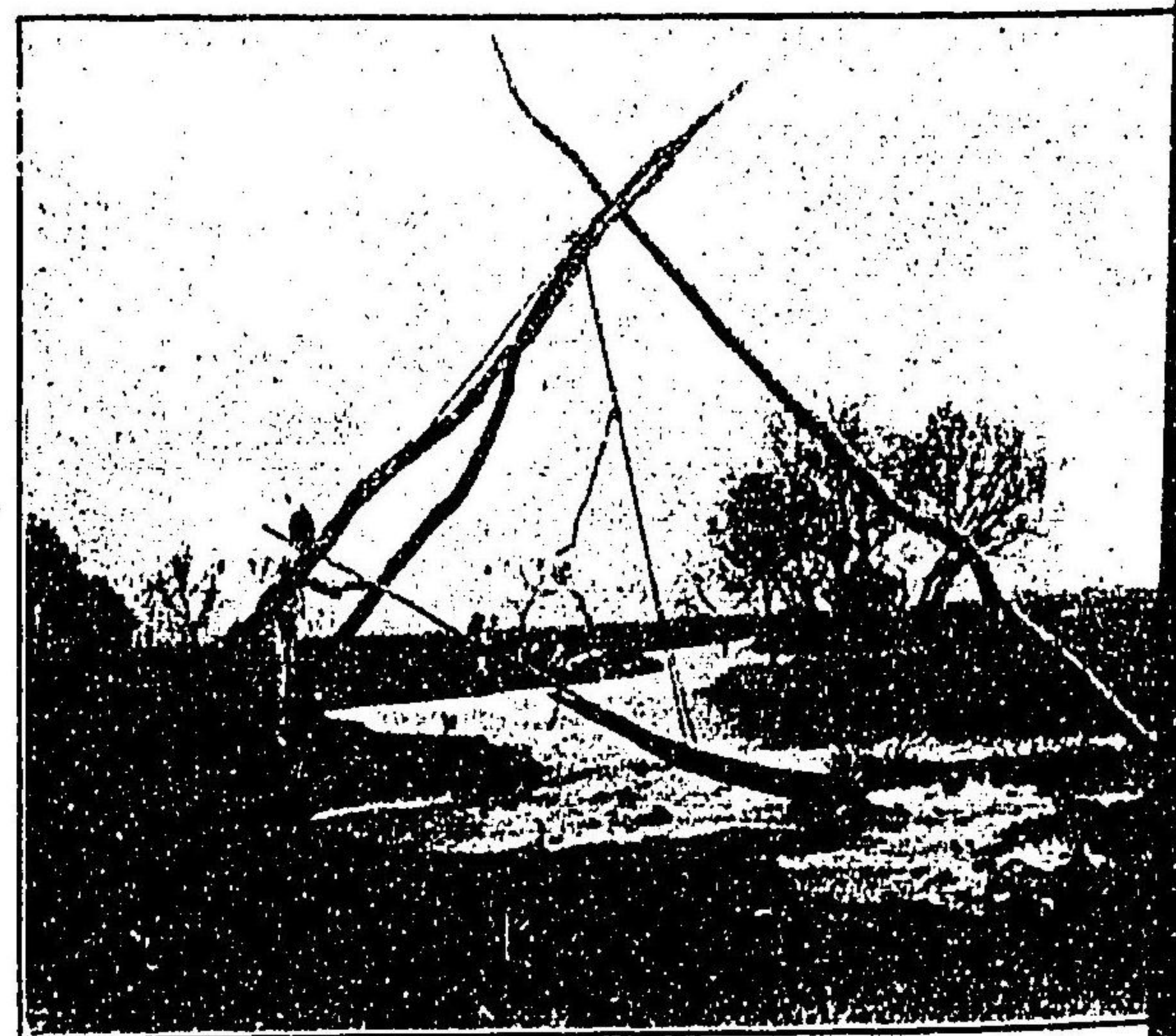
仁川觀測所



朝 鮮 銀 行



牛馬放牧ノ光景



水川濯洗ノ状況

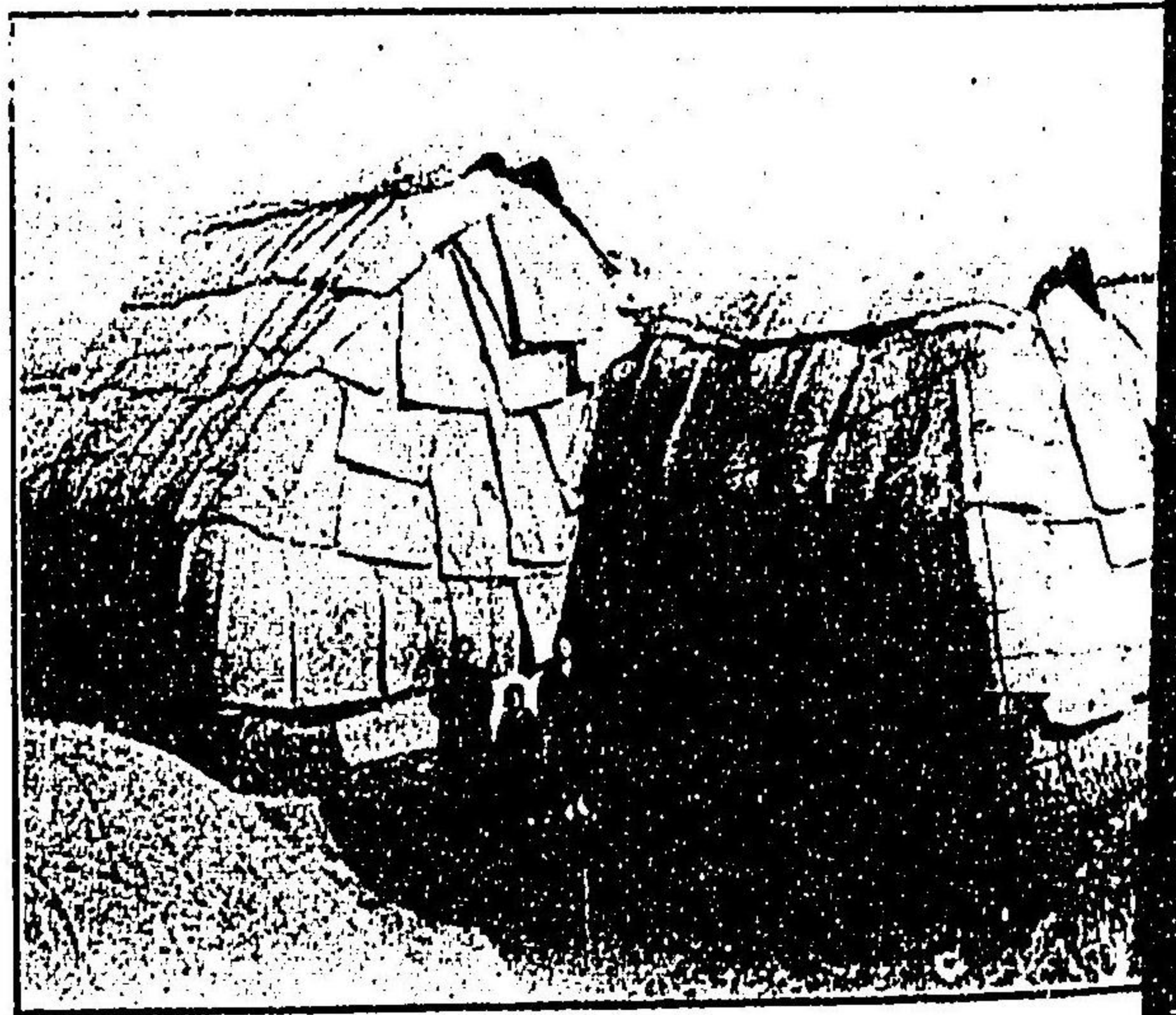
參 人 別 齡 參



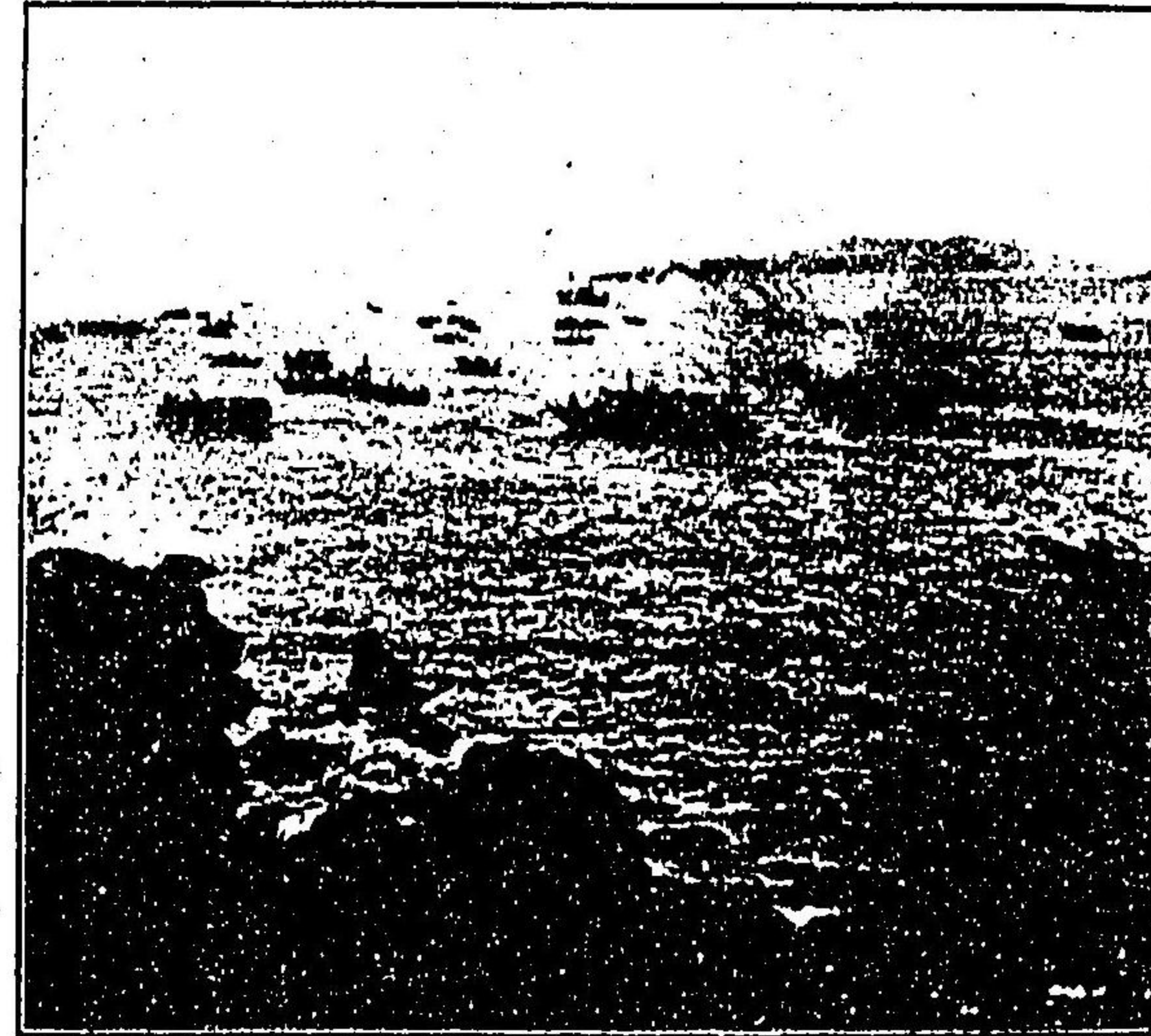
圖 參 人 城 開



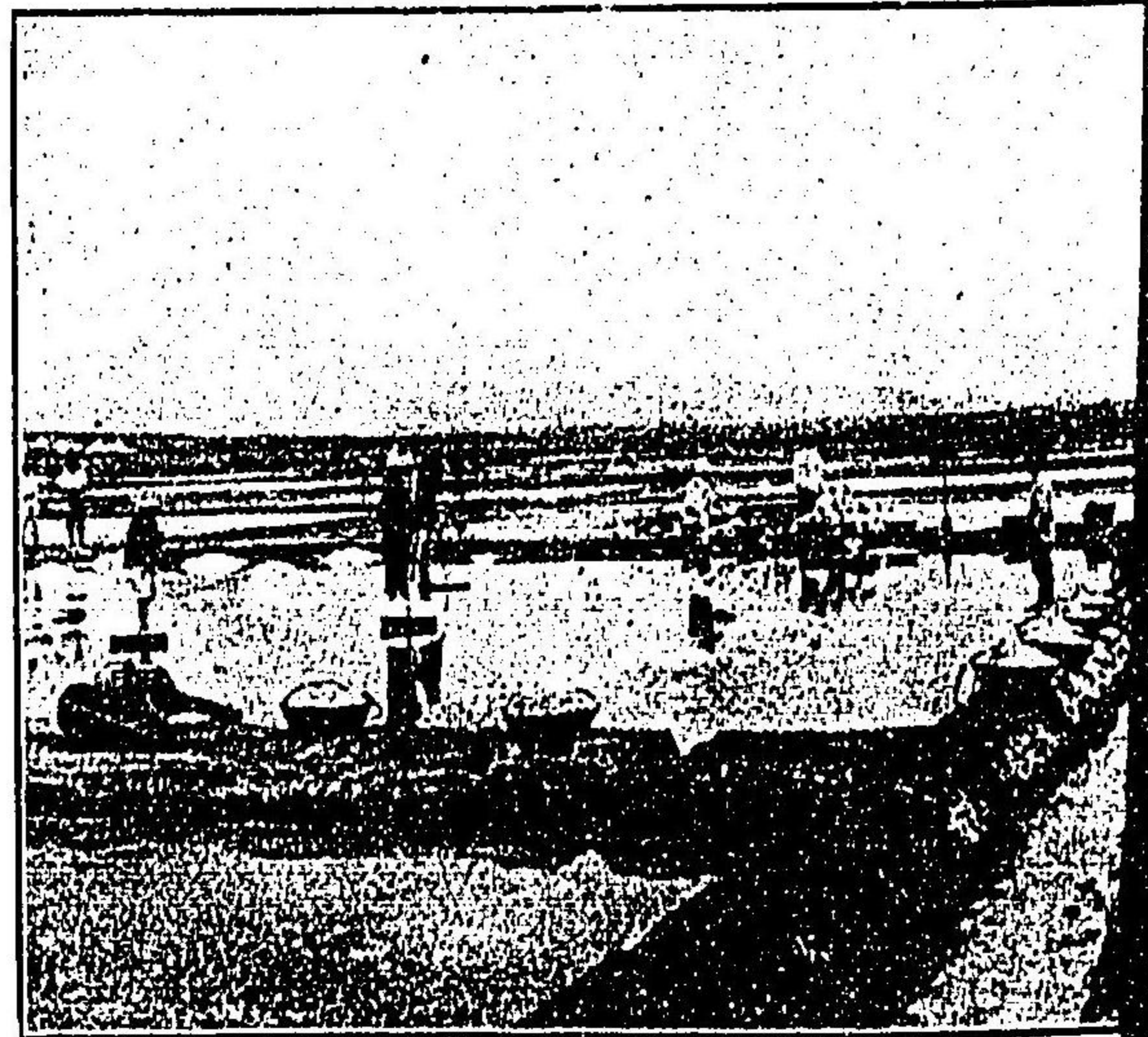
東洋殖産株式會社



小作農の露積景



巨濟島鯖漁



廣梁灣鹽田



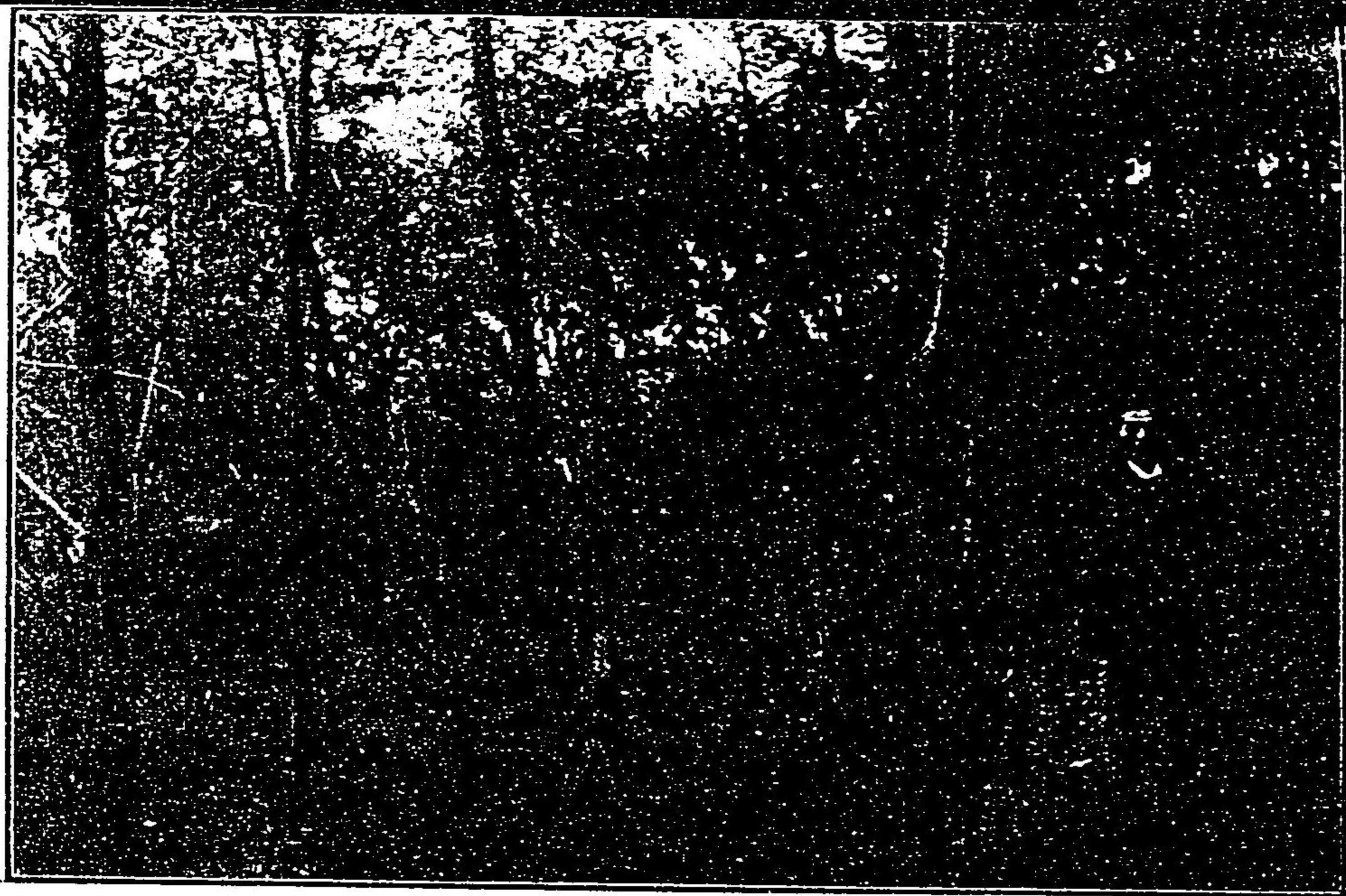
（生年一）林栽植工防砂洞雲白城京



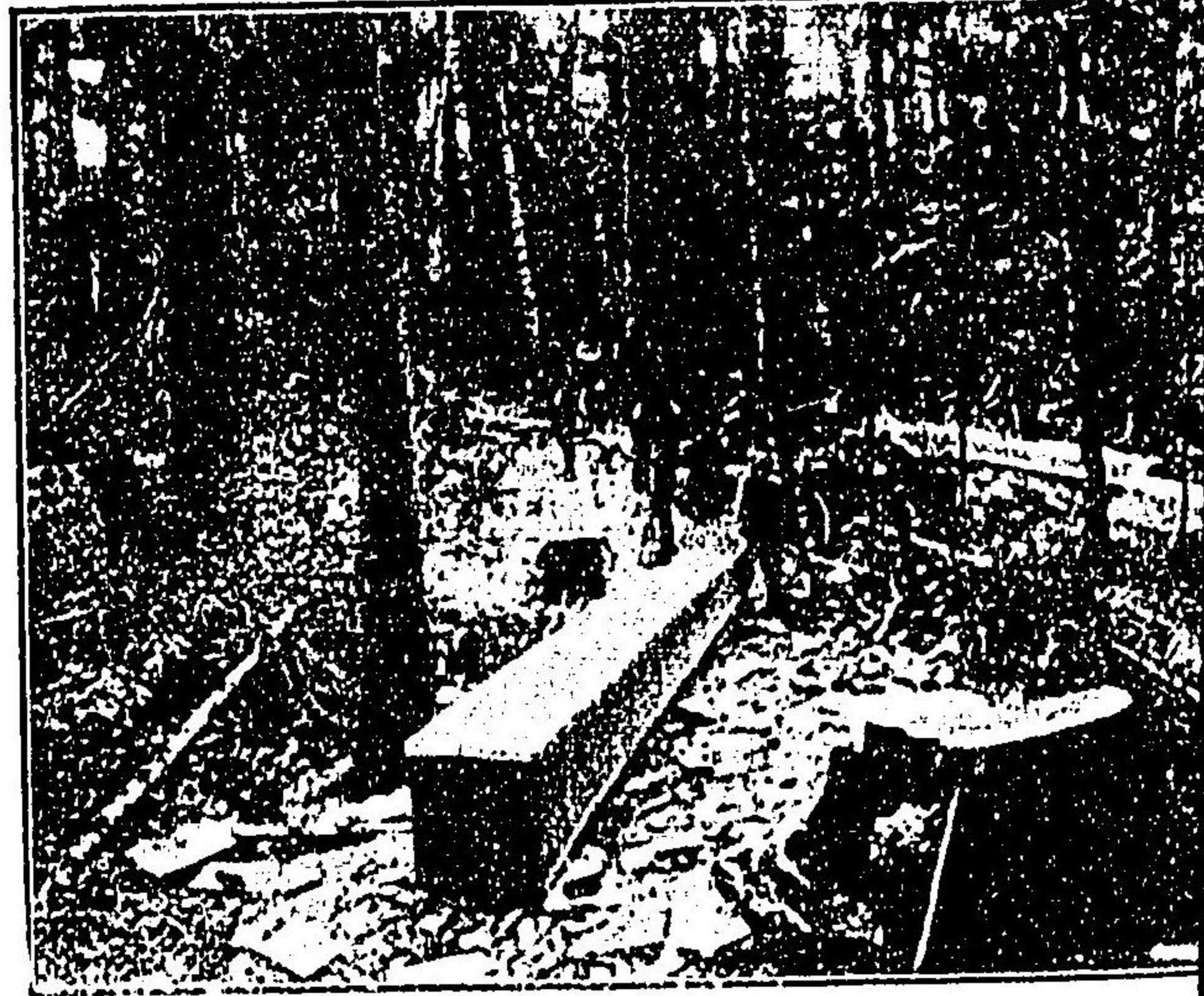
（日年五）上 同



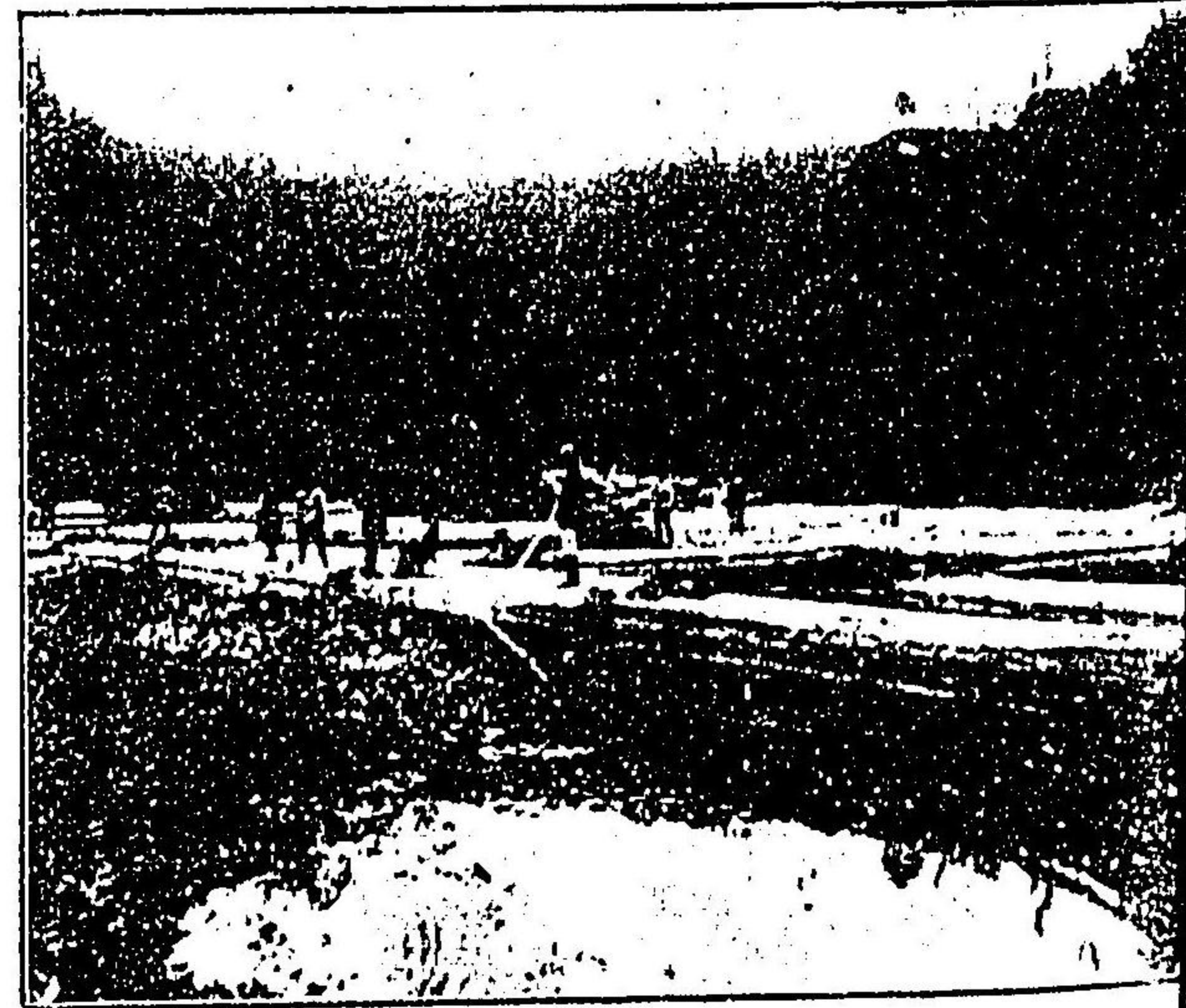
セアカシヤノ人造林(十三年目)



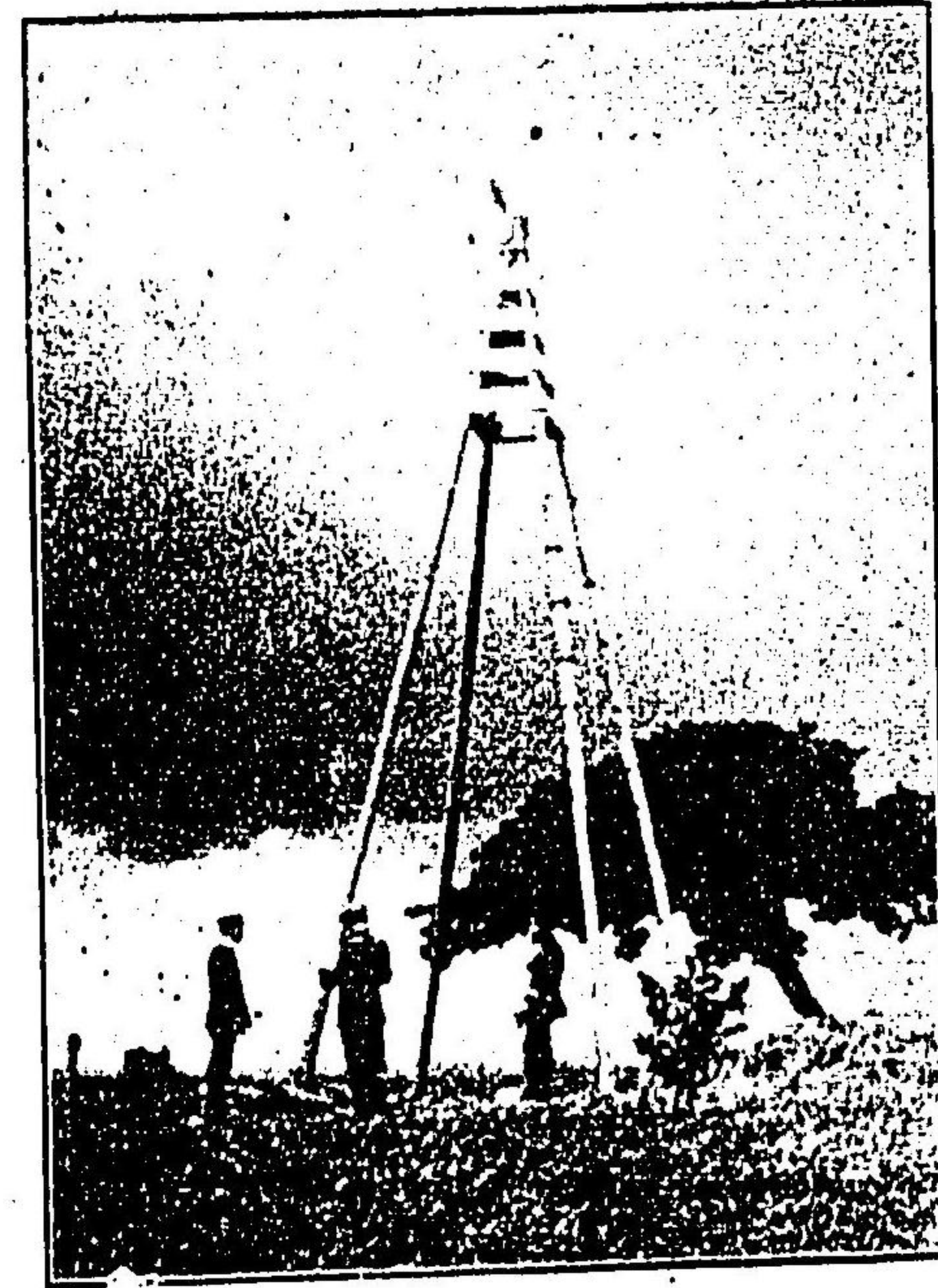
ニセアカシヤノ人遊林(十三年目)



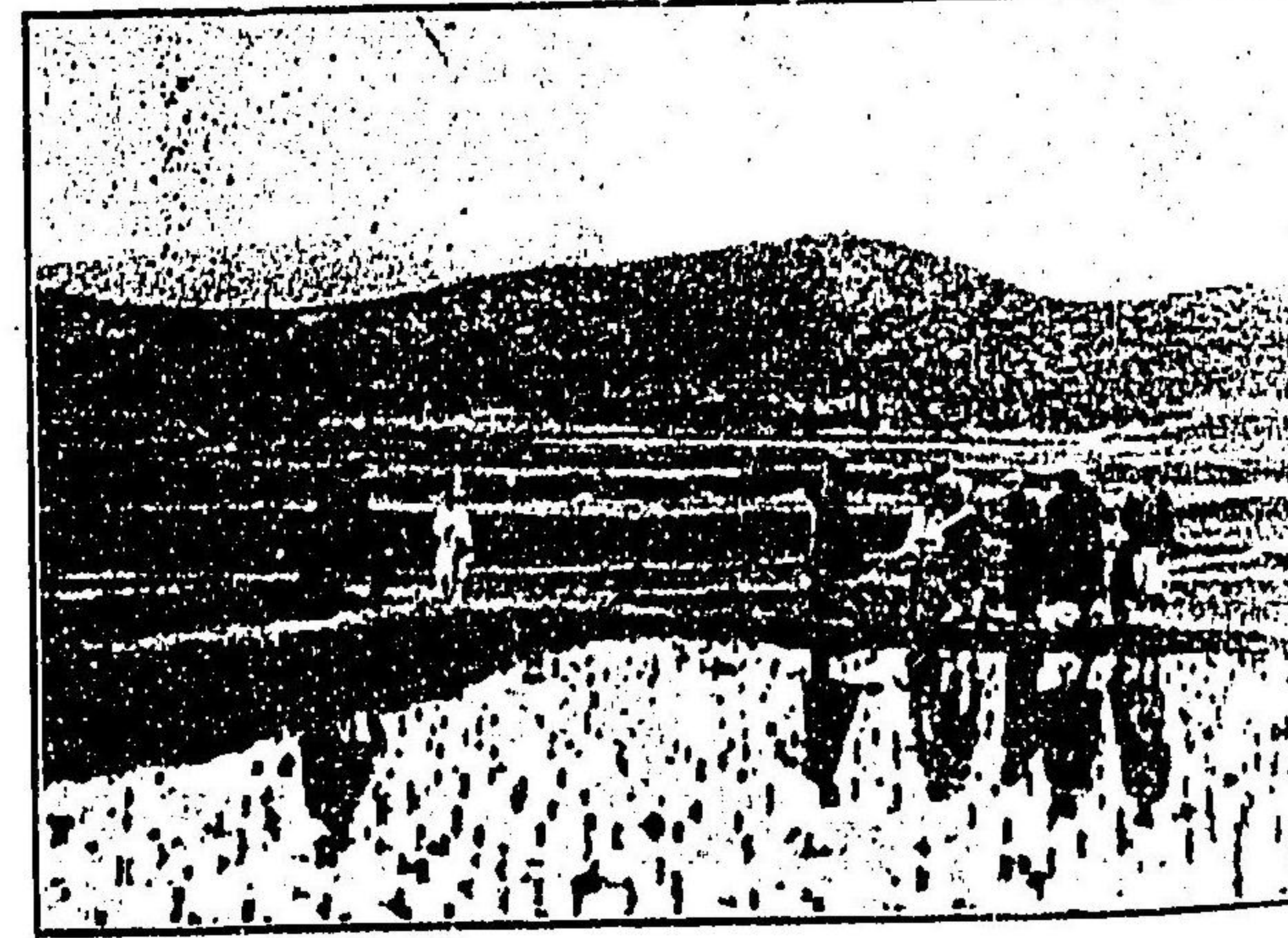
鳴綠江造材光景



同流筏光景



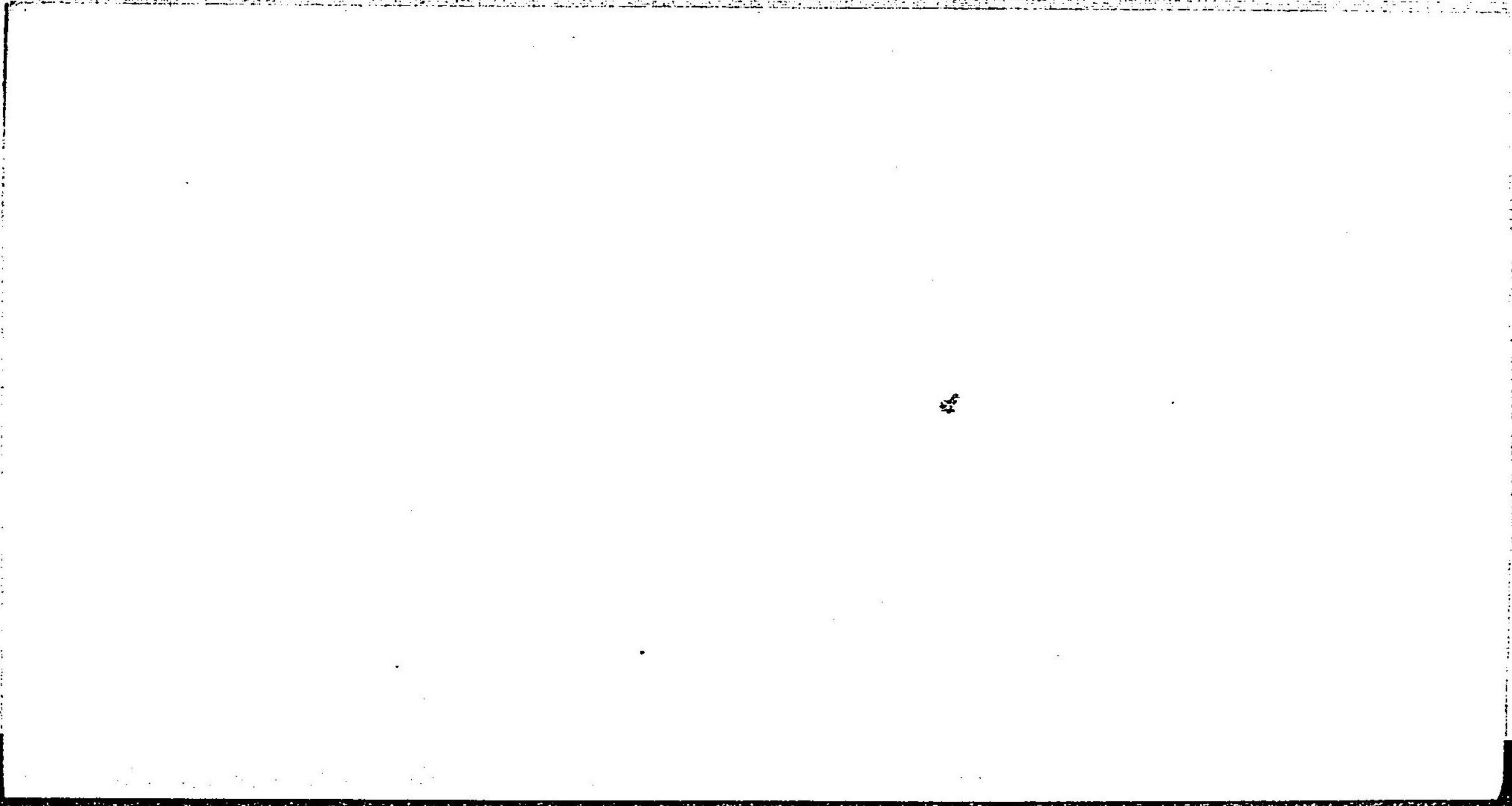
土地調査事業三角補點視察ノ光景



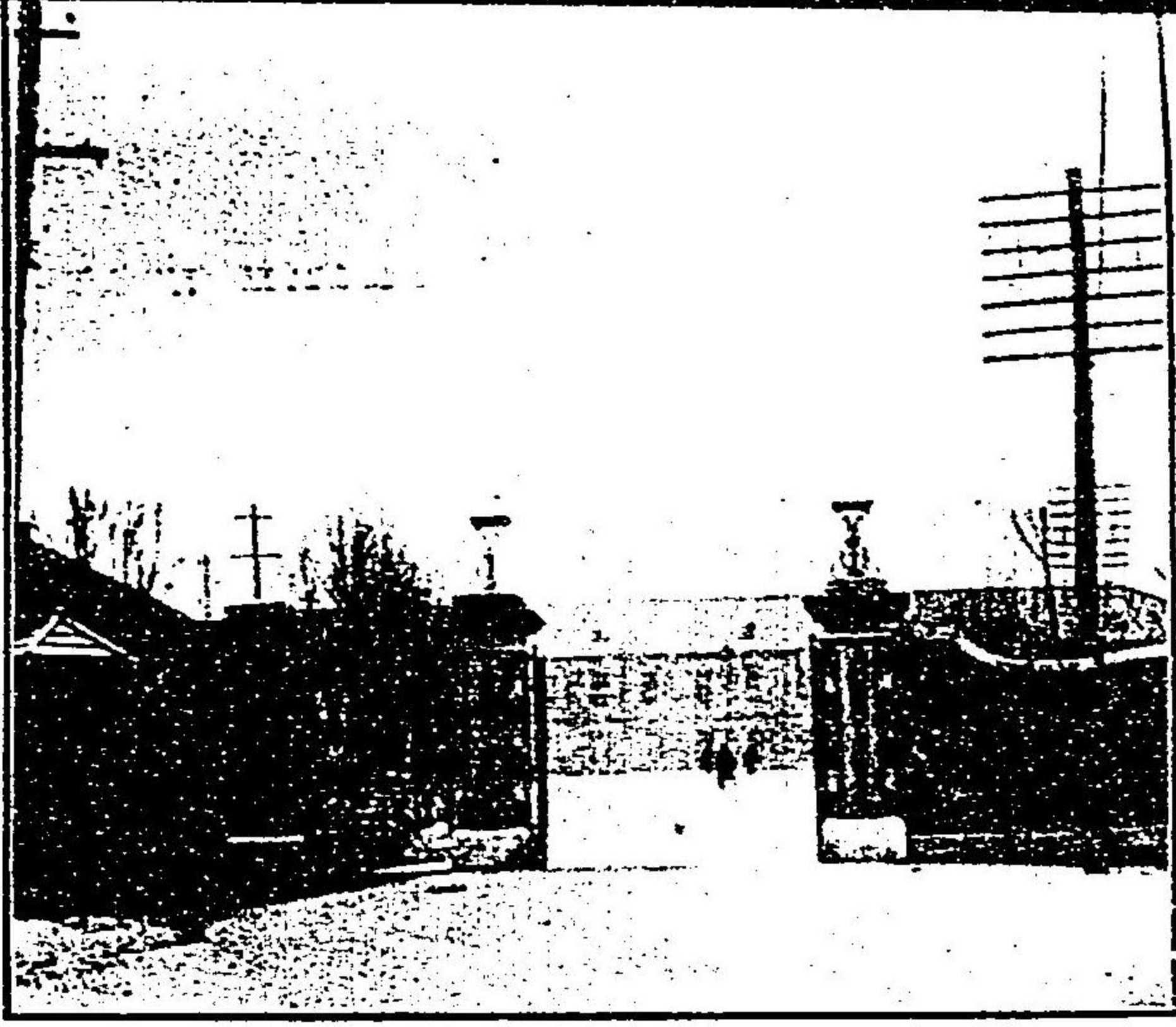
景光ノ業作量測地筆一同



恩 津 彌 勒 石 佛

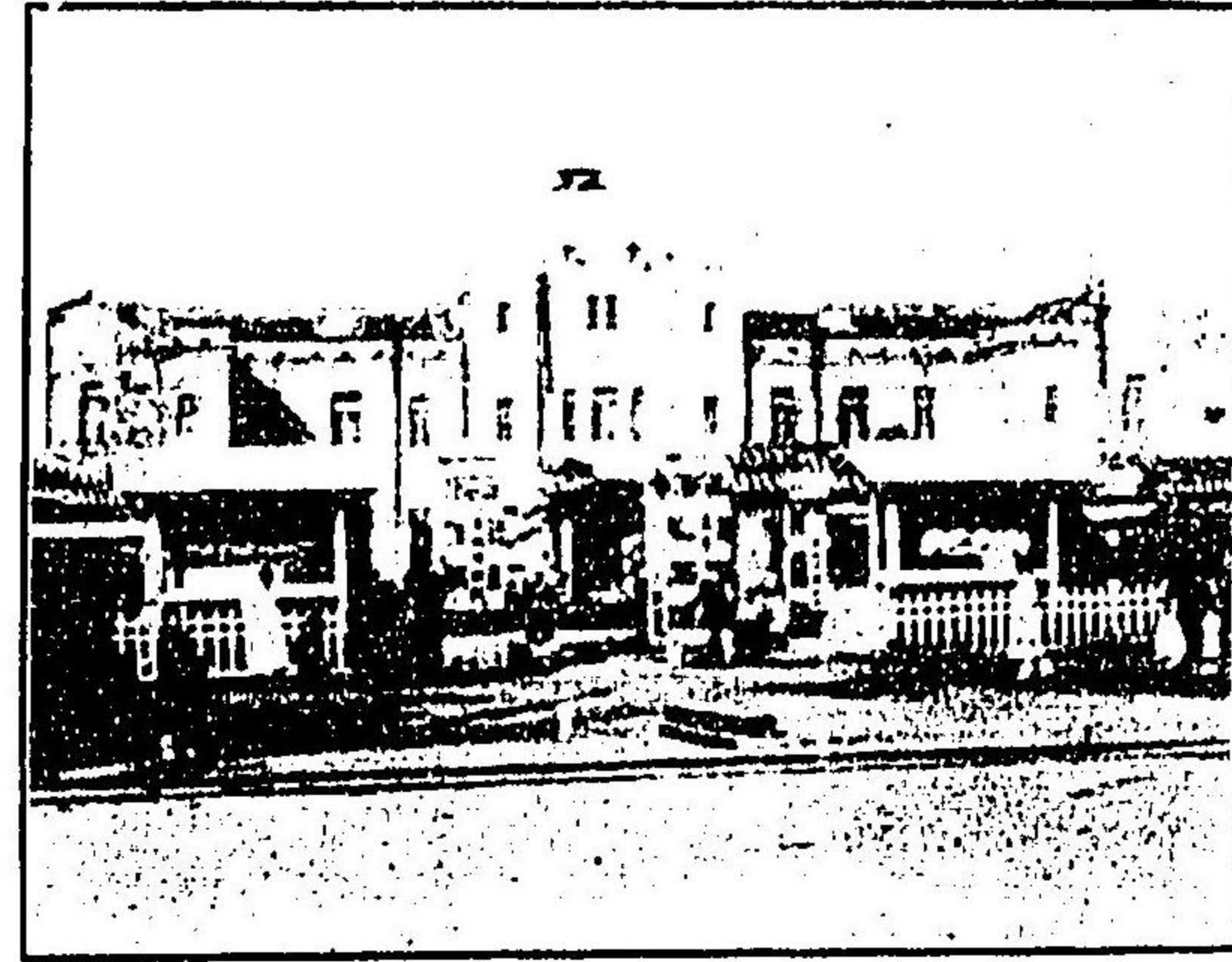


查 巡 馬 騎

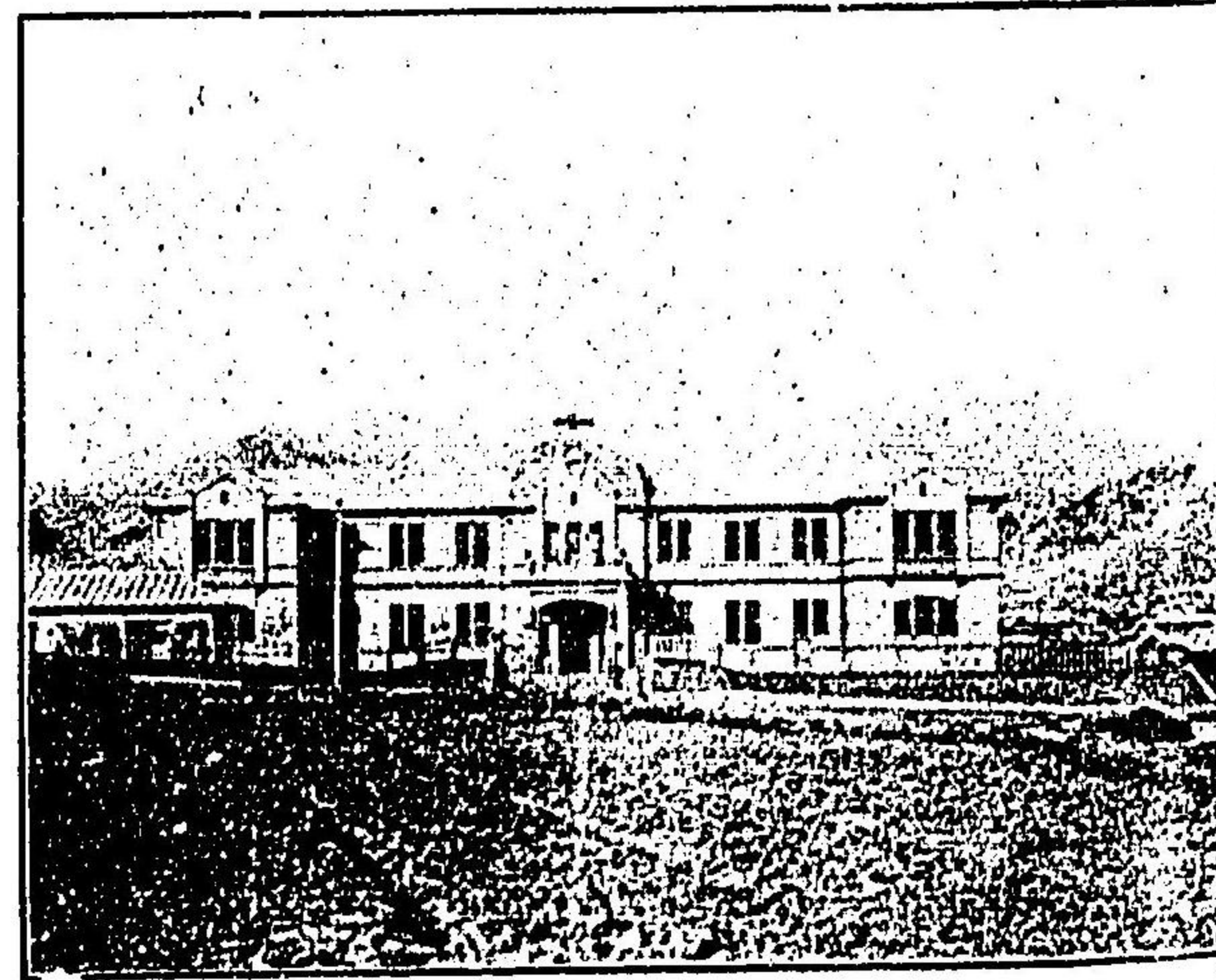


部 令 司 隊 兵 憲

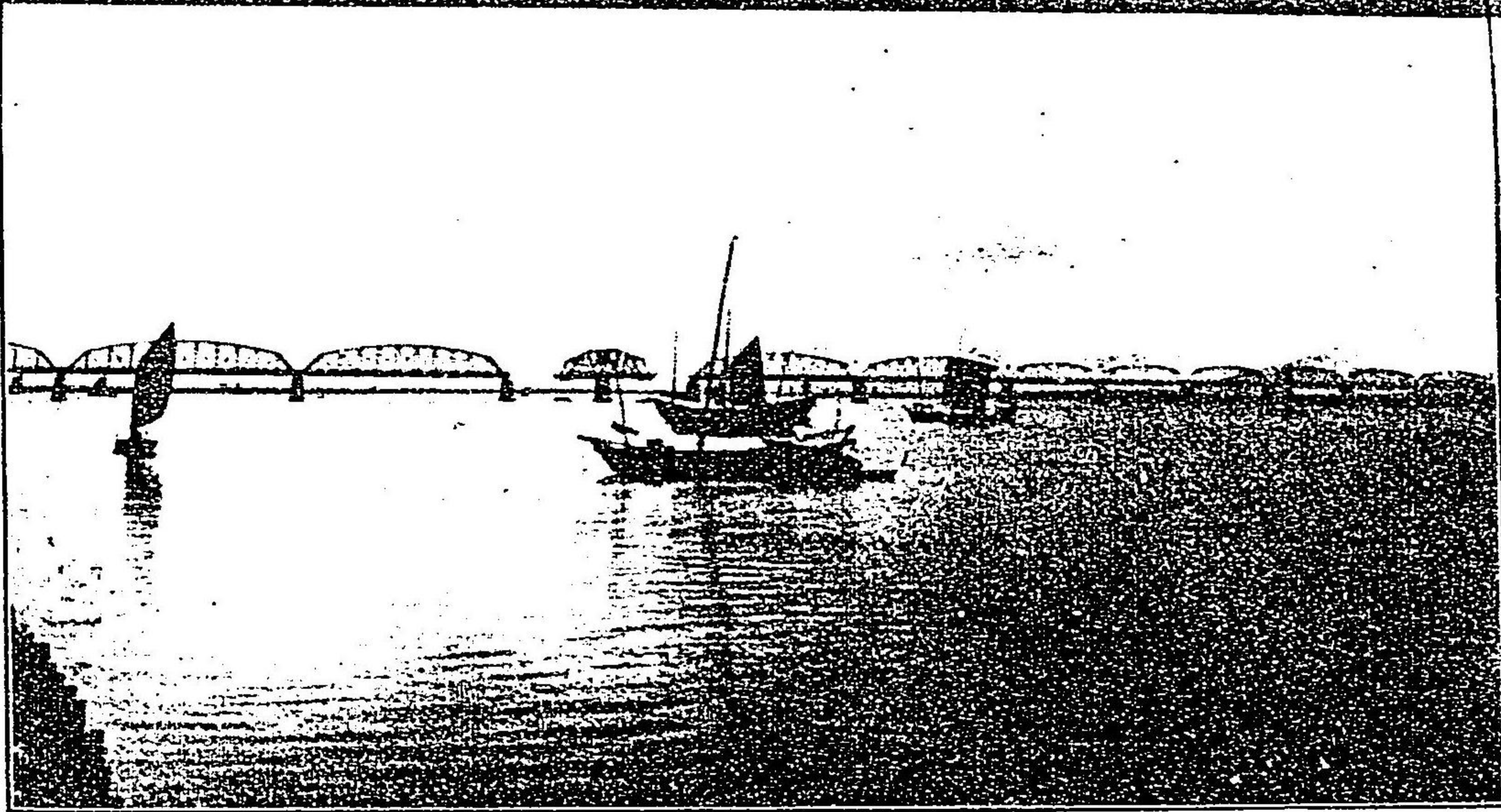
京城控訴院



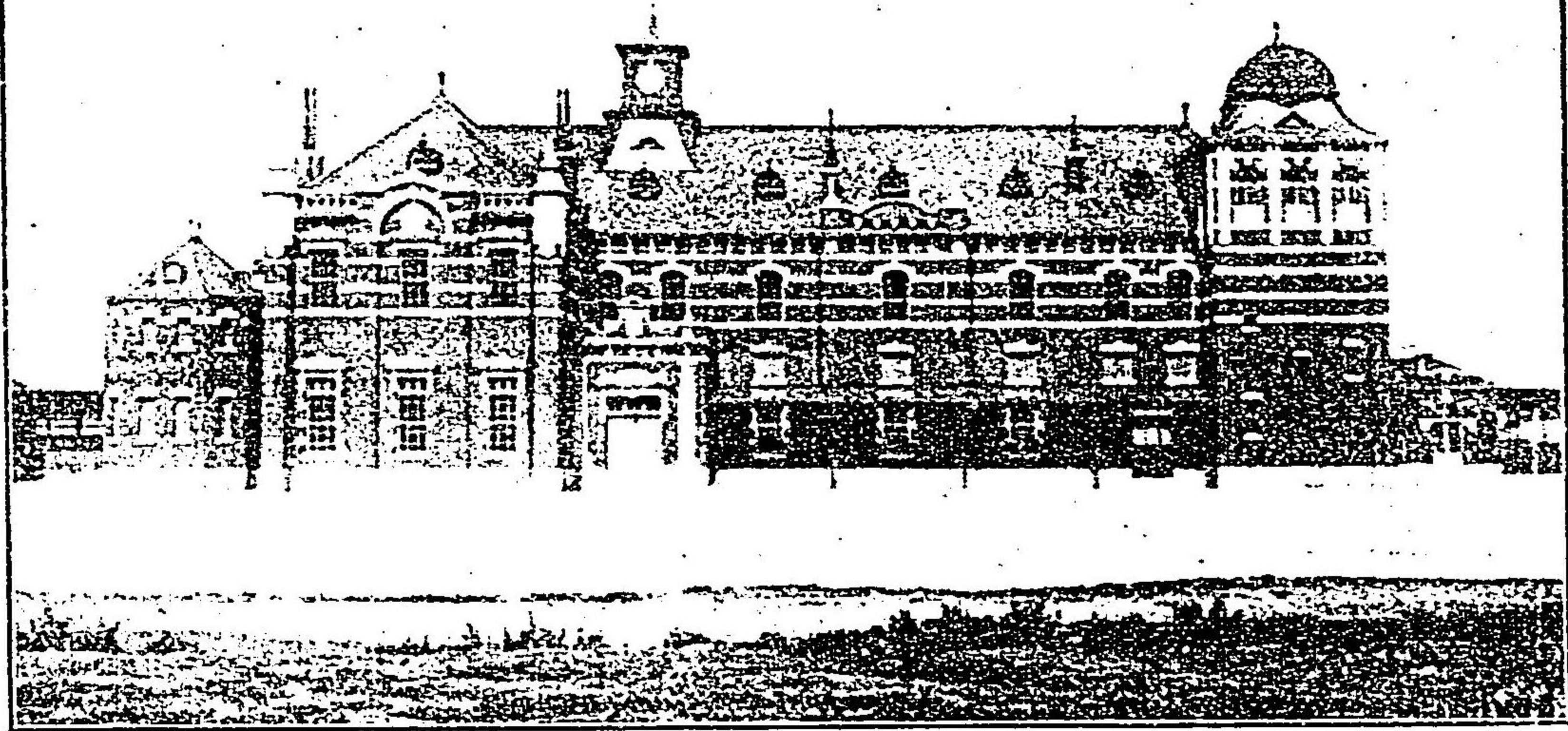
京城地方裁判所



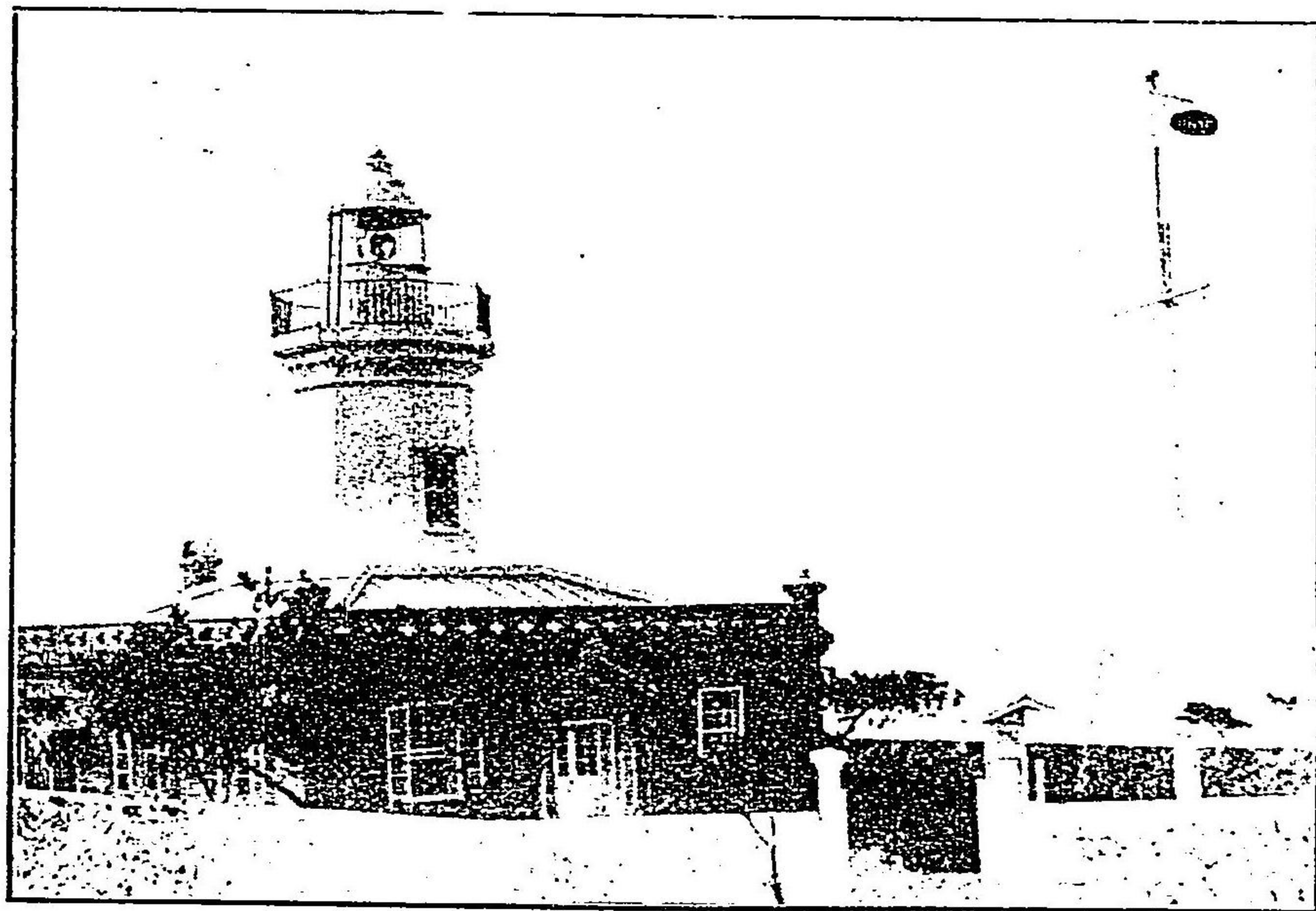
釜山區裁判所 地方裁判所



鴨綠江開閉橋



釜山停車場



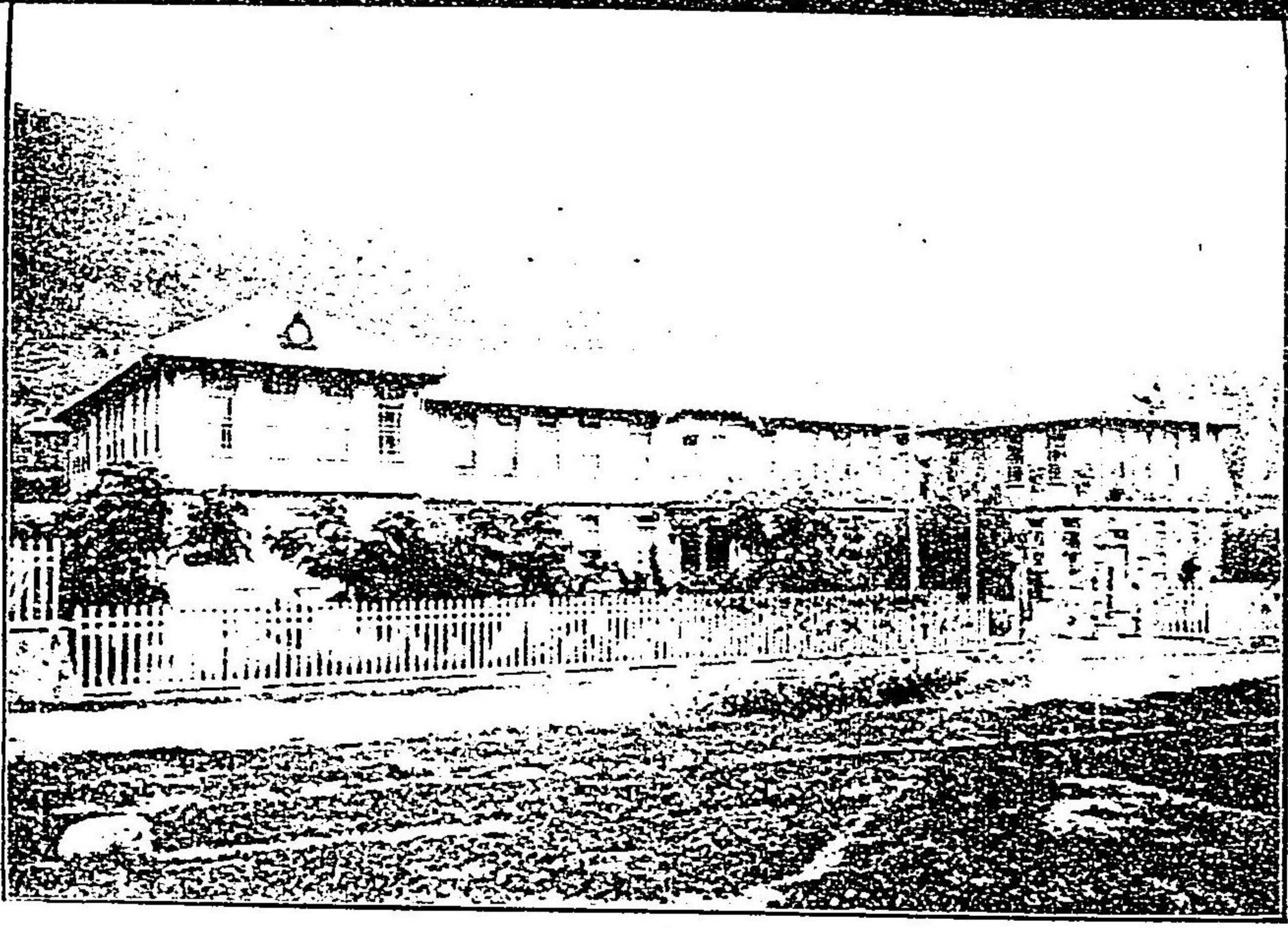
未島燈臺



平 壤 公 立 普 通 學 校



公 立 於 通 普 通 學 校 女 子 教 室



釜山尋常高等小學校

第二版

最近朝鮮事情要覽

凡例

- 一 本書ハ昨年四月刊行ノ最近朝鮮事情要覽ヲ訂正増補シタルモノナリ
- 二 本書ハ最近朝鮮ニ於ケル帝國ノ施設經營ノ一斑及内地人發展ノ狀況其ノ他朝鮮ノ事情ヲ記述シ概テ統計表ヲ附シ以テ概括的觀察ノ便ニ供セムコトヲ期セリ
- 三 本書ハ卷首ニ於テ我朝鮮ニ對スル保護權行使ノ發端ヨリ進ミテ統監府設置ノ沿革並帝國ノ版圖ニ歸シタル概況ヲ特ニ之ヲ韓國併合顛末ト題シ掲載シ又各種產業ノ狀況内地人ノ教育機關等ニ就テハ意ヲ用非以テ

移住者ノ便宜ヲ計レリ

四 本書ハ明治四十四年又ハ明治四十四年度ノ事項ヲ基礎トシ之ヲ記述ス
其ノ調査未タ全カラサルモノハ前年若ハ最近ノ調査ニ據リタリ

明治四十五年度朝鮮總督府豫算ハ未タ公布ヲ經サルモノナルモ參考ノ
爲兩院議定豫算ヲ計上セリ

五 本書ハ短時日ノ調査ニ係リ努メテ速ニ最近ノ事實ヲ蒐集セシ爲書中統
計ニ關スル最近ノ事項ハ他日多少ノ修補アルヘシ

明治四十五年二月

朝鮮總督府

最近朝鮮事情要覽目錄

第一章 韓國併合顛末	一
第二章 地誌	二五
一 地形及地勢	二五
二 氣候	二六
三 人口	三〇
四 重要ナル市街地	四三
第三章 地方行政	七一
第一節 道府郡	七一
第二節 面	七二
第三節 公共團體	七三
一 居留民團	七三

二	學校組合及日本人會	七四
三	水利組合	七七
第四節	地方稅	七九
一	管理	八〇
二	財源	八〇
三	事業	八二
第五節	臨時恩賜金	八九
一	授產事業	九〇
二	教育事業	九二
三	凶歉救濟事業	九二
第六節	濟生院	九五
第七節	土地家屋證明	九五
第四章	財政及經濟	九九
第一節	財政	九九

二

一	財務機關	九九
二	歲計	一〇一
三	特別會計	一一一
四	繳納費	一一二
五	國債	一一三
六	租稅	一一五
第二節	朝鮮經營費	一二〇
第三節	貨幣	一二二
第四節	金融	一二五
一	金融機關	一二五
二	朝鮮銀行	一二七
三	內地人設立銀行	一三〇
四	朝鮮人設立普通銀行	一三一
五	農工銀行	一三二

三

六	漢城共同倉庫株式會社	一三四
七	手形組合	一三五
八	地方金融組合	一三六

第五章

農業

一	土地	一三九
二	農業者	一三九
三	農產物	一五三
四	勸農機關	一六九

第六章

拓殖事業

一	土地ノ經營	一九一
二	殖林經營	一九四
三	移民事業	二〇四
四	資金貸付	二〇五

五	漁業經營	二一〇
---	------	-----

第七章

鑛業

鑛業	二一二
----	-----

第八章

水産業

一	漁場	二二三
二	朝鮮人ノ漁業	二二三
三	内地人ノ漁業	二二五
四	朝鮮海漁業ニ關シ諸府縣ノ保護獎勵	二二九
五	漁業者移住一覽	二三四
六	製鹽業	二三七

第九章

林業

一	森林	二四二
二	殖林事業	二四七
三	部分林	二五三
五		二六六

四 營林廠.....二六七
 五 朝鮮ノ木材.....二七四

第十章 商業

一 外國貿易.....二七八
 二 日鮮貿易.....三〇六
 三 朝鮮内ノ商業.....三〇八
 四 内地人商業.....三一五
 五 税關.....三二〇
 六 度量衡.....三二四

第十一章 工業

一 朝鮮人ノ工業.....三三七
 二 内地人ノ工業.....三三三
 三 官營工業.....三四一

四 工業傳習所.....三四四
 五 工業所有權ノ保護.....三四六
 六 工業獎勵施設一斑.....三四七

第十二章 土地調査

一 沿革.....三四八
 二 目的.....三四八
 三 効果.....三四九
 四 計畫.....三五一
 五 實地調査竝細部測量.....三五二

第十三章 宗教

第十四章 教育.....三七三

一 内地人ノ教育.....三七三
 二 朝鮮人ノ教育.....三九四

第十五章 衛生

- 三 留學生.....四〇六
- 一 一般衛生.....四〇八
- 二 醫療機關.....四一〇
- 三 藥品取締.....四二二
- 四 飲食物取締.....四二三
- 五 屠場.....四二五
- 六 傳染病.....四二五
- 七 水道.....四四三

第十六章 裁判及監獄

第十七章 警察

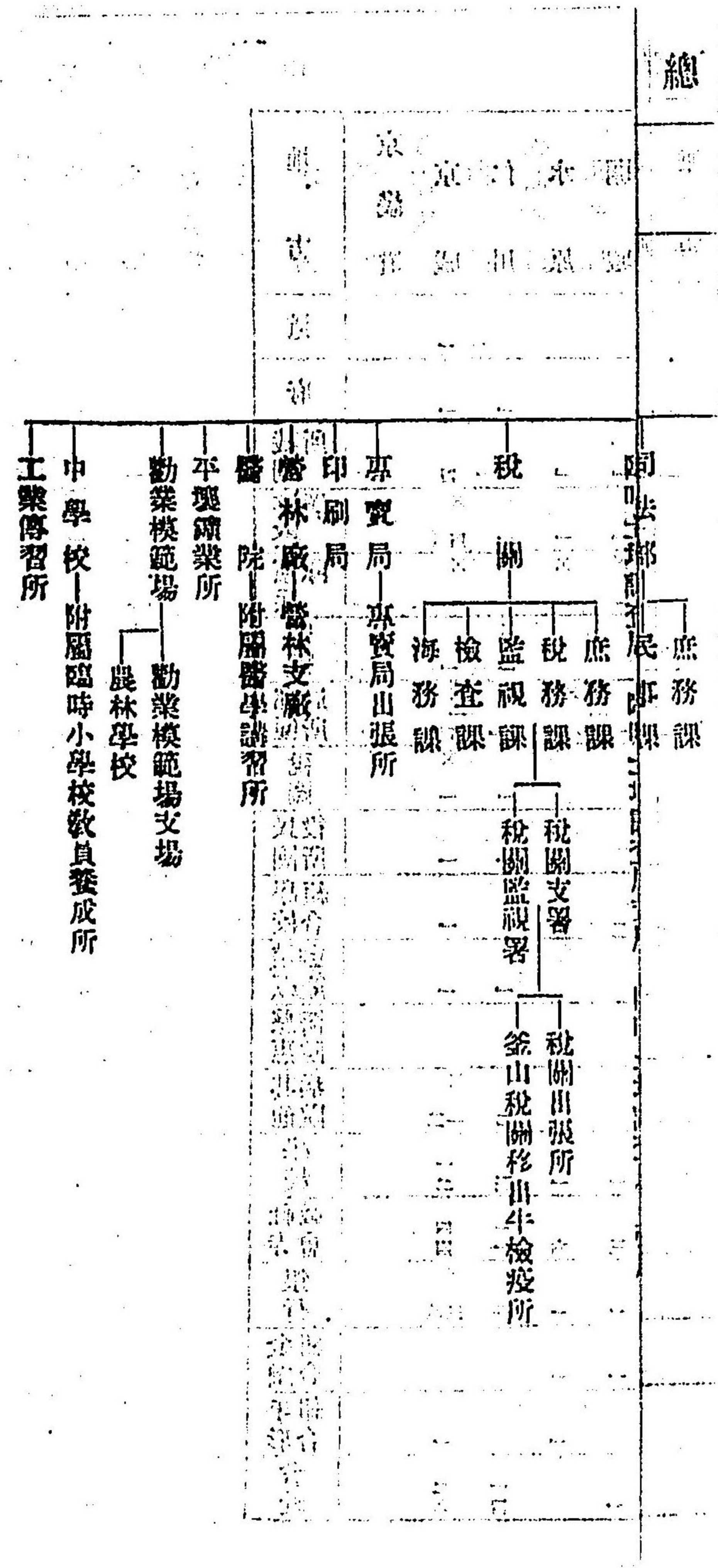
- 一 警備機關之配置.....四九六
- 二 海上警備.....四九七
- 三 警察官之養成.....四九八
- 四 官廳類似其ノ他取締.....四九九
- 五 引火質物貯藏所取締.....四九九
- 六 信用告知業取締.....四九九
- 七 狩獵取締.....五〇〇
- 八 寄附金募集取締.....五〇〇
- 九 消防.....五〇五
- 十 犯罪.....五〇六
- 十一 犯罪即決例實施後ノ狀況.....五〇七
- 十二 民事爭訟調停ノ概況.....五〇八

第十八章 通信

第十九章 交通

- 一 道路.....五三二

二 鐵道.....	五三七
三 關釜聯絡概況.....	五四四
四 海運.....	五四五
五 航路標識.....	五六二
六 江運.....	五六三



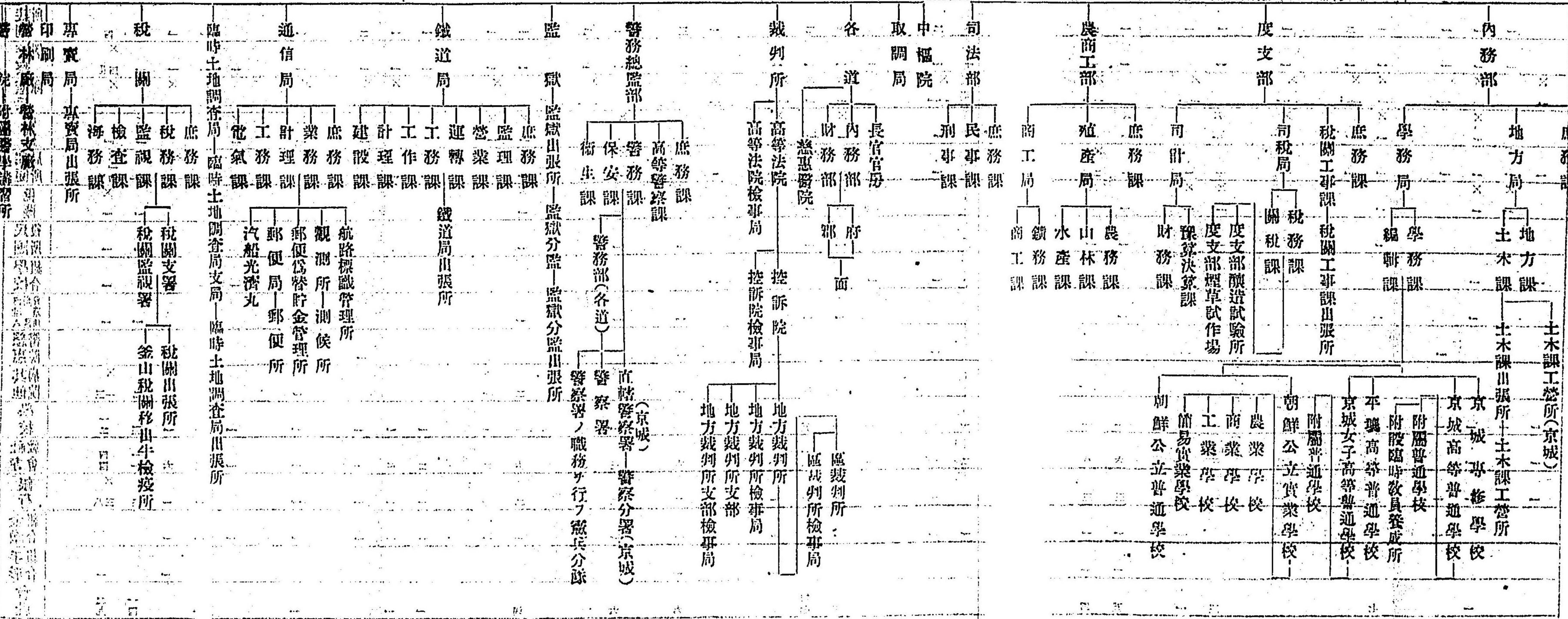
朝鮮總督府及所屬官署覽

朝鮮總督府

明治四十四年十一月一日現在

總督府	總務課	文書課	武官室	秘書課	庶務課	地方課	學務課	庶務課	稅關課	稅務課	司稅局	度支部	農商工部	司法部	中樞院	取調局	各道	裁判所	警務總監部	監獄	鐵道局	通信局	專賣局	印刷局	醫務院	農林部	勸業模範場	中學校	附屬臨時小學校	附屬臨時小學校教員養成所
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	----	-----	-------	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-----	---------	--------------

一其ノ總務課中ノ甲ハ代
 二其ノ總務課中ノ乙ハ代
 三其ノ總務課中ノ丙ハ代
 四其ノ總務課中ノ丁ハ代
 五其ノ總務課中ノ戊ハ代
 六其ノ總務課中ノ己ハ代
 七其ノ總務課中ノ庚ハ代
 八其ノ總務課中ノ辛ハ代
 九其ノ總務課中ノ壬ハ代
 十其ノ總務課中ノ癸ハ代



(六)帝國代表者ト韓國外務大臣トノ間ニ未悉ノ細條ヲ臨機協定スルコトヲ定ム超エテ同年八月二十
 二日ニ至リ日韓兩國政府代表者ハ京城ニ於テ協定シタル協約ニ調印セリ本協約ハ三項ヨリ成リ財政
 外交兩顧問ノ僱聘並韓國政府カ外國トノ條約締結其ノ他重要ナル外交案件即チ外國人ニ對スル特權
 讓與若ハ契約等ノ處理ニ關シテ豫メ帝國政府ト協議スヘキコトヲ規定ス蓋シ二月ノ議定書ニ依リ日
 韓兩國ノ關係大ニ進ミタリト雖韓國ニ於ケル施政改善ノ事タル決シテ容易ニアラス且外交ニ關スル
 議定書ノ取極ハ韓國政府カ同議定書ノ趣意ニ反スル協約ヲ第三國ト締結スルヲ得サルノ一項ニ限リ
 一般外交ノ處理ニ亘リテ詳言スル所ナシ是レ即チ本協約ヲ以テ更ニ兩國ノ關係ヲ一層明確ニ規定シ
 タル所以ナリ

明治三十八年九月日露兩國間ニ締結セラレタル「ポーツマス」條約第二條ニ於テ露國政府ハ帝國カ
 韓國ニ於テ政事上軍事上及經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ帝國カ韓國ニ於テ必要ト認
 ムル指導保護及監理ノ措置ヲ執ルニ方リ之ヲ阻害シ又ハ之ニ干渉セサルヘキヲ約シタリ之ヨリ先キ
 同年八月十二日調印セラレタル日英同盟約款モ亦日本國ハ韓國ニ於テ政事上軍事上及經濟上ノ卓絶

ナル利益ヲ有スルヲ以テ大不列顛國ハ日本國カ該利益ヲ擁護増進セムカ爲ニ正當且必要ト認ムル
 指導監理及保護ノ措置ヲ韓國ニ於テ執ルノ權利ヲ承認スト規定シ即チ一方ニ於テハ日英同盟約款ノ
 支持、他方ニ於テハ日露講和條約ノ承認ニ依リ日韓兩國ノ關係ハ日露戰爭終結ト前後シテ大進捗ヲ
 來タシ韓國ニ對スル帝國ノ地位益々鞏固且明確ヲ加フルニ至レリ帝國政府ハ乃チ此新關係ニ基キ韓
 國ニ對スル保護指導ヲ完クシテ益々兩國ヲ結合スル利益共通ノ主義ヲ鞏固ナラシムコトヲ欲シ此
 目的ヲ以テ同年十一月十七日所謂日韓新協約ヲ締結シタリ同協約ハ前文及五箇條ヨリ成リ(一)外交
 權ノ收受(二)統監ノ駐劄(三)日韓兩國間現存條約及約束ノ效力繼續(四)韓國皇室ノ安寧及尊嚴維持
 ノ保證ヲ約セリ本協約ハ日露戰役中ニ於ケル議定書及協約ヲ享ケテ之ヲ大成シタルモノニシテ永ク
 日韓兩國關係ノ基礎タルヘキモノナリ此ニ於テ帝國政府ハ愈々在京城公使館ヲ撤廢シテ統監府ヲ置
 キ統監ヲ駐劄セシムルニ決シ同年十二月二十日勅令第二百六十七號ヲ以テ統監府及理事廳官制ヲ公
 布シ統監府及理事廳ハ翌明治三十九年二月一日各其ノ事務ヲ開始セリ統監府既ニ設置セラレ韓國ノ
 外交ハ舉クテ帝國政府ノ管理ニ歸シ之ヲ内ニシテハ施政ノ改善漸ク其ノ緒ニ就クト雖一朝ニシテ數

第一章 韓國併合願末

百年ノ積弊ヲ一洗シ保護ノ實ヲ擧ケムコト固ヨリ容易ニアラス加フルニ維新更始ノ際ニ當リ上下ノ人心動モスレハ其ノ撻ヲ所ヲ誤リ各般ノ妨礙百出セリ偶々明治四十年夏ニ至リ海牙密使事件ノ起ルアリ統監ハ更ニ韓國政府代表者ト一ノ協約ヲ訂立シ日韓兩國ノ關係ナ一層密邇セシムルノ必要ヲ認メ同七月二十四日兩國代表者ノ調印ヲ了セリ同協約ハ前文及七箇條ヨリ成リ先ツ前文ニ於テ兩國政府力韓國ノ富強ヲ圖リ韓國民ノ幸福ヲ増進セムトスルノ目的ヲ有スルコトヲ宣明シ(一)韓國政府カ施政改善ニ關シ統監ノ指導ヲ受クルコト(二)法令制定及重要ナル行政上ノ處分ニ付豫メ統監ノ承認ヲ受クヘキコト(三)司法事務ト普通行政事務トノ區別サルヘキコト(四)高等官吏ノ任免ニ統監ノ同意ヲ要スルコト(五)統監ノ推薦ニ依リ日本人ヲ韓國政府ニ任用スルコト(六)統監ノ同意ナクシテ外國人ヲ傭聘セサルコト(七)明治三十七年八月調印日韓協約第一條即チ財政顧問傭聘ノ廢止サルヘキコトヲ約ス此協約ハ明治三十八年ノ新協約ト互ニ相補ヒ特ニ韓國ノ内政改善ニ關シテハ既往三種ノ協約ニ規定スル所ニ比シ一層我保護權行使ノ範圍ヲ擴張セリ

明治四十二年七月ニ至リ韓國ノ司法及監獄事務ヲ我政府ニ委託セシムルノ件ヲ約シ同年十月敕

令第二百三十六號ヲ以テ統監府裁判所令、同第二百四十二號ヲ以テ司法廳官制及同第二百四十三號ヲ以テ監獄官制ヲ公布シ同年十一月一日ヨリ實施シ同時ニ韓國ニ於ケル此等ノ機關ヲ廢止セシメ以テ韓國ニ在留スル帝國臣民暨韓國臣民ノ生命財產ノ保護ヲ確定スルノ基礎ヲ立テタリ次テ翌四十二年六月二十四日帝國ハ韓國ノ警察事務ヲ繼受シ統監府警察官署官制ヲ公布シ七月一日ヨリ之ヲ實施ス斯クノ如クニシテ施政ノ統一ヲ圖リ改善治安ノ途ヲ完クセムコトヲ期セリト雖現代ノ複雜ナル統治制度ニテハ未ダ以テ的確ニ韓國民衆ノ幸福ヲ増進シ公共ノ安寧秩序ヲ保持スルニ足ラス暴徒草賊出沒シ良民ヲ齷害スルモノ全ク其ノ跡ヲ絶ツニ至ラス又不逞ノ徒ハ民衆ノ指囷煽動シ徵稅ニ從事スル日本人官吏ニ對シ特ニ嫌忌ノ念ヲ生シ徵稅ハ之ヲ日本ニ奪去スルモノノ如ク誤解シ甚シキハ是等官吏ニ對シ危害ヲ加ヘントスル者アリ國內ノ形勢ハ依然トシテ平穩ヲ缺キ全然同國ヲ帝國ニ併合スルニ非サレハ全國統治ノ責任ヲ明ニシ有終ノ效果ヲ擧グル能ハサル可キヲ認メタリシカ爾來韓國ノ形勢ハ益非ナルヒノアリ同年十月廿六日ニハ前統監伊藤公爵一韓人ノ爲ニ哈爾濱ニ於テ狙撃セラレ暴ニ斃去セラレ、アリ天下擧テ哀歎シ帝國ハ國勢ヲ以テ公ノ凶變ヲ弔ヘリ併合ノ議漸ク是ヨリ動キ

第一章 韓國併合顛末

シト雖未タ之ヲ遂行スルノ機運ニ到達セザリキ

二

明治四十三年五月統監子爵曾爾荒助病ヲ以テ職ヲ退キ陸軍大臣子爵寺内正毅統監ニ兼任セラレ七月二十三日赴任ス當時ノ狀勢ハ併合ノ一日モ忽ニスヘカラサルモノアルヲ認メ乃チ韓國政府ノ當局者ト會見シテ帝國政府ノ所信ヲ披瀝シ且帝國一方ノ意思ニ基ク宣言的併合ヨリモ當時ノ韓國統治者トノ間ニ意思ヲ疏通シ條約ヲ締結シ韓國皇帝自ら進ミテ統治權ヲ天皇陛下ニ讓渡セラル、ヲ適當ト信シ之ヲ進言シタルニ韓國當局者モ亦其ノ相互永遠ノ福利ヲ増進スル所以ナルヲ確認シ爾來併合案件ニ關シ數次交渉ヲ重ね兩國政府ノ意見茲ニ一致シ八月二十一日統監ハ併合條約案ヲ帝國政府ニ打電シ御親斷ヲ仰キタリ同月二十二日臨時樞密院會議ヲ開カレ併合條約案件ヲ裁可セラレ韓國政府ニ於テモ亦直チニ皇帝ノ裁可ヲ仰キタルニ皇帝ハ能ク時勢ヲ洞觀セラレ併合ノ兩國永遠ノ幸福ヲ増進スヘキモノナルコトヲ認メラレ直ニ裁可ヲ與ヘラレタルヲ以テ同日寺内統監ハ韓國總理大臣李完用トノ間ニ併合條約ニ關印セリ而シテ韓國皇室ノ安寧ト尊嚴ヲ維持スルニ至リテ

ハ終始渝ルコトナク今回ノ併合條約ニ於テ前韓國皇帝、太皇帝、皇太子並其ノ皇妃及後裔ヲシテ各其ノ地位ニ應シ相當ナル尊稱、威嚴及名譽ヲ享有セシメ且之ヲ保持スルニ十分ナル歳費ヲ供給スルコトヲ約セラレタリ尙併合條約ノ締結ニ際シテハ一ニ和衷協同ニ山リ管ニ四滿ノ協議ヲ遂ケタルノミナラス形式ニ於テモ總テ遺漏ナカラムコトヲ期シ完全ニ之ヲ履行セリ而シテ帝國政府ハ列國ニ通牒スルニ韓國併合ノ事ヲ以テス同月二十九日詔書ノ煥發ト共ニ併合條約ヲ公布セラル 詔書ニ曰ハク

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國カ禍亂ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓國ノ現制ハ尙未ダ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス懸懼ノ念毎ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ増進セムカ爲ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可ラサルコ

第一章 韓國併合願末

ト瞭然タルニ至レリ

八

朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ舉テ日本帝國ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ
已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合スルコトトナセリ
韓國皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖相當ノ優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接朕カ緩撫ノ下ニ立
チテ其ノ康福ヲ増進スヘク産業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘシテ東洋ノ
平和ハ之ニ依リテ愈々其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ
朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有
司克ク朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシム
ルコトヲ期セヨ

併合條約ノ全文ハ左ノ如シ

日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ハ兩國間ノ特殊ニシテ親密ナル關係ヲ願ヒ相互ノ幸福ヲ増進シ東
洋ノ平和ヲ永久ニ確保セムコトヲ欲シ此ノ目的ヲ達セムカ爲ニハ韓國ヲ日本帝國ニ併合スルニ如
カサルコトヲ確信シ茲ニ兩國間ニ併合條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲ニ日本國皇帝陛下ハ統監子
爵寺內正毅ヲ韓國皇帝陛下ハ內閣總理大臣李完用ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ右全權委員ハ
會同協議ノ上左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

韓國皇帝陛下ハ韓國全部ニ關スル一切ノ統治權ヲ完全且永久ニ日本國皇帝陛下ニ讓與ス

第二條

日本國皇帝陛下ハ前條ニ掲ケタル讓與ヲ受諾シ且全然韓國ヲ日本帝國ニ併合スルコトヲ承諾ス

第三條

日本國皇帝陛下ハ韓國皇帝陛下太皇帝陛下皇太子殿下皇后妃及後裔ヲシテ各其ノ地位ニ應シ
相當ナル尊稱、威嚴及名譽ヲ享有セシメ且之ヲ保持スルニ十分ナル歳費ヲ供給スヘキコトヲ約ス

第一章 韓國併合願末

九

第四條

日本國皇帝陛下ハ前條以外ノ韓國皇族及其ノ後裔ニ對シ各相當ノ名譽及待遇ヲ享有セシメ且之ヲ維持スルニ必要ナル資金ヲ供與スルコトヲ約ス

第五條

日本國皇帝陛下ハ勳功アル韓人ニシテ特ニ表彰ヲ爲スヲ適當ナリト認メタル者ニ對シ榮爵ヲ授ケ且恩金ヲ與フヘシ

第六條

日本國政府ハ前記併合ノ結果トシテ全然韓國ノ施設ヲ擔任シ同地ニ施行スル法規ヲ遵守スル韓人ノ身體及財產ニ對シ十分ナル保護ヲ與ヘ且其ノ福利ノ増進ヲ圖ルヘシ

第七條

日本國政府ハ誠意忠實ニ新制度ヲ尊重スル韓人ニシテ相當ノ資格アル者ヲ事情ノ許ス限リ韓國ニ於ケル帝國官吏ニ登用スヘシ

第八條

本條約ハ日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ノ裁可ヲ經タルモノニシテ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス右證據トシテ兩全權委員ハ本條約ニ記名關印スルモノナリ

明治四十三年八月二十二日

統 監 子爵 寺 内 正 毅 印

隆熙四年八月二十二日

内閣總理大臣 李 完 用 印

同日舊韓國皇帝ハ舊韓國臣民ニ對シ左ノ勅諭ヲ發セラレ曰ク

朕否徳ニシテ艱大ナル業ヲ承ケ臨御以後今日ニ至ル迄維新ノ政令ニ關シ亟圖シ備試シ力未タ嘗テ至ラスンハアラスト雖由來積弱ヲ爲シ疲弊極處ニ至ル時日固ニ挽回ノ措置取ラシ晝夜憂慮善後ノ策茫然タリ此ニ任シ支離益々甚シケレハ自ラ終局拾收シ得サルニ底ラン寧ロ大任ヲ人ニ託シ完全ナル方法ト革新ナル功效ヲ發セシムルニ如カス故ニ朕於是阻然内ニ省ミ廓然自ラ斷シ茲ニ韓

第一章 韓國併合願末

國ノ統治權ヲ從前ヨリ親信依仰シタル隣國大日本皇帝陛下ニ讓與シ外東洋ノ平和ヲ鞏固ニシ内八
城ノ民生ヲ保全セントス惟フニ爾大小臣民國勢ト時宜トヲ深察シ煩擾スルコト勿ク各々其ノ業ニ
安ンシ日本帝國ノ文明新政ニ服從シ幸福ヲ共受セヨ朕ノ今日ノ此ノ舉ヤ爾有衆ヲ忘ル、ニ非ス唯
爾有衆ヲ救活セントスルノ至意ニ出ツ爾臣民等ハ朕ノ此ノ意ヲ克ク體セヨ

ト以テ兩國素志ノ相融和モルヲ見ルヘク何等ノ騷擾ヲ見ルコトナクシテ併合ノ事成リ面積一萬四千
百二十三方里ノ領土ハ新ニ附加セラレ韓國ヲ改メテ朝鮮ト稱シ朝鮮總督ヲ置キ天皇ニ直隸シ委任ノ
範圍内ニ於テ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ統轄セシメラル茲ニ於テ寺內統監ハ朝鮮總督ニ任セラレ
ルト同時ニ各地理事官ニ訓令ヲ發シテ經營指導宜シキヲ得、施政ノ効果ヲ舉グルニ遺漏ガカラシメ
ンコトヲ期セリ其ノ訓令ニ曰ク

本日公布ノ併合條約ニ依リ韓國ハ帝國ニ併合セラレ自今朝鮮ト改稱シテ帝國領土ノ一部トナリ城
内ノ人民ハ悉ク帝國ノ治下ニ立テ政令是ヨリニ途ニ出テ皆皇化ノ惠澤ニ浴スヘシ然レ下モ朝鮮現
時ノ狀態ハ未タ全ク帝國內地ト同シカラサルモノアリ故ニ帝國法令ニシテ直ニ朝鮮ニ適用セラレ

ルモノノ併合ノ結果朝鮮ニ於テ効力ナクテヘキ帝國法令及韓國法令ハ爾後總督ノ命令トシテ其
ノ効力ヲ存続シ將來時勢ノ進退ニ從ヒ漸ク逐テ改修ヲ加フヘシ居留民團ハ元來外國ニ住居スル帝
國臣民ノ設立スル團體ニシテ朝鮮カ帝國ノ版圖ニ歸シタル以上ハ自然地方行政機關ニ編入セラレ
ヘキモノナリト雖今俄ニ之ヲ廢止スルニ便ナラサル事情アルニ依リ暫ク其ノ存在ヲ認メ將來之ニ
代ルヘキ地方制度ノ完成ヲ待テ其ノ整理ヲ爲サシムヘシ又韓國及外國間ノ諸條約ハ消滅ニ歸シ帝
國及外國間ノ諸條約ハ事情ノ許ス限リ朝鮮ニ適用セラレ該條約國ノ臣民及人民ハ帝國內地ニ於ケ
ルト同様ノ權利及特典ヲ享有スルト共ニ總テ帝國ノ法權ニ服從スルコト、ナリ隨テ朝鮮ニ在留ス
ル外國人ニ係ル訴訟事件ハ之ヲ帝國裁判所ニ於テ管轄スルコト恰モ他ノ一般人民ニ關スル場合ト
同一ナルヘシ關稅ニ至テハ之ト稍其ノ事情ヲ異ニシ今直ニ帝國ノ關稅法又ハ協定稅率ヲ適用スル
トキハ管ニ外國貿易ニ劇變ヲ與フルノミナラス内國ノ經濟關係ニ對シ重大ナル影響ヲ及スヘキカ
故ニ帝國政府ハ當分ノ内總テ從來ノ慣例ヲ繼續スルコトニ決シ條約上ノ規定ニ拘ラス朝鮮ノ輸出
入貨物ニ對シテハ從來ト同率ノ關稅ヲ課シ又帝國內地ト朝鮮トノ間ニ出入スル貨物ニ付テモ從來

第一章 韓國併合顛末

ト同率ノ移出入税ヲ課スルコトト爲セリ

一四

元來併合ノ趣旨タルヤ兩國相合シテ一體ト爲リ彼我ノ差別ヲ撤去シ相互全般ノ安寧幸福ヲ増進セムトスルニ外ナラス然ルニ之ヲ以テ強弱兩國ノ成敗ト爲シ驕慢自ラ持シ輕浮ノ言行ニ出ツルカ如キコトアラハ是レ實ニ其ノ本旨ヲ没却スルモノト謂フヘシ從來本邦ノ居留民ハ多クハ異郷ニ僑居スルノ想ヲ爲シ動モスレハ自ラ高ウシテ他ヲ蔑視スルノ弊アリ若今日ノ改革ニ際シ一層僑傲ノ心ヲ增長シ新附ノ人民ニ凌辱ヲ加フルカ如キコトアラハ却テ彼等ノ惡感隔意ヲ招キ事毎ニ杆格ヲ生シ將來永ク相融和スル機ナクシテ遂ニ不測ノ禍ヲ醸スニ至ルヘシ今幸ニ此ノ更始一新ノ時ニ會ス宜シク其舊想前慮ヲ一變シ新附ノ領民ハ即我カ同胞タルコトヲ念ヒ之ニ接スルニ同情ヲ以テシ之ヲ待ツニ友誼ヲ以テシ相提携シテ處世ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ隆昌ニ貢獻スルコトニ努ムルヲ要ス貴官ハ以上ノ趣旨ニ基キテ管下一般ノ居住民ヲ指導シ將來施政ノ効果ヲ擧グルニ於テ遺漏ナキコトヲ期セラルヘシ

明治四十三年八月二十九日

統監 子爵 寺内 正 殿

又總督ハ朝鮮上下ノ民衆ニ諭告シ施政ノ綱領ヲ示シテ曰ク

徽聖文武 天皇陛下ノ大命ヲ奉シ本官今ヤ朝鮮統轄ノ任ニ膺ルニ際シ茲ニ施政ノ綱領ヲ示シテ朝鮮上下ノ民衆ニ諭告ス

夫レ疆域相接シ休戚相倚リ民情亦昆弟ノ誼アルモノ相合シテ一體ヲ成スハ自然ノ理必至ノ勢ナリ是ヲ以テ大日本國 天皇陛下ハ朝鮮ノ安寧ヲ確實ニ保障シ東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持スルノ緊切ナルヲ念ヒ前韓國元首ノ希望ニ應シ其ノ統治權ノ讓與ヲ受諾シ給ヒタリ自今前韓國ノ皇帝陛下ハ昌德宮李王陛下ト稱セラレ皇太子ハ王世子トナリテ後嗣長ヘニ相繼承シ萬世無窮タルヘク大帝皇陛下ハ德壽宮李太王陛下ト稱セラレ竝ニ皇族ノ禮遇ヲ賜ハリ其ノ秩俸ノ豐厚ナル皇位ニ在スノ時ト異ル所ナカルヘシ朝鮮民衆ハ盡ク帝國ノ臣民ト爲リ 天皇陛下撫育ノ化ヲ被ムリ長ヘニ深仁厚德ノ惠澤ニ浴スヘシ殊ニ忠順ニ新政ヲ翼賛スル賢良ハ其ノ効勞ニ準シ榮爵ヲ授ケラレ恩金ヲ賜ハリ又其ノ材能ニ應シ帝國ノ官吏トシテ或ハ中樞院議官ノ班ニ列セラレ武ハ中央若ハ地方官廳ノ職員ニ登用セラルヘシ

第一章 韓國併合顛末

一五

又班族衛生ノ善老ニシテ恭謙能ク庶民ノ節表タル者ニハ尙齒ノ恩典ヲ與ヘラレ孝子節婦鄉黨ノ模範タル者ニハ褒賞ヲ賜リ以テ其ノ德行ヲ表彰セラルヘシ蓋ニ地方官吏ノ職ニ在リ國稅欠進ノ行爲アリタル者ハ其ノ責任ヲ解除シ特ニ其ノ未勘金ノ完納ヲ免セラルヘシ又從前法律ニ違反シタル者ニシテ其ノ犯罪ノ性質特ニ惡劣スヘキ者ニ對シテハ一律ニ大赦ノ特典ヲ與ヘラルヘシ

如今地方ノ民衆積弊ノ餘孽ヲ受ケ或ハ業ヲ失ヒ產ヲ傾ケ又甚シキハ流離饑餓ニ瀕スル者アリ依テ先ツ民力ノ休養ヲ圖ルノ急務ナルヲ認メ隆熙二年度以前ノ地稅ニシテ今尙未納ニ係ルモノハ之ヲ免除シ隆熙三年以前ノ貸付ニ係ル社穀ハ其ノ還納ヲ特免セシメ且本年秋季ニ徵收スヘキ地稅ハ特ニ其ノ五分ノ一ヲ輕減シ更ニ國幣約一千七百萬圓ヲ支出シ之ヲ十三道三百二十有餘ノ府郡ニ配與シ以テ士民ノ授産、教育ノ補助並凶歉ノ救濟ニ充テシムヘシ是皆斯ノ更始一新ノ時ニ方リ惠撫慈養ノ聖旨ヲ昭ニスル所以ナリ然リト雖國政ノ利澤ヲ蒙ル者其ノ分ニ應ジテ國費ヲ負擔スルハ天下ノ通則ニシテ古今東西皆然ラサルハ莫シ故ニ克ク這般救恤ノ本旨ヲ體シ或ハ恩ニ徂レテ奉公ノ心ヲ失ハサランコトヲ期スヘシ

凡ソ政ノ要ハ生命財産ノ安固ヲ圖ルコリ急ナルハ莫シ蓋シ殖産ノ方興業ノ途之ニ次テ振作スルヲ得ベグレハナリ從來不逞ノ徒頑迷ノ輩遐邇ニ出沒シ或ハ人ヲ殺シ財ヲ掠メ或ハ非謀ヲ企テ騷擾ヲ得ス者アリ是ヲ以テ帝國ノ軍隊ハ各道ノ要所ニ駐屯シテ時變ニ備ヘ憲兵警官ハ普ク都鄙ニ互リテ專ラ治安ノ事ニ從ヒ又各地ニ法廷ヲ開キテ公平無私ノ審判ヲ下スニ努ム是固ヨリ奸兇ヲ懲罰シ邪曲ヲ芟除セムカ爲ナリト雖單寬國內全般ノ安寧秩序ヲ維持シ各人ヲシテ其ノ堵ニ安シテ業ヲ營ミ產ヲ治メシメムトスルニ外ナラス

今朝鮮ノ地勢ヲ通觀スルニ其ノ南土ハ肥沃ニシテ農桑ニ適シ其ノ北地ハ樞子鐵物ニ富ミ内河外海亦魚介多シ遺利餘澤ノ獲收スヘキモノ鮮少ナリトセス其ノ開發ノ方法宜シキヲ得ハ産業ノ振作期シテ待ツヘシ而シテ産業ノ發達ハ主トシテ運輸機關ノ完成ニ俟タサルヘカラス是事ヲ創メ業ヲ起スノ階梯ナレハナリ今通路ヲ十三道ノ各地ニ開キ鐵道ヲ京城元山間及三南地方ニ新設シ漸チ以テ全土ニ及ボサムトス斯ノ如クニシテ大成ヲ將來ニ期スルト共ニ其ノ開發敷設ノ工程ニ於テ榮民ニ生業ヲ興ヘ其ノ窮乏ヲ拯フノ一助タルヘキヲ疑ハス朝鮮古來ノ流弊ハ好惡乖違唯利ヲ以テ相爭フ

第一章 韓國併合願末

ニ在リ是ヲ以テ一黨勢ヲ得レハ忽チ他派ヲ戕ハムトシ一派力ヲ占ムレハ輒チ他黨ヲ仆サムトシ頑
 頑排擠其ノ窮極スル所ヲ知ラス終ニ産ヲ破リ家ヲ亡ホス者尠シトセス是尺害アリテ寸益ナシ爾後
 黨ヲ樹テ社ヲ結ヒ徒ニ輕舉妄動ヲ事トスルカ如キコトアルヘカラス但シ政令洽ク下ニ及ハス民意
 動モスレハ上ニ達セスシテ上壓下怨ノ弊ヲ醸スハ古今其ノ例ニ乏シカラス依テ中樞院ノ規模ヲ擴
 張シ老成ノ賢良ヲ網羅シテ其ノ議官ニ列シ重要ナル政務ノ諮詢ニ應セシメ又各道及各府郡ニハ參
 與官又ハ參事ノ職ヲ設ケ能士俊材ヲ登用シテ之ニ充テ其ノ言議ヲ徵シ其ノ獻策ニ聽キ以テ政令ト
 民情ト相抵牾スル所ナカラントナ期ス

凡ソ人生ノ憂患ハ疾病ヨリ酷シキハ莫シ從來朝鮮ノ醫術ハ未タ幼穉ノ域ヲ脫セスシテ以テ病苦ヲ
 救ヒ天壽ヲ全ウセシムルニ足ラス是最モ痛嘆スヘキ所ナリ曩ニ京城ニ中央醫院ヲ開キ又全州清州
 及咸興ニ慈惠醫院ヲ設ケテ以來衆庶ノ其ノ恩波ヲ蒙ル者極メテ多シト雖未タ全土ニ普及セサルヲ
 遺憾トシ既ニ令ヲ發シテ更ニ各道ニ慈惠醫院ヲ増設セシメ名醫ヲ置キ良藥ヲ備ヘ汎ク起死回生ノ
 仁術ヲ施サシメムトス

順ノニ人文ノ發達ハ後進ノ教育ニ俟タサルヘカラス而シテ教育ノ要ハ智ヲ進メ徳ヲ磨キ以テ修身
 齊家ニ資スルニ在リ然ルニ賸生動モスレハ勞ヲ厭ヒ逸ニ就キ徒ニ空理ヲ談シテ放漫ニ流レ終ニ無
 爲徒食ノ遊民タル者往々ニシテ之レ有リ自今宜シク其ノ弊ヲ矯メ華ヲ去リ實ニ就キ懶惰ノ陋習ヲ
 一洗シテ勤儉ノ美風ヲ涵養スルコトニ努ムヘシ

信教ノ自由ハ文明列國ノ均シク認ムル所ナリ各人其ノ崇拜スル教旨ニ倚リ以テ安心立命ノ地ヲ求
 メムトスルハ固ヨリ其ノ所ナリト雖宗派ノ異同ヲ以テ漫ニ紛爭ヲ試ミ又ハ名ヲ信教ニ藉リテ明ニ
 政事ヲ議シ若ハ異圖ヲ企テムトスルカ如キハ即チ良俗ヲ荼毒シ安寧ヲ妨害スルモノナルヲ以テ當
 ニ法ヲ案シテ處斷セサルヘカラス然レトモ儒佛諸教ト基督教トヲ問ハス其ノ本旨ハ畢竟人心世態
 ノ改善ニ在ルカ故ニ固ヨリ施政ノ目的ト背馳セサルノミナラス却テ之ヲ裨補スヘキモノタルヲ疑
 ハス之ヲ以テ各種ノ宗教ヲ待ツニ蒙モ親疎ノ念ヲ挾マサルハ勿論其ノ布教傳道ニ對シテハ適當ナ
 ル保護便宜ヲ與フルニ吝ナラサルヘシ

本官今 聖旨ヲ奉シテ此ノ地ニ菴ムヤ一ニ治下生民ノ安寧幸福ヲ増進セムト欲スルノ外他念アル

第一章 韓國併合願末

ナシ是レ玆ニ辟々トシテ其ノ適從スヘキ所ヲ諭示スル所以ナリ尙漫ニ妄想ヲ逞ツシ敢テ施設ヲ妨
碍スル者アラハ斷シテ假借スル所ナカルヘシ若シ夫レ忠誠身ヲ持シ謹慎法ヲ守ルノ良士順民ニ至
ツテハ必ス皇化ノ惠澤ニ霑ヒ其ノ子孫亦永ク恩波ニ浴スヘシ爾等恪テ新政ノ宏謨ヲ奉體シテ苟モ
違フ所アル勿レ

明治四十三年八月二十九日

統 監 子爵 寺 内 正 毅

三

斯クテ併合ノ事成レリト雖 天皇陛下ハ深ク前後ノ事ヲ軫念シ給ヒ併合條約第三條及第四條ニ依リ
併合ノ後ト雖前韓國皇帝及其皇室各員ハ其ノ地位ニ應シ相當ナル尊稱、威嚴及名譽ヲ享有スヘク前
韓國皇帝ヲ册シテ王ト爲シ昌德宮李王ト稱シ嗣後此ノ隆錫ヲ世襲シ以テ其ノ宗祀ヲ奉セシメ皇太子
及將來ノ世嗣ヲ王世子トシ太皇帝ヲ太王ト爲シ德壽宮李太王ト稱シ各其儀四ツ王妃、太王妃又ハ王
世子妃トシ尊待ツニ皇族ノ禮ヲ以テシ特ニ殿下ノ敬稱ヲ用非シメ李家ノ子孫ヲシテ福履ヲ増綏シ永
ク休祉ヲ享ケシムヘキコトヲ宣シ給ヒ又李王ノ懿親李嫔及李慈ヲ以テ公トシ其禮四ツ王妃トシ尊待

ツニ皇族ノ禮ヲ以テシ殿下ノ敬稱ヲ用非シメ子孫ヲシテ其榮錫ヲ世襲シ永ク寵光ヲ享ケシメラレ且
其ノ皇位ニ在リシ時ト同一ノ歳費ヲ與ヘラル
而シテ條約第五條ニ依リ勳功アル朝鮮人ニシテ特ニ表彰ヲ爲スヲ適當ナリト認メタルモノニ對シ榮
爵ヲ授ケ且恩賜金ヲ下賜セラルヘキヲ定メ朝鮮實族令ヲ發布セラレ本令ニ依リ十月七日勳功者ノ貴
族ニ列セラレタルモノ七十六名ニ及ヘリ而モ聖恩ノ優渥ナル旨ニ李家及勳功者ノミニ止ラス更ニ赤
子ヲ體卹スルノ意ヲ昭示シ給ヒ舊刑階級ノ罪因申情狀ノ惻隱スヘキモノニ對シテハ特ニ大赦ヲ行ヒ
且積年ノ逋租及當年ノ租稅ハ之ヲ減免シ給ヘリ因人ニシテ此ノ恩惠ニ浴シタルモノ一千七百十七人
ニ及ヘリ

又貴族及功勞者竝其ノ遺族、勲任、奏任、列任ノ官吏ニシテ恩賜金ノ下賜ニ與リタルモノ三千六百
四十三人、又班族、儒生ノ耆老ニシテ恭謙能ク庶民ノ師表タル者ニハ尙齒ノ恩典ヲ與ヘラレ其ノ惠
ニ浴セシモノ一萬二千三百餘人又孝子節婦鄉黨ノ模範タル者ニハ褒賞ヲ賜ハリ鰥寡孤獨情ノ懇願ス
ヘキ者ニ對シテハ賜金ヲ惠マセラレ其ノ恩典ニ與カリタル者孝子節婦三千二百九人鰥寡孤獨七萬九

第一章 韓國併合願末

鎮南浦等ノ港灣ヲ始メトシ鋪地頗ル多シ

離テ朝鮮ノ地勢ヲ見ルニ北境ニハ長白山脈蜿蜒トシテ東北ヨリ西南ニ延ビ平安咸鏡兩道ノ境ヲ劃シテ江原道ニ入り東海岸線ニ平行シテ南方ニ駛走シ以テ半島ノ脊梁骨ヲナス此ノ如ク大山脈東方ニ偏在スルヲ以テ山脈以東ノ地ハ斜面急峻ニシテ殆ンド平野ト稱スベキモノナク從ツテ江河ノ大ナルモノナシ之ニ反シ山脈以西ハ比較的緩ナル斜面ヲナシ平野處々ニ少ナカラズ鴨綠江大同江漢江錦江洛東江等其ノ間ニ繫流シテ舟楫ノ便灌溉ノ利アリ地味概シテ豊饒ナリ

二 氣 候

氣溫 氣溫ハ年平均釜山地方ハ攝氏十三度餘ニシテ漸次北方ニ遞減シ京仁地方及元山地方ハ十度餘又龍岩浦地方及城津附近ハ八度内外ニシテ北韓内陸ハ五度乃至四度トナル之ヲ本土ニ比較スレバ南岸ハ福井地方ニ中部ハ信濃地方ニ比スベク北韓ノ沿海地方ハ函館地方ニ其ノ内陸高原ハ恰モ北海道内陸ト相似タリ而シテ年中最暖ナルハ八月最寒ナルハ二月ニシテ其ノ差南部ハ二十三度中部ハ二十七度北部ハ三十二度内外ナリ本州ニ在リテハ中部ノ沿岸地方ハ其ノ差概テ二十一二度内陸ハ二

十四五度北海ハ左ノ如シ(一)ヲ附セルハ氷點下ノ溫度ヲ示ス)

	高 極	低 極	高 極	低 極
木 浦	三四、一	(一)二、五	釜 山	三三、六
木 邱	三七、八	(一)一四、五	仁 川	三四、六
京 城	三五、六	(一)一九、九	平 壤	三五、五
元 山	三八、二	(一)一九、二	龍岩浦	三三、六
城 津	三五、五	(一)二三、〇		(一)二六、三

即チ暖極ハ西岸及南岸ハ三十四度内外其他ニ在リテハ三十五度乃至三十八度ニ達ス斯ノ如キ暑氣ハ本土ニ在リテハ到所ニ遭遇スル所ナルモ寒氣ニ於テハ零下十五度ニ達スル事アルハ美濃地方乃至福島山形地方同二十度以下ニ下ルハ北海ノ各地ニシテ更ニ零下三十度下ニ降ルハ北海内陸ノ十勝上川地方ニ間々起ルノミ故ニ寒氣ニ於テハ本土ノ各地ニ比シ稍々甚シキヲ見ル氣溫晝夜ノ差モ亦稍著シク中部以内ノ沿岸ハ八度内外ニシテ中部ノ内陸ハ十三度餘北部ノ内陸高原ニ於テハ十七度ニ達スル

地方アリ

風 全半島ヲ通シテ季節風ノ勢力卓越スルヲ以テ主風ノ方向ハ季節ニ由リ略ホ一定セリ即チ十月ヨリ四月迄ハ北乃至北西風ニシテ六月ヨリ八月マテハ一般ニ南東風ナリ雨季節風ノ交代期ナル五月及九月前後ハ風向區々ニシテ一定セズ又西岸及南岸ハ冬季ノ北西風ヲ受クルガ故ニ此ノ季節ニ於テ風力殊ニ強ク之ニ反シ東岸ハ朝鮮山脈ニ遮キラル、ニヨリ概シテ弱シテ冬季大陸方面ニ高氣壓ノ發達セル時ニ際シ適々日本海方面ニ低氣壓ノ通過スルモノアルトキハ強烈ナル北乃至北西風ヲ起スト共ニ氣溫頓ニ下リ甚シキ時ハ前日トノ差十度以上ニ達ズル事アリ然レトモ氣壓ノ配布舊ニ復シ高壓部ノ衰退スルト共ニ風力減シ寒氣亦退クヲ以テ冬季ニ於テハ寒暖ノ日交錯スルヲ常トス俚俗ニ三寒四溫ノ語アルハ蓋シ之ヲ謂フナリ

雨霽 雨霽ノ年量ハ半島ノ大部分ハ八百乃至千耗ニシテ南岸ハ之ヨリモ多ク釜山地方ハ千四百耗ニ達ス又東岸ニ於テ元山附近ニモ亦多ク千五百耗ニ達ス蓋シ此ノ地方ハ半島ニ於テ最多雨地方ナリ而シテ北部内陸高原地方ニ在リテハ六百耗内陸ニ過ギテ之本土ニ比スレバ南岸地方ハ略ホ瀬戸内地

方ニ比スベク元山地方ヲ除ク中部以南ハ信濃及兩毛地方ト相似タリ既ニ氣溫ニ於テ酷似シ氣候モ亦能ク相似タルニ見ルモ近年蠶桑ノ半島ニ適スルヲ稱道セラルル所以ノモ決シテ偶然ニアラザルヲ知ルベシ而シテ北部霖雨ノ地方ハ本土ニ於テハ之ニ比スベキ地方ナシ然レトモ半島ニ於テハ季節ニ由リ降雨ノ差異著シク十月ヨリ三月ニ至ル乾燥期ニ際シテハ其ノ量極メテ少ク此ノ六個月間ノ合計ハ降雨期一箇月ノ量ニモ充タス之ニ反シ六月ヨリ八月ニ至ル間ニ年量ノ大部分ヲ降下スルヲ常トス故ニ北部地方ト雖モ降雨期ノ量ヲ以テ比較スルトキハ北海道地方ト敢テ讓ラサルヲ見ル斯ク冬季ノ量寡少ナルヲ以テ北部ニ於テモ積雪ハ甚々少ク雨天日數ハ概シテ百日内外ニシテ南岸及元山地方ハ百三十日内外ニ達ス降雨期ニ於テハ月ノ三分ノ一以上ヲ算スル事アルモ概シテ降雨ノ時間短ク本土ニ於ケルカ如ク霖雨數日ニ涉ルカ如キハ殆ント見サル所ナリ

蒸發 斯ノ如ク雨量尠ク空氣乾燥シテ且日照多キヲ以テ蒸發量ハ甚々多シ年量ハ北部八千耗餘西岸ハ千四百耗餘南岸ノ釜山地方ハ千五百耗餘ナリ本土ニ於テ蒸發量ノ多キ瀬戸内地方ト雖半島ノ蒸發量寡ナル地方ト相匹敵スルノミ西岸地方ニ於テ天日製鹽業ノ著々效ヲ奏シツアル洵ニ所以アリト

第二章 地誌

云フヘシテ東岸ノ西岸ニ比シテ霧發ノ少キハ前述ノ如ク同地方ノ風力弱キモ其ノ一源因ナラン
 霧 朝鮮近海ノ濃霧ハ日露戰役以來世人ノ注意スル所トナリシカ濃霧ハ半島ノ東西沿岸ヲ流ルル所
 ノ暖流方面ニ於テ三月ヨリ八月ニ至ル間ニ展起リ殊ニ七八月ニ最頻繁ナリ濃霧ノ一度襲來スルトキ
 ハ冥濛トシテ所謂咫尺ヲ辨セサル程ニシテ其ノ甚タシキモノハ三晝夜ニ涉リテ衰退セサル事アリ之
 カ爲メニ船舶ノ航行ヲ妨ケラルル事尠ナカラス
 從來半島ノ事情ニシテ内地人ニ覬傳セラレタルモノ尠ナカラス氣候ノ如キモ其ノ一ニシテ朝鮮全土
 ナ以テ寒暑共ニ酷烈ナリトナシ又ハ雨量寡小ニシテ農耕ニ適セストナスカ如キ説チナスモノ間々ア
 リ然レトモ從來ノ實測ハ全ク然ラサルヲ示スノミナラス却テ本土ノ或地方ニ比スレハ居住ニ適順ニ
 シテ且農桑ニモ佳實ナルハ近來ノ實績ニ徴シ明白ナリ況ンヤ暴風ノ如キ本土ニ比シ極メテ尠ナク稍
 強烈ナルモノハ年ニ二回ニ過キヌ又本土ノ如ク震災ノ怖ルヘキモノナク實ニ天然ノ樂土ト稱スヘ
 キナリ

三人 口

明治四十四年六月末日ノ調査ニ據レハ現在内地人戸數ハ各道ヲ通シテ五萬七千五百四十五戸、人口
 十九萬三千六百七十五人朝鮮人戸數二百七十九萬二千五百五十三戸人口一千三百五十三萬九千二百十八人
 外國人戸數三千五百三戸人口一萬四千六百五十五人ナリ左ニ各道別表ヲ掲ク

(甲) 内地人
 (イ) 現住内地人

道名	戸數	人		計
		男	女	
京畿道	一七、一六三	三一、九四三	二七、九〇〇	五九、八四三
忠清北道	一、一〇四	一、八一六	一、三三九	三、一五五
忠清南道	二、七一一	四、七三四	三、九四九	八、六八三
全羅北道	二、五六六	四、七七〇	三、九二二	八、六九二
全羅南道	三、二〇二	六、〇二三	四、六七〇	一〇、六九三
慶尙北道	三、七〇三	六、五〇六	五、三二三	一一、八二九
慶尙南道	二、九八七	二四、九九五	二一、八四四	四六、八三九
江原道	九一〇	一、七〇六	一、〇三四	二、七四〇

第二章 地誌

本籍	北海道廳		東京府		京都府		大阪府		神奈川縣		兵庫縣		長崎縣		新潟縣		埼玉縣	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
道京畿	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一
北道清	五七、五四五	五〇、九九三	五七、五四五	五〇、九九三	五七、五四五	五〇、九九三	五七、五四五	五〇、九九三	五七、五四五	五〇、九九三	五七、五四五	五〇、九九三	五七、五四五	五〇、九九三	五七、五四五	五〇、九九三	五七、五四五	五〇、九九三
南道清	四三、四〇五	三七、二二一	四三、四〇五	三七、二二一	四三、四〇五	三七、二二一	四三、四〇五	三七、二二一	四三、四〇五	三七、二二一	四三、四〇五	三七、二二一	四三、四〇五	三七、二二一	四三、四〇五	三七、二二一	四三、四〇五	三七、二二一
北道全	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三
南道全	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五
北道仰	八八、三〇四	七八、七九二	八八、三〇四	七八、七九二	八八、三〇四	七八、七九二	八八、三〇四	七八、七九二	八八、三〇四	七八、七九二	八八、三〇四	七八、七九二	八八、三〇四	七八、七九二	八八、三〇四	七八、七九二	八八、三〇四	七八、七九二
南道仰	六六、二〇〇	五九、〇三三	六六、二〇〇	五九、〇三三	六六、二〇〇	五九、〇三三	六六、二〇〇	五九、〇三三	六六、二〇〇	五九、〇三三	六六、二〇〇	五九、〇三三	六六、二〇〇	五九、〇三三	六六、二〇〇	五九、〇三三	六六、二〇〇	五九、〇三三
道黃海	一四六、一四七	一三六、一六八	一四六、一四七	一三六、一六八	一四六、一四七	一三六、一六八	一四六、一四七	一三六、一六八	一四六、一四七	一三六、一六八	一四六、一四七	一三六、一六八	一四六、一四七	一三六、一六八	一四六、一四七	一三六、一六八	一四六、一四七	一三六、一六八
南道安	一九三、六七五	一七二、五四三	一九三、六七五	一七二、五四三	一九三、六七五	一七二、五四三	一九三、六七五	一七二、五四三	一九三、六七五	一七二、五四三	一九三、六七五	一七二、五四三	一九三、六七五	一七二、五四三	一九三、六七五	一七二、五四三	一九三、六七五	一七二、五四三
北道安	一七二、五四三	一四六、一四七	一七二、五四三	一四六、一四七	一七二、五四三	一四六、一四七	一七二、五四三	一四六、一四七	一七二、五四三	一四六、一四七	一七二、五四三	一四六、一四七	一七二、五四三	一四六、一四七	一七二、五四三	一四六、一四七	一七二、五四三	一四六、一四七
道江原	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三
南道鏡	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三	三三、三三九	二八、二七三
北道鏡	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五	二八、二七三	二二、一四五
計	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一	一〇五、三七一	九二、七五一

第二章 地誌

三三

(口) 現住内地人本籍別

年次	戸數	人口		平均一戸二付人口	女百二付男
		男	女		
明治四十四年六月末日	五七、五四五	一〇五、三七一	八八、三〇四	三三七	一一九、三三三
同四十二年十二月末日	五〇、九九三	九二、七五一	七八、七九二	三三六	一一七、七三三
同四十二年十二月末日	四三、四〇五	七九、九四七	六六、二〇〇	三三七	一一〇、七六六
同四十一年十二月末日	三七、二二一	七〇、一四五	五九、〇三三	三三〇	一一五、二一一
同四十年十二月末日	二八、二七三	五五、六六九	四二、三三三	三三七	一一三、一五一
同三十九年十二月末日	二二、一三五	四八、〇二八	三五、二八七	三三六	一一三、六一一

現住内地人戸口累年比較

道	戸數	男	女	人口	女百二付男
平安南道	三、九二八	七、一一八	四、〇一〇	五、九七九	一三、〇九七
平安北道	二、三九八	四、〇一〇	二、九三五	二、八四三	六、八五三
黃海道	一、九一九	二、九三五	二、二八〇	五、二一五	八、七二一
咸鏡南道	二、四四〇	四、六八七	四、〇三七	三、一八七	七、三一五
咸鏡北道	二、五〇八	四、一二八	三、一八七	三、〇四四	七、三一五
計	五七、五四五	一〇五、三七一	八八、三〇四	一九三、六七五	一一三、六一一

三三

第二章 地誌

道名	戶數	人口		計
		男	女	
京畿道	二九六,五四〇	七三七,四九五	六七八,六一一	一四一六,一〇六
忠清北道	一一三,六七三	三一〇,八八九	二六九,九〇〇	五八〇,七八九
忠清南道	一九五,七六五	四七三,九〇二	四二一,六四四	八九五,五四六
全羅北道	二〇五,七九九	五一一,六一五	四五〇,九六六	九六二,五八一
全羅南道	三二九,七五四	八二七,四六九	七五三,四二二	一五八〇,八九一
慶尙北道	三三三,八六三	八五九,〇五三	七六五,五一六	一六二四,五六九
慶尙南道	二九七,一〇三	七五二,五四七	六八九,一〇四	一四四一,六五一
黃海道	一六六,七二二	四四五,九七三	三八七,一〇一	八三三,〇七四

(乙) 朝鮮人

總計	沖繩縣		鹿兒島縣	
	男	女	男	女
男	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇
女	九,〇〇〇	八,〇〇〇	九,〇〇〇	八,〇〇〇
計	一九,〇〇〇	一七,〇〇〇	一九,〇〇〇	一七,〇〇〇

道名	宮崎縣		熊本縣		佐賀縣		大分縣		福岡縣		愛媛縣		香川縣		德島縣		和歌山縣		山口縣		廣島縣	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
總計	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇

第二章 地誌

諸	伊	希	露	獨
計家木	計家木	計家木	計家木	計家木
族業	族業	族業	族業	族業
			八三五	六四三
			四	四六六
		五二三	四二二	一四八六
七	七			一六三三
八	八	二	二五二	一七五二
				四二
				一五
				二七

四三

(口) 在留外國人職業別

佛	英	米	清	國別
計家木	計家木	計家木	計家木	種別
族業	族業	族業	族業	官公吏
一四八六	一五六	五二	四九二	二六三
四八	四八	七三	二〇五	二二
二二	一八	一六	一八	三、四二二
				二、〇七七
				五、四八九
				三、八六
				四、〇
				七、九六
				一、九七一
				一、三四二
				六、二九
				二
				一、一
				三、一
				二、六
				三、七
				六、三
				一、二六
				四、〇
				八、六
				五、五一四
				一、三八三
				四、六八五
				八、二九
				三、九七三
				九、八五〇
九	二	四	九	計
五	四	七	二	
二	七	一	三	
四	三	七	〇	
九	二	四	八	
五	四	七	二	
二	七	一	三	
四	三	七	〇	
九	二	四	八	
五	四	七	二	

四〇

朝鮮ハ會テ建國以來三千年ノ歴史ヲ有スル舊邦ナリシモ所謂都府ト稱スヘキモノハ京城、平壤、開

第二章 地誌

四 重要ナル市街地

四三

總計	西		丁		瑞	
計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業
九六	四九	四七				
四一四	一六九	二四五				
五、五七七	二、一七	三、四六〇			-	-
八一八	四一五	四〇三				
一、九七五	一、六三三	一、三四三				
八三	四七	三五				
五、六九三	八七八	四、八一五	二	二	-	-
一四、六五五	四、三〇七	一〇、三四八	二	二	-	-

土	加		濠		葡		白	
計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業	計家本 族業
							三	一
		三	二	九	七	五	二	
八	四	四						
八	四	四	二	二	九	七	五	二
			二	二			二	三
								一
								二

四二

城、水原等ニシテ就中京城、平壤ヲ除キ他ハ殆ト收贖ニ歸シタリ然ルニ日清日露兩戰役ヲ經テ日本
 人ノ移住頓ニ増加シ仁川釜山ヲ始メ其ノ他ノ開港場ハ整然タル市街地トナリ京釜京仁兩鐵道ノ開通
 以來沿線各地ニ漸次發展ノ歩武ヲ進ムルニ至レリ明治卅九年統監府開設セラレ居留民團法實施セラ
 ルルニ及ヒ京城、仁川、釜山、平壤、鎮南浦、蔚山、木浦、馬山、元山、大邱、新義州ノ各地ニ居
 留民團ノ設置ヲ見ルニ至レリ京城仁川平壤釜山木浦等ニハ水道ノ設置アリ鎮南浦ハ客年ヨリ四箇年
 計冊ニテ目下經營中ナリ

重ナル集團地ヲ擧クテハ京釜鐵道沿線ニ於テハ京城、龍山、永登浦、仁川、水原、平澤、咸歡、烏
 致院、江景、大田、永同、金泉、大邱、密陽、三浪津、馬山、釜山ニシテ京義鐵道沿線ニ於テハ汝
 山、開城、新義、沙里院、黃州、兼二浦、中和、平壤、鎮南浦、定州、宣川、新義州、龍岩浦トナ
 シ沿岸ニ於テハ群山、木浦、元山、城津、清津等トス

今主ナル集團地ニ於ケル内地人ノ戸口ヲ朝鮮人等ト對照シテ掲ケレハ左ノ如シ
 (イ) 三千人以上ノ居住地又ハ著名市街地現住戸口表 明治四十三年十二月末日

地名	内地人		朝鮮人		清國人		其他外國人	
	戸數	男女	戸數	男女	戸數	男女	戸數	男女
京城府	三、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
仁川府	二、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
水原郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
安城郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
江華郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
始興郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
開城郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
慶州郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
清州郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
忠州郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
永同郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公州郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
懷德郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
洪州郡	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

第二章 地誌

四五

道北		道南		道江原		道	
會	津	清	鏡	元	春	江	假
寧	州	川	城	成	川	界	山
郡	郡	郡	府	興	郡	郡	郡
會	郡	郡	府	郡	郡	郡	郡
寧	吉	津	鏡	永	春	江	北
	州	府	城	興	川	界	鎮
	吉	津	鏡	永	春	江	北
	州	府	城	興	川	界	鎮
一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三
四	四	四	四	四	四	四	四
五	五	五	五	五	五	五	五
六	六	六	六	六	六	六	六
七	七	七	七	七	七	七	七
八	八	八	八	八	八	八	八
九	九	九	九	九	九	九	九
十	十	十	十	十	十	十	十
十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一
十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二
十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三
十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四	十四
十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五	十五
十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六	十六
十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七	十七
十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八	十八
十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九	十九
二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十

以上ノ表ニ示セルカ如ク邦人ノ移住ハ年ヲ逐ヒテ増加シツ、アリ左ニ著名ナル都府ノ梗概ヲ舉クレ

一京城 李朝五百年ノ帝都ナリ漢城又ハ漢陽ト稱ス人口約廿五萬ヲ有スル朝鮮第一ノ大都會ナリ地形ノ上ヨリ之ヲ觀レハ宛然京都ニ似タリ四圍山岳ヲ以テ廻ラシ、東方ニハ寶藏天鮮ノ諸山峙チ西方ニハ白蓮、仁王山竝ヒ聳ヘ北方ニハ三角山重疊シ東南方ニハ南山起立シテ自然ノ城門ヲ爲シ西南ノ一隅僅ニ空闊セリ、漢江其ノ東南ヲ流レ山河景勝ノ地ナリ

京城ニハ朝鮮總督府及多數ノ所屬官署アリ、總督府ハ南山ノ中腹ニ在リテ市ヲ俯瞰ス京城ニ於ケル日鮮人ハ殆ト相雜居セルノ觀アルモ内地人ノ多クハ南山々麓一帶ノ市街及東大門、西大門、南大門

第二章 地誌

ノ附近ニ密集シ商業ヲ營ムモノ多シ
 内地人ノ宗教ニ付テハ東四本願寺別院、日蓮宗、淨土宗、曹洞宗、眞言宗等各派ノ寺院アリ布教ニ從事
 ス基督教モ明治三十七年五月日本美以教會ノ設立セラレシヲ始メトシ日本基督教會、組合教會、聖公
 會等教會ヲ設ケ内地人ノ傳道ニ從事セリ尙ホ朝鮮人ノ宗教ニ關シテハ第十三章宗教ノ部ニ譲ル
 南大門市場ハ日鮮人間ノ日用品商賣ヲ以テ有名ナリ内地人ノ商業繁榮セル地ヲ木町通（俗ニ泥帆街
 ト稱ス）ト爲ス

電車ハ東大門外清涼里ヨリ西大門ヲ經麻浦ニ達シ鐘路ヨリ南大門ニ延ヒ龍山新葛兩市街ニ達シ交通
 ノ便ヲ助ケルコト大ナルモ街衢ハ一般ニ狹隘ニシテ木町通ノ如キハ肩摩蹙擊ノ狀態ヲ呈スルヲ以テ
 道路改築、市區改正ノ要アリ電信、電話、電燈、瓦斯ノ設備ハ既ニ完成セリ

京城ニハ南山公園、德壽宮、昌德宮、景福宮、關帝廟、パコタ公園、博物館、動物園等ノ名勝地アリ
 京城ヨリ各道廳所在地ニ到ル距離ヲ示セハ左ノ如シ

京城各道廳所在地間里程

地名	距離		合計
	鐵道	水路	
公州(忠清南道)	八〇、八	六二、八	三九、〇三
清州(忠清北道)	八〇、八	四三、〇	三七、〇五
光州(全羅南道)	一〇三、九	五五、〇五	九七、二一
全州(全羅北道)	一〇三、九	二五、二五	六六、〇五
晉州(慶尙南道)	二六八、八	八、二一	一四三、二三
大邱(慶尙北道)	一九六、七	五三、〇	一四三、二三
海州(黃海道)	五四、一	二一、一三	八〇、〇八
春川(江原道)	一六四、〇	二二、〇〇	四三、一四
平壤(平安南道)	三一、七	四、三〇	二二、〇〇
咸興(咸鏡南道)	三一、七	六四、二四	六七、〇一
鏡城(咸鏡北道)		六〇、一九	一三二、一六
		二四〇、七	八四、三五
			一七四、〇二

二龍山 京城ヲ距ル里余、漢江ニ臨ム形勝ノ地ニシテ京龍ノ間ハ電車汽車ノ往來頻繁ナリ、從來龍

第二章 地誌

山浦ト稱シ、江ノ舟楫ノ便アリ、物貨輻輳ス、明治四十三年七月龍山居留民團ハ京城居留民團ト合併セラル、近ク駐劄軍司令部、鐵道局ノ移轉ニ因リ頓ニ繁榮ヲ來セリ、京釜、京義兩鐵道線ノ分岐點ニシテ又京元線ノ基點ナリ

近時内地人續々移住シ、股限ニ向フ目下内地人約一萬小學校アリ一千餘ノ兒童ヲ收容ス、金融機關トシテハ百三十及十八銀行ノ出張所アリ

三永登浦 漢江ノ對岸ニ在ル一小驛ニ過キスト雖京釜、京仁線ノ分岐點タルヲ以テ漸次發展ノ途ニ在リ郵便局、監獄署、尋常小學校等ノ設備アリ、附近ヨリ農産物、煉瓦等ヲ産出ス

四仁川 京畿道四端ニ突出セル小半島ニ在リ、月尾島、小月尾島、沙島等面前ニ横ハリテ内港ヲ圍ミ、八尾島遙ニ外廓ヲ畫キテ外港ヲ爲ス、港内水淺クシテ巨船ヲ入ル、ヲ得ス殊ニ潮水ノ干満甚シクシテ大潮時ニハ其差三十二尺ニ及フ平安、黃海、京畿、忠清各道ノ貨物ヲ吞吐シ内地各港及滿州要港トノ定期航海アルヲ以テ貿易ハ朝鮮ニ於ケル第一位ヲ占ム

内地人ノ居住スル者一萬千九百〇七人ニ達シ府廳、區裁判所(地方裁判所支部)居留民團、小學校、女學校、病院等ノ設備アリ電燈、電話、水道等ノ施設亦完備セリ

仁川ヨリ諸要港ニ至ル航程ヲ擧グル

至群山	二二二	至神戶	二六一	至大沽	五三五
同木浦	二七〇	同大坂	三八一	同牛莊	四三八
同釜山	四三二	同橫濱	一〇八九	同上	四九三
同下關	五〇〇	同大連	二八七	同浦海	一〇五〇
同長崎	四五九	同芝罘	二七二		

五水原 京城ヲ距ル南廿五哩ニ在リ京釜線ニ沿フ一都府ナリ、水原城ハ往時正祖大王ノ築ク所ニシテ三方繞スニ山ヲ以テシ、疊壁ヲ以テ之ヲ地ク今ヤ殆ト敗頽ニ歸セリト雖若龍、八達、華西等ノ遺跡アリ西方一帶ノ地ハ空漠タル平野ニシテ鬱蒼タル八達山ノ四瀝浚タル西湖ノ汀ヘルアリテ風光雅ナリ此ノ地ニ朝鮮總督府勸業模範場アリ農産物ノ標本ヲ陳列シ種苗家畜ヲ培養シ一般希求者ノ觀覽ヲ許ス其ノ他區裁判所、警察署、農林學校種苗園等アリ目下居住セル内地人一千百五人ナリ

六平澤、成歡、烏致院 共ニ京釜線ニ沿ロタル一小驛ニ過キサルモ將來農業發展ノ地トシテ嚆目セ

ラ平澤附近ハ平野ニシテ米、大豆ノ産出多シ雁、鴨、七面鳥、鶴、雉子等鳥類ニ富ミ狩客ノ遊フモノ多シ成歎ハ日清戦争ノ古戦場ニシテ平澤ト共ニ農産地トシテ將來有望ノ地ナリ同地ニハ小學校憲兵分遣所アリ

鳥致院ハ忠清兩道及全羅南道ニ通スル要地ニ在リ附近ノ農産物ノ輻輳スル所ニシテ近時漸次發展ノ途ニ在リ内地人ノ居住セルモノ約七百人ニ上ル鳥致院ニハ古來有名ノ市場アリ小學校、憲兵分遣所アリ

七六田 京釜線ニ於ケル大都ノ一ニシテ湖南線ノ分岐點ナリ物貨ノ集散スルコト大邱ニ次ク守備隊區裁判所、警察署、郵便局、小學校、興業會社等ノ設アリ

八清州、公州、江景 清州ハ忠清北道廳ノ所在地ナリ區裁判所(地方裁判所支部)警察署、守備隊アリ近時内地人ノ移住スルモノ多シ

公州ハ忠清南道廳所在地ニシテ三方山ヲ以テ蔽ハレ錦江其ノ北ヲ流ル京釜線ノ英江驛ニ下車シ輕舟ニ棹シ河ヲ下レ僅ニ四時間ニシテ遼スルヲ得ヘシ地味豊饒ニシテ農産ニ適シ内地人ノ居留者約九

百人ニ及ブ地方裁判所、區裁判所、警察署、小學校等アリ

江景モ亦忠清南道ニ在ル小都府ニシテ錦江ニ臨ミ舟楫ノ便アリ群山トノ交通アルヲ以テ貨物集散シ朝鮮三大市場ノ一トシテ數ヘラル内地人ノ居住スル者約六百人ナリ

九大邱 慶尙北道ノ大都ニシテ京釜線中最大ノ驛ナリ嘗テ府城ノアリシ所ナルカ敗頽シテ今ヤ其ノ跡ヲ留メズ市街ヲ距ル十餘町ニシテ遠城公園アリ山頂平坦眺望ニ富ム洛東江近ク流レテ舟楫ノ便アリ以テ釜山ニ達スルヲ得ヘシ

大邱一帯ノ地ハ空漠タル平野ニシテ土壤肥沃農業ニ適ス米、大豆、果樹、棉花、烟草等ヲ其ノ主要ナルモノトス而シテ大邱ハ釜山、京城ノ要路ニ當リ慶尙、全羅、忠清、江原諸道ヲ控ヘ且洛東江水運ノ便アルヲ以テ商業發昌ナリ大邱ニハ古來有名ノ市ニアリ一ハ四門ノ市ト云ヒ他ハ東門ノ市ト云フ前者ハ陰曆二、七ノ兩日ニ開カレ後者ハ四、九ノ兩日ニ開カル市日ニハ附近ヨリ數千ノ鮮人相集合シ雜沓ヲ極ム尙二市ノ外ニ令市アリ舊韓國政府時代ニハ每年命令ヲ以テ春秋二季ニ五十日間ヲ限リテ開設セシム故ニ此ノ名アリ各道各郡ノ商賈引キモ切レズ看者列ヲナス異觀ナリ

第二章 地誌

内地人ノ數約八千五百ヲ算シ道廳、府廳、控訴院、地方裁判所、區裁判所、守備隊、警察署、居留民團、學校、郵便局、教會等アリ

十密陽、三浪津 密陽ハ慶尙南道ニ在ル一小都ニシテ三方ニ山ヲ負ヒ南方ノ一面遠ク平野ニ連リ凝川密々トシテ其ノ間ヲ縫ヒテ流ル楡川ヨリ密陽ニ至ル沿岸ノ地風光明媚ノ所少カラス凝川ノ清流能ク結テ産ス近時農産地トシテ漸次開發セラレ内地人ノ移住スルモノ多シ三浪津ハ密陽ノ南洛東江ノ東北ニ在リ馬山鐵道線ノ岐ル、處ニシテ穀物、果實野菜ノ産地トシテ知ラル

十一馬山 三浪津ヨリ馬山線ニ乘スレハ一時間ナラスシテ馬山ニ達スヘシ馬山ハ慶尙南道ノ南端ニ位シ東ニ丘陵ヲ負ヒ巨濟島ヲ外廓トシテ鎮海灣其ノ前方ニ横ハリ、水深クシテ天然ノ良港ナリ殊ニ其ノ山水ノ明媚ナル觀者ヲシテ瀬戸内海ニ接セルノ感アラシム海路僅ニ四十哩ニシテ釜山港アルヲ以テ商港トシテ振ハサレトモ軍事上要害ノ地トシテ朝鮮唯一ノ軍港ナリ開港トシテハ明治四十三年ヲ限リ閉鎖セラレタルモ釜山稅關長ノ特許ヲ受ケ又ハ朝鮮開港ニ於テ稅關ノ手續ヲ了シタル帝國船隻ハ特ニ出入スルコトヲ許サレ内地人ノ居住スル者四千六百五十五人ニ及フ府廳、區裁判所（地方

裁判所支部）居留民團、小學校、病院、警察署、銀行等アリ

十二釜山 朝鮮ノ南端ニ在ル良港ニシテ一莖帶水ヲ隔テ、對馬ヲ迎ヘ本土ト相對ス東南ハ海水深ク灣入シテ一大港灣ヲ形リ絶影島、冬柏島港口ニ横ハリ天然ノ防壁ヲナシ港内水深クシテ大船巨船ヲ泊スヘシ、市街ハ龍頭山ヲ中心トシテ東西ニ廣カリ北草梁、釜山鎮ニ到ル釜山ハ早クヨリ内地ト交通アリタル所ナルヲ以テ内地人ノ移住セルモノ多ク殆ト内地市街ヲ見ル感アリ今ハ關釜ノ間ニハ毎日一回乃至二回ノ定期航海アリテ鐵道院其ノ任ニ當リ内地朝鮮間ノ聯絡ヲ保テ僅ニ二十時間ナラスニテ渡航シ得ヘシ、又釜山ヨリ内地要港朝鮮滿洲諸港及露領浦鹽ニ至ルノ航路アリ

釜山ノ貿易ハ朝鮮内地ノ發展及各港トノ航行頻繁トナルニ從ヒ年々増加シ其貿易高ハ朝鮮諸港中第二位ヲ占ム其ノ輸出品ノ重ナルモノハ米、大豆、鱈節、海苔、魚類、生牛、牛皮、牛骨、砂金等ニシテ輸入品ノ重ナルモノハ木綿、金巾、石油、食鹽、酒、煙草、醬油、燐寸、紡績糸、砂糖其ノ他雜貨類ニシテ其ノ輸出先ハ内地、清國、浦鹽斯德、新嘉坡等ニシテ其ノ輸入地ハ日、清、米、英、露、獨、佛等ヲ主ナルモノトス

第二章 地誌

宏壯ナル釜山停車場新ニ成リ築港ノ設備著々進行シ關釜聯絡ノ施設益完成ノ域ニ向ヒ内地人ノ移住スル者逐年増加シ人口二萬二千有餘ニ上レリ

六〇

釜山ヨリ諸要港ニ至ル航程ヲ擧ケレハ	至下	一二	至神	三六	至大	三八
同横	七三	同仁	四三	同浦	六四	八
同長	一六二	同鎮南	五〇〇	同太	七五〇	
同木	二一〇	同安東	六二七	同芝	五四〇	
同馬	三九	同大	六四〇	同上	五〇五	
同群	三五七	同城	四四二	同元	三一八	
山		津		山		
			各港經由			
			五八〇			
			五〇〇			
			六二七			
			六四〇			
			四四二			

十三木浦 全羅南道ノ西南端ニ在ル良港ニシテ附近奇巖島嶼ニ富ミ、風光佳ナリ港内水深ク大船巨船ヲ碇繋スルニ足ル市街ハ險峻山ノ麓ニ在リテ小都ヲ爲シ商業繁榮ナリ榮山江灣ニ往ク沿岸一帯ノ地ハ沃野ニシテ農産物ヲ出ス木浦ト釜山、群山トノ間ニハ定期航路アリ、内地人ノ居住スル者三千四百五十人ニ及ヘリ府廳、區裁判所(地方裁判所支部)、居留民團、學校、警察署、郵便局等アリ

十四群山 木浦ト共ニ南鮮ニ於ケル貿易港ナリ、全羅北道ニ在ル小都ニシテ錦江ノ江口ニ在リ、錦江ハ舟楫ノ便アリテ上流公州、江景ヨリ遠スルニトテ得ヘク全州道路ノ開通アリテ交通ノ便多キヲ以テ附近一帯ノ沃野ヨリ巨額ノ農産物此ノ地ニ輻輳ス釜山經由内地トノ定期航路アリテ著シク發展ノ途ニ在リ目下内地人ノ居住スル者三千六百二十二ニ及ヒ府廳、區裁判所(地方裁判所支部)、警察署、居留民團、學校等アリ

十五開城 高麗朝四百七十年間ノ帝都ニシテ一ニ松都ト稱ス、京城ノ北十六里ノ處ニ位セル京畿線ニ於ケル著名驛ノ一ナリ今ヤ著名ノ古城敗蹟ニ歸シ見ルヘキモノナシト雖高麗歷代ノ陵廟城外ノ屏壁古城ヲ覆フ舊蹟タル老樹等ハ徐ニ往時ヲ偲ハシムルモノアリ朝鮮名勝ノ地ナリ

開城ハ高麗朝ノ名産地トシテ知ラル、モ既ニ其ノ製法ノ傳ハラサルヤ久シ往時高麗朝時代ノ遺器殘陶ヲ見ルニ過キス近時傳ハルモノ多クハ墳墓ヲ發掘シテ得タルモノニシテ頗ル高價ナリ又開城ハ人蔘ノ産地トシテ知ラル其ノ產出高ハ毎年二萬斤内外、價格約百萬圓ニ達ス其ノ他米穀、野菜、果物、大豆等ヲ産ス内地人ノ居住スル者一千四百十五人アリ區裁判所、警察署、學校、銀行、郵便局

等アリ

十六新幕、沙里院、新幕沙里院共ニ黄海道ニ在リ京義線ノ完成ニ伴ヒ發展シタル新開地ニシテ、新幕ハ蕪炭、米穀、大豆等ヲ産出シ新溪地方ノ産出玆ニ集マリ内地商人ノ入り込ム者少ナカラス學校、警察署、郵便局等アリ内地人六百三十有餘人アリ、沙里院附近一帯ノ地ハ空漠タル沃野ニシテ米穀大豆等ノ農産頗ル多ク興業會社、銀行、學校、郵便局等アリ

十七黄州、兼二浦、黄州ハ京義線ニ沿フ一驛ニ過キスト雖内ハ多數ノ朝鮮人齎軒ヲ列ヘ市場頗ル盛ナリ穀物ノ産アリテ近時邪人ノ移住スル者多シ黄州ハ兼二浦線ノ分岐點ニシテ、兼二浦線ニ投スレハ半時ニシテ兼二浦ニ達スルヲ得、兼二浦ハ鎮南浦ノ南十哩ノ所ニ在ル一港ニシテ航行ノ利アルヲ以テ物貨輻輳ス兼二浦、鎮南浦間ニハ一日數回ノ航行アリ近海ニ於ケル捕魚ハ多ク兼二浦ニ集マリシガ客年中平南線ノ開通ニ因リ平壤鎮南浦間ノ交通便トナリシヲ以テ兼二浦ハ近日ノ便益ヲ有セサルニ至レリ目下内地人六百二十人アリ學校、警察署、郵便局、鐵道工場等アリ

十八平壤、平壤ハ朝鮮ノ首都ニシテ箕子及高句麗氏ノ據リシ處ニシテ東南大同江ニ臨ミ北方大城山ヲ負ヘル頗ル要害ノ地ナリ此地ハ南京城ヘ五十里、北義州ヘ五十三里、東元山ヘ五十二里、西鎮南浦ヘ十六里ノ地ニアリテ京城以北樞要ノ地ニ在リ京義鐵道完成シ大同江亦葺ノ便アルニ加フルニ客年中平南線ノ開通ニ因リ鎮南浦港トノ交通開ケタルヲ以テ平壤ハ北鮮ニ於ケル物貨輻輳ノ中心トナレリ殊ニ平壤附近一帯ハ遼々茫漠タル平野ニ連ナリ、加フルニ土壤豐沃ニシテ穀物ヲ産出シ平壤米ハ其ノ品質ノ良ヲ以テ名アリ然レトモ此ノ地ハ比較的寒暑ノ差甚シキヲ以テ從來内地人ノ移住スル者少ナカリシガ日露戰爭以來頗ル其ノ移住ヲ増加セリ

平壤在留内地人戸口表

年次	戸數	人口
明治三十七年末	九〇	三〇三
同三十八年末	五九二	二〇六四
同三十九年末	一、四四三	四、五三〇
同四十年末	二、七八三	六、一七四

第二章 地誌

同	同	同	一、八三三	六、八四九
同	四十二年末	四十二年末	二、〇八九	七、四三三
同	四十三年末	四十三年末	一、九七七	六、四四三

六四

斯ノ如ク平壤ニ於ケル内地人ハ年年増加シ急遽ノ膨脹ニ由リ四方一帯ノ空地ハ數年ニシテ街衢ヲ爲スニ至レリ主要ナル産物ハ米、大豆、小豆、牛皮等ニシテ近時平壤無烟炭ノ聲價亦漸ク世人ニ認めラル道廳、旅團司令部、府廳、控訴院、地方裁判所、區裁判所、平壤鑛業所、居留民團、學校、病院、警察署、郵便局、銀行、旅館其ノ他電燈、電話、水道等ノ公共的施設完備セリ牡丹臺ハ形勝ノ地トシテ有名ナリ

十九鎮南浦 平壤ヲ距ル四十六里、大同江ノ江口ニ在ル貿易港ナリ、黄海、平安兩道ノ山岳相擁シテ天然ノ防波堤ヲ作り港内水深ク十五乃至二十尋ナ有シ幅員一里ニ亘リ波靜ニシテ恰モ湖水ノ如シ大同江舟楫ノ利アルニ加フルニ客年中平南間ノ鐵道開通シタルヲ以テ貨物滯留ノ虞ナキニ至レリ周圍遼ラスニ山ヲ以テシ飛瀝島ハ港ノ東方ニ在ル形勝ノ地ナリ鎮南浦ヨリ仁川、下關ヲ經由シテ坂神

ニ至ルモノト仁川、群山、木浦、釜山ヲ經由シテ達スルモノトノ二航路アリ又清國大連ニ達スル航路アリ安東縣ニ達スル航路アリ其ノ他諸要港間ノ航路アリ此ノ地ヨリ各港ニ至ル距離ヲ舉ケレハ左ノ如シ

至仁川	二二七	至下關	五五六	至長崎	五一六
同 浦山	三二四	同 神戶	七九五	同 安東縣	一二七
同 木浦	四二七	同 大阪	八一五	同 大連	一八〇
同 釜山	五〇〇	同 橫濱	一一四	同 旅順	二二〇
同 營口	五八〇	同 芝罘	二〇二	同 元山	八〇一
同 天津	六五〇	同 上海	六九〇	同 浦鹽	一、一〇六
各港經由					

鎮南浦ハ日清戰争前ニ在リテハ戶數二三十ナ有スル一流村ニ過キサリシカ日清及日露ノ兩戰役ニ因リ内地人ノ移住スル者著シク増加シ忽チニシテ一要港ト爲ルニ至レリ加フルニ鎮南浦ハ平壤ノ咽喉ニ當リ黄海平安兩道ノ貨物ヲ吞吐スル要路ニ當ルヲ以テ他日築港ノ完成等ニ因リ一層ノ盛況ヲ見ルヘシ

鎮南浦在留内地人累年戸口表

年次	戸数	人口
明治三十七年末	四〇七	一、七八六
同三十八年末	七八九	三、〇〇三
同三十九年末	七六四	二、八八七
同四十一年末	七九〇	二、七二九
同四十二年末	七八〇	二、八一六
同四十三年末	八八八	三、一九七
同四十四年末	九九七	三、六九八

府廳、區裁判所(地方裁判所支部)、居留民團、警察署、郵便局、學校等アリ

二十新義州 鴨綠江ノ南沿岸ニ在ル一都府ニシテ東方ハ丘陵ヲ以テ遼ラシ西方ハ一帯ノ平野ニ連リ遼ニ鴨綠江ヲ隔テ、清國安東縣ニ相對ス鴨綠江ハ幅員十餘町潮水ヲ干満甚シク其ノ差十七八尺ニ及ブト雖能ク巨船大船ヲ容ルヘク舟楫ノ便江上數十里ニ及フヲ以テ貨物ノ集散頗繁サリ殊ニ京義線ノ

完成セルヲ以テ朝鮮内陸トノ交通便利トナリ京城ヨリ三百一十一哩、十三時間ニシテ遼スヘク釜山ヨリ五百八十五哩、一晝夜ニシテ遼スヘシ今ヤ鴨綠江架橋工事落成シ滿鮮ヲ連結シ安奉線ニ由リテ直ニ哈爾濱ニ達シ更ニ西北利亞線ニ由リテ歐洲ニ到ルヘシ實ニ東亞ヨリ西歐ニ至ルノ旅程ハ最安全ニシテ最短縮セラル、ニ至リ

新義州ハ北緯ノ極端ニ在ルヲ以テ寒氣甚シク酷寒ノ際ハ零下二十六度ニ及フトアリ鴨綠江結氷ノ期ハ毎年十一月ヨリ翌年三月ニ及フ江畔一帯ノ平野ハ沃饒ニシテ耕作ニ適ス近時内地人ノ移住スル者多ク農作、柞蠶ノ業ニ従事スル者少ナカラス

新義州在留内地人累年戸口表

年次	戸数	人口
明治四十一年末	五六三	一、四七一
同四十二年末	五一五	一、五三五
同四十四年末	六二五	二、七九六

第二章 地誌

明治四十三年末

六八二

二、二〇〇

道廳、府廳、警察署、郵便局、居留民團、學校等アリ

二十一元山 元山ハ日本海ニ面セル北鮮唯一ノ貿易港ニシテ葛麻半島ハ虎尾半島ト相擁シテ永興灣ヲ成シ灣内ニハ十數餘ノ島嶼散在シ潮流緩漫ニシテ日本海北部ノ寒流ヲ受クルコト少ナク港内氷結ヲ見ルコト稀ナリ灣内水深クシテ大船巨舶ヲ容ルヘク市街ハ眺徳山ノ麓ニ在リ朝鮮東沿岸ハ瓦港灣ニ乏シキカ故ニ地形上日本海沿岸ニ於ケル貨物並露領ヨリスル貨物ハ此ノ地ニ輻輳ス數年ノ後京元線開通セハ日本海沿岸ニ於ケル貨物及露領ヨリスル貨物ハ釜山、仁川ヲ經由セスシテ直ニ京城及朝鮮内地ニ輸入セラルヘク又内陸ノ貨物ハ直ニ元山ニ出テ各所ニ集散セラル、ニ至ルヘシ元山ヨリ要所ニ至ル距離ヲ示セハ左ノ如シ

至京	城	至清	津	至浦	鹽
同釜	津山	同下	同長	同	同
二七四	三二八	二〇五	三八八	三二〇	三二〇
同	一二四	同	四〇六	同	同

元山ヨリ各處ニ通スル道路ハ頗ル不完全ナルヲ以テ貨物ノ集散甚々緩漫ナリ從テ物價ノ昇降ヲ免レズ又元山近海ハ魚類ニ富ムト雖販路ノ頗ル不利ナルヲ以テ漁業ニ従事スル者少ナシ京元鐵道ノ完成ハ目下ノ急務ナリトス

元山在留内地人累年戸口表

年次	戸數	人口
明治四十一年末	九五八	三、六三三
同四十二年末	一、〇二五	三、七八〇
同四十三年末	一、一四三	四、四二八
同四十四年末	一、一七九	四、六二九

府廳、區裁判所(地方裁判所支部)、警察署、郵便局、居留民團、學校、病院、銀行等アリ

二十二城津 元山ノ北方百二十四哩ノ所ニ在リ威鏡道沿岸ノ小港ニシテ浦鹽斯徳ハ近ク百九十六哩ノ所ニ在リ威鏡道一帯ノ貨物並ニ輻輳ス輸出品ハ農産物、礦産物ニシテ其ノ重ナルモノハ大豆、生

第二章 地誌

牛、銅等ニシテ輸入品ノ重ナルモノハ金巾、木綿、紡績、シーチンク等ナリ目下内地人ノ在住スル者約五百六十人アリ

二十三清津 北鮮ニ於ケル要港ノ一ニシテ浦鹽斯德ニ近ク咸鏡北道北方ニ於ケル都府ニシテ北鮮一帯ノ貨物農産物ノ集散地ナルカ故ニ近來急ニ繁榮ヲ加ヘ咸津ヲ凌クニ至リ内地人ノ移住スル者二千人ニ垂ントス

清津在留内地人累年戸口表

年次	戸數	人口
明治四十年末	一七八	六二四
同四十年末	三八九	一、二四六
同四十二年末	四八三	一、七三二
同四十三年末	四七五	一、七〇〇

第三章 地方行政

第一節 道、府郡

朝鮮ハ之ヲ分テ京畿道、忠清北道、忠清南道、全羅北道、全羅南道、慶尙北道、慶尙南道、黃海道、江原道、平安南道、平安北道、咸鏡南道、咸鏡北道ノ十三道、京城、釜山、馬山、群山、木浦、大邱、仁川、平壤、鎮南浦、義州、元山、清津ノ十二府及三百十七郡ト爲ス、道ニ道長官、府ニ府尹、郡ニ郡守ヲ置キ各區劃内ニ於ケル行政事務ヲ掌ラシム

道、府郡ハ行政區劃トシテハ内地ノ府縣、郡ニ該當シ其ノ機關ノ組織及職務權限等亦大ニ相似タル所アレトモ其ノ著シク相異レル點ヲ擧ケレバ警察事務ハ道長官ノ所管外ニシテ此事務ノ爲各道ニ警察部長ヲ置ケルコト國稅ニ關スル事務ハ道長官ノ所管ニシテ之カ爲道ニ財務部長ヲ置ケルコト又府郡ニテハ土地家屋證明事務（内地ノ不動産登記事務）及民事裁判ノ結果ニ依ル強制執行事務（内地ノ執達吏ノ事務）ノ一部ヲ取扱ヘルコト是ナリ

第三章 地方行政

第二節 面

各府縣ノ下ニ面ヲ置ク其ノ數四千三百五十二トス

面ハ朝鮮ニ於ケル最下級ノ行政區劃タルノ點ニ於テハ内地ノ市町村ニ匹敵スレトモ市町村ノ如キ自治團體ニハ非ス

面ニハ面長公錢領收員、面書記、洞里長等ヲ置ケリ面長ハ道長官之ヲ任命シ公錢領收員ハ面長ノ推薦ニ依リ府尹又ハ郡守之ヲ認許シ面書記ハ面長之ヲ任命シ洞里長ハ府尹又ハ郡守ノ認可ヲ得テ面長之ヲ任命ス

面長ハ面事務ヲ統轄シ公錢領收員ハ國稅地方費ノ徵收及面經費ノ出納ヲ掌リ面書記ハ面長ノ事務ヲ補助シ洞里長ハ洞里(内地ノ市町村ノ區ニ類ス)ニ關スル事務ニ付面長ヲ補助ス

面吏員手當及事務執行ニ要スル費用ハ面ノ負擔ニシテ其ノ支出負擔ノ方法ハ道長官ノ認可ヲ得テ府尹又ハ郡守之ヲ定ムルモノトス各地方ノ實況ニ依レハ面經費ノ財源ハ財產收入、國稅地方費徵收ニ關スル交付金其ノ他ノ雜收入ニ依リ仍不足アルトキハ面費ヲ賦課スルノ方法ナルモ實際諸收入ノ

ミヲ以テ支辨シ得ルモノナリ概テ若干ノ賦課ヲ爲シツ、アリ其ノ賦課目ハ戶數制、家屋制及結數制(地稅附加稅)等ナリ

第三節 公共團體

一 居留民團

始メテ居留民團ヲ設立シタルハ明治三十九年八月ニシテ京城、仁川、釜山、鎮南浦、平壤、群山、木浦ニ於ケルモノ即チ是ナリ同年馬山、大邱亦相次テ之ヲ設置ス其ノ後明治四十一年二月新義州ニ於テ之ヲ設置ヲ見タリ

民團ノ重ナル事業ハ教育、衛生ニシテ土木之レニ亞キ警備、基地、火葬場ノ如キモ其ノ經營ニ係リ左ニ本年度ニ於ケル各民團ノ歲入出豫算ヲ掲記スヘシ

京 城	歲 入		合 計	歲 出		合 計
	經常部	臨時部		經常部	臨時部	
	三三、八二六	一〇、一五〇	三三、九七六	二九五、五三六	三一、四四〇	三三六、九七六

第三章 地方行政

道名	組合数	戸数	人口
京畿道	七	一、〇二二	三、六八七
忠清北道	八	五六一	一、七二四
忠清南道	一五	六五四	三、〇五九
全羅北道	八	二七七	七三三
全羅南道	一一	九五三	二、八三四
慶尙北道	一一	九五八	二、九三六
慶尙南道	三一	二、八九四	九、九七五
黄海道	七	一、〇八二	三、一〇〇
平安南道	四	三三一	一、〇六三
平安北道	一〇	八二八	二、三四三
江原道	六	四〇三	九五六
咸鏡南道	六	四六六	一、三〇一
合計			
仁川	一〇、三三四	一、四〇三	一〇、三六二
釜山	二、四八三	八八三、四一八	一、二八、七五一
馬山	三、九二七	四、五二〇	一、八八、七二〇
鎮海	二、四八二	四、〇四七	三、一八五
平壤	六、七、八二九	四、六八四	二、四、〇五四
群山	三、三、一八八	一、五、七七二	三、一、一一
木浦	三、六、八六一	八、一六〇	三、六、七三
元山	六、〇、四七三	三、七、三七二	三、六、七三
大邱	三、三、八九一	三、六、二八	四、三、七三
新義州	一、二、四一三	一、五、〇〇	三、四、九一六
合計	九七、〇五七	九七五、四四八	一、九四五、五〇五

二 學校組合及日本人會

學校組合及日本人會ハ居留民團區域以外ノ地ニ集團セル内地人ニ於テ組織シ教育、衛生、土木其ノ他公共事務ヲ處理スルヲ以テ目的トス就中日本人會ハ漸次其組織ヲ學校組合ニ變更シ現存スルモノ僅ニ十八ニ過キス左ニ其ノ概況ヲ擧クヘシ

(イ) 學校組合

學校組合道別調		四十四年九月現在	
道名	組合数	戸数	人口
京畿道	七	一、〇二二	三、六八七
忠清北道	八	五六一	一、七二四
忠清南道	一五	六五四	三、〇五九
全羅北道	八	二七七	七三三
全羅南道	一一	九五三	二、八三四
慶尙北道	一一	九五八	二、九三六
慶尙南道	三一	二、八九四	九、九七五
黄海道	七	一、〇八二	三、一〇〇
平安南道	四	三三一	一、〇六三
平安北道	一〇	八二八	二、三四三
江原道	六	四〇三	九五六
咸鏡南道	六	四六六	一、三〇一
合計			
仁川	一〇、三三四	一、四〇三	一〇、三六二
釜山	二、四八三	八八三、四一八	一、二八、七五一
馬山	三、九二七	四、五二〇	三、一八五
鎮海	二、四八二	四、〇四七	二、四、〇五四
平壤	六、七、八二九	四、六八四	三、一、一一
群山	三、三、一八八	一、五、七七二	三、六、七三
木浦	三、六、八六一	三、七、三七二	四、三、七三
元山	六、〇、四七三	三、六、二八	三、四、九一六
大邱	三、三、八九一	一、五、〇〇	三、四、九一六
新義州	一、二、四一三	四、八四一	五、二、五〇
合計	九七、〇五七	九七五、四四八	一、九四五、五〇五

第三章 地方行政

咸鏡北道	三	一、四三七	四、七七二
合計	一三三	一、八五六	三、七四七

咸鏡北道	二四、三〇一	二四、三〇一
合計	一七五、一三九	五七五、一三六

備考 戸數、人口ハ本年三月末調
(口) 日本人會

日本人會道別調 四十四年九月現在			
道名	會數	戸數	人口
京畿道	三	一〇八	三五五
忠清南道	五	一、四四〇	五、〇一四
忠清北道	一	五四	一、六九
全羅南道	二	四七七	一、五〇〇
全羅北道	一	五〇二	一、六四二
黃海道	二	二三七	六、一〇
咸鏡南道	一	二九一	一、二七九
咸鏡北道	三	六七七	二、〇三三
合計	一八	三、七八六	一三、五九一

日本人會歳入出豫算 四十四年度			
道名	歳入	歳出	
京畿道	二、四一七	二、四一七	
忠清南道	二九、三六〇	二九、三六〇	
忠清北道	一、〇五五	一、〇五五	
全羅南道	一三、三三四	一三、三三四	
全羅北道	六、六五九	六、六五九	
黃海道	三、四九〇	三、四九〇	
咸鏡南道	七、四一七	七、四一七	
咸鏡北道	一四、四三三	一四、四三三	
合計	七八、一六四	七八、一六四	

七六

三 水利組合

朝鮮ニ於ケル水利組合ハ明治三十九年三月度支部令第三號水利組合條例ニ依リ設立セルモノニシテ其ノ目的土地ノ灌溉疏鑿開拓保護ニ在リ組合ノ最モ早ク設立セラレタルハ全州ノ平野ニシテ實ニ朝鮮全土ヲ通シ組合總數ノ七分ノ五ヲ占メリ組合ノ現状ハ尙未タ微々トシテ振ハサルモ將來地方ノ發達ニ伴ヒ漸次勃興ノ兆アリ左ニ其ノ概況ヲ舉グヘシ

水利組合一覽

明治四十四年十月十日調

組合名	事務所所在地	設立年月日	起債金額	組合區域	目的
全羅北道 群山府	全羅北道 群山府	明治三十二年三月八日		全羅北道群山府米面定及四面内ニテ米堤又ハ船堤ノ灌溉ヲ受クル地域	一、貯水池及灌溉水路ノ改善及灌漑補 二、防湖堤及樋管ノ築造補修及樋管ノ 三、其他水利ニ必要ナル施設
全羅北道 群山府	全羅北道 群山府	明治三十二年二月十一日	三〇〇,〇〇〇円	全羅北道益山郡西一面十一里、臨陂郡南一面八里	一、貯水池及水路ノ築造

第三章 地方行政

七七

地方適切ノ公共事業ヲ經營セシムルコトトセリ

一 管理

地方費ハ韓國時代ニ於テハ内部度支部兩大臣監督ノ下ニ觀察使之ヲ管理シタリシカ併合後ハ總督監督ノ下ニ道長官之ヲ管理スルコト、ナレリ

二 財源

地方費ノ財源ハ地方費、所屬財産收入、地方費事業收入、地方賦課金、國庫補助金等ニシテ地方費財産收入ハ地方財産ノ整理轉屬ヲ了セサルカ爲、地方費事業收入ハ事業ノ收益ヲ見ルニ至ラサルカ故ニ未ダ嘗フニ足ルモノナシ賦課金ノ課目課率納期其ノ他賦課ニ關シ必要ナル規定ハ總督ノ認可ヲ得テ道長官之ヲ定ム賦課金ノ種目ハ從來地方ニ於テ徵收シタル賭稅中ヨリ之ヲ選定シ人民ヲシテ新負擔ノ痛苦ヲ加ヘサラシムコトヲ期セリ

現今地方費賦課金ノ種類ハ地稅附加稅、屠場稅(屠畜稅)市場稅、土地家屋所有權取得稅抵當權取得稅ニシテ道ニ依リ其二ニ缺クモノアリ

(イ)地稅附加稅ハ國稅タル地稅ニ附加シ平安南北、咸鏡南北ノ四道ハ本稅百分ノ十其ノ他ハ各本稅百分ノ五ヲ本稅ト同時ニ年二期ニ徵收ス

(ロ)屠場稅(屠畜稅)ハ屠場營業者ニ對シ屠畜數ニ應シテ毎月之ヲ賦課徵收ス一般ニ屠牛ニ對シテノミ之ヲ賦課スルモ道ニ由リテハ屠豚、屠羊ニ對シテモ之ヲ賦課セルモノアリ其稅率ハ屠牛一頭ニ付一圓乃至一圓十錢屠豚一頭ニ付拾錢乃至二拾錢屠羊一頭ニ付貳拾錢ニシテ京畿道中京城府ハ屠場官營ニシテ民設ノモノ存セザリシカ爲屠畜稅トシテ屠殺依頼者ヨリ之ヲ徵收ス課率ハ牛一頭ニ付一圓豚一頭ニ付二十錢ナリ

(ハ)市場稅ハ京畿道京城府區域ハ市場ノ等級ヲ定メ月稅トシテ市場管理者ニ之ヲ賦課シ其ノ他ハ放賣價格百分ノ一ヲ稅率トシ其ノ放賣者ニ賦課シ常設市場ハ月稅常設タラサルモノハ開市毎ニ隨時之ヲ賦課ス但シ咸鏡北道ニテハ市場稅ヲ賦課セス

(ニ)土地家屋所有權取得稅

(ホ)抵當權取得稅

第三章 地方行政

ノ二ハ京畿道京城府内ニ於テノ賦課スルモノニシテ土地家屋ノ所有權所得稅ハ土地價格ノ千分ノ四抵當權取得稅ハ債權金額千分ノ二ノ課率トシ所有權抵當權ノ取得者ニ賦課ス

三 事業

地方費ヲ以テ支辨スヘキ事業ハ左ノ如シ

- 一、廳舎ノ建築及修繕ニ關スル經費
 - 二、土木ニ關スル經費
 - 三、衛生病院救恤及慈善ニ關スル經費
 - 四、勸業ニ關スル經費
 - 五、教育及學藝ニ關スル經費
- 各號ノ外ニ法令ニ依リテ地方費ノ支辨ニ關スル經費及公共上必要ナル事業ニ關スル補助

(イ) 土木
三等道路ノ維持修繕ニ付テハ國費ノ補助ヲ得テ之ヲ施行シ關係部落ノ負擔ヲ以テスル等外道路

ノ維持修繕ニ付テハ地方費ハ之ニ對シテ補助ヲ爲スコトヲ得

(ロ) 衛生

衛生ニ關スル事業ハ種痘、種痘認可員ノ講習、清潔法ノ施行、共同井戸、共同便所ノ設置及屠獸検査等ナリ

(ハ) 救恤

救恤ノ事業ハ災民救助、窮民救助、棄兒ノ收容、行旅病人ノ救護取扱等ニシテ其ノ重ナルモノハ災民救助トス
地方費ノ財源ハ未タ豊富ナラサルヲ以テ救恤事業ノ爲ニ多クノ經費ヲ支出シ能ハスト雖少クモ歳入賦課金總額ノ百分ノ一ハ之ヲ豫算ニ計上ス
罹災民ニ對スル救恤ハ普通ノ場合ニ於テハ前記地方費ノ支辨ニ依ルト雖被害ノ程度大ナルカ又ハ其ノ範圍廣キニ亘レル災害ニ就テハ國費ヨリ之ヲ支辨ス

(ニ) 勸業

第三章 地方行政

平安南道	平安北道	咸鏡南道	咸鏡北道
木税百分ノ			
牛	豚	牛	豚
四	四	四	四
二	二	二	二
一	一	一	一
十	十	十	十
十	十	十	十
十	十	十	十
十	十	十	十

明治四十四年度地方税賦課金負擔表 四十四年十二月十日現在

道名	賦課金	戸數	人口	平均一月二付	平均一人二付
京畿道	八八、六六六	二九六、五四〇	一、四一六、一〇六	〇・二九六	〇・〇〇六
忠清北道	三三、三一一	一三三、六七三	五八〇、七八九	〇・三八〇	〇・〇〇六
忠清南道	六一、九二九	一九五、七六五	八九五、五四六	〇・三一六	〇・〇〇六
全羅北道	四九、八〇三	二〇五、七九九	九六二、五八一	〇・二四〇	〇・〇〇九
全羅南道	六七、六六四	三三九、七五四	一、五八〇、八九一	〇・二〇六	〇・〇〇二
慶尙北道	八五、四七二	三三三、八六三	一、六二四、五六九	〇・二五六	〇・〇〇四
慶尙南道	六五、三五〇	二九七、一〇三	一、四四一、六五一	〇・二一七	〇・〇〇五

道名	賦課金	戸數	人口	平均一月二付	平均一人二付
平安南道	五二、九三四	二二二、一〇三	九九〇、八八八	〇・二三八	〇・〇五三
平安北道	四四、八九二	一八七、三九一	八九二、三六八	〇・二三九	〇・〇五〇
江原道	二六、一一一	一八二、一四〇	九七九、六〇二	〇・一四三	〇・〇二六
咸鏡南道	一四、四五五	一六六、七三三	八三三、〇七四	〇・八六七	〇・〇一七
咸鏡北道	二一、〇〇〇	一七六、四七一	九一三、五一一	〇・一一八	〇・〇三三
合計	一〇、七〇〇	七四、七八一	四二七、六四二	〇・一三九	〇・〇三五
合計	六二、二七七	二、七九二、一〇五	一三、五三九、二一八	〇・二三三	〇・〇四五

第五節 臨時恩賜金

日韓併合ノ成ルヤ民力ノ休養ト共ニ惠恤撫育ノ聖旨ヲ照ニスル爲國幣一千七百三十九萬八千圓ヲ支出シ之ヲ十三道三百二十有餘ノ府郡ニ配付シ以テ士民ノ授産教育及凶歉ノ救済ニ充テシム而シテ其ノ配付額ハ京城府百萬圓其ノ他ノ府郡ハ平均五萬圓内ニ萬五千圓ハ平均割殘額二萬五千圓ハ人口割ヲ以テ之ヲ定ムルコト、シ明治四十三年十月八日告示ヲ以テ公表シ且道府郡ニ對シ臨時恩賜金事業經理ノ方針ヲ劃令シ更ニ府令ヲ以テ之レカ管理規則ヲ發表セリ

第三章 地方行政

臨時恩賜金ハ五分利公債ヲ以テ下賜セラレタルカ故ニ年々五分ノ利子ヲ生シ一年ノ利子總額八十六萬九千九百圓ニ上リ朝鮮全道ノ地方費賦課金總額(四十四年六)ヲ超過スルコト二十五萬五千三百餘圓其ノ地方費賦課金總額一、〇〇〇ニ對スル比例ハ一、四一五餘ニ當レリ而シテ内授産費ニ充ツヘキモノ五十二萬一千九百四十四圓教育費ニ充ツヘキモノ二十六萬九千七百四十四圓救濟費ニ充ツヘキモノ八萬六千九百九十圓ニシテ之ヲ各道別ニ觀レハ授産費一萬六千六百餘圓乃至七萬九千九百餘圓教育費八千三百餘圓乃至三萬九千五百餘圓凶歉救濟費二千七百八十圓乃至一萬三千三百餘圓ナリ左ニ其ノ事業ノ梗概ヲ記スベシ

一 授産事業

授産事業ハ先ツ兩班儒生ノ如キ恒産ナキ者ニ對シ産業ヲ授ケ之ヲ惠恤スルヲ第一ノ目的トシ而シテ其ノ經營又ハ補助スヘキ事業ハ地方ニ於テ既ニ素地アルモノ即チ澆紙及養蠶等ノ如キ經營最モ容易ニシテ奏功確實繼令輕微ナルモノト雖據テ以テ糊口ノ資ト爲スニ足ルヘキモノヲ撰擇セシムルノ方針ヲ執レリ茲ニ於テ各道ハ管内各府郡ノ意見ヲ徵シ更ニ之ヲ審査シ且朝鮮總督ノ認可ヲ受クルコト

トセリ今各道ヲ通シ其ノ主要ナルモノニ就キ概括シテ之ヲ舉クレハ養蠶ニ關スル講、傳習所其ノ他百十六箇所、機業傳習所五十六箇所乃至七十四箇所(何箇所乃至何箇所トアルハ認可當時ノ事業經道長官ハ實質上此ノ範圍内ニ於テ適宜按排スヘキモノト) 蠶繭製造傳習所十四箇所以下何箇所乃至何箇所何人乃至何人トアルモノ亦同シ) 蠶繭飼、紙、麻等ノ製造傳習所十四箇所計百八十六箇所乃至二百四箇所、講、傳習ヲ公私ノ施設ニ委託スルモノ蠶業十六箇所、機業六箇所農業二箇所、蠶紙製造二箇所、製紙二箇所、漁業四箇所、海苔製造一箇所計三十二箇所、別ニ傳習所ヲ設ケサルモノ稻拔傳習百箇所、建織繩以傳習十九箇所乃至五十七箇所、海苔製造傳習一箇所、乾蠶製造法傳習二箇所、造船傳習四箇所計百二十六箇所、種牝牡牛種豚ノ配付又ハ預託千三十八頭、種苗場、桑園二百二十五箇所、模範田監督田ノ指定四十府郡、漁業獎勵四十五府郡等ニシテ其ノ他蠶絲機業、製紙、綠肥、水利事業ノ補助、車輛、種鷄、蠶種、蠶具、製紙、機織、桑、果樹、楮、桐苗等ノ配付ヲ爲ス以上諸種ノ事業ニ要スル職員(委託傳習所ヲ除ク)及巡回教師ノ員數合計二百四十四人、講、傳習生及委託講、傳習生ノ數合計五千八百六十九人乃至七千九人(但シ雜費共同飼育者等ヲ含マス)ノ多キニ違ス而シテ之ニ要スル設備及器具、機械ノ費用、職員ノ俸給、旅費及講、傳習生ニ對スル食費補給、

第三章 地方行政

蠶種、桑苗其ノ他修業生ニ給與スル諸器具、原料等ノ費用ヲ積算スルトキハ到底現時ニ於ケル朝鮮人民ノ實力ノミヲ以テシテハ能ク之ヲ支辨シ得ヘキ所ニアラサルナリ

二 教育事業

教育事業ニ在リテハカメテ資金ヲ基礎トシ郡校財産其ノ他ノ收入ヲ加ヘ先ツ普通學校ヲ設立セシメ基礎確實ニシテ永續ノ見込アルモノヲ撰ビ若シ俄カニ此ノ如キ學校ヲ設立シ難キ場合若ハ既設ノ學校アリテ新ニ設立ヲ必要トセサル場合ニ在リテハ他ニ存スル私立學校ヲ補助シ漸次ニ普通學校ト同一ノ程度ニ進マシムルコト、セリ臨時恩賜金ノ補助ヲ與フル學校ハ各道ヲ通シテ總數三百四十四校ニシテ内公立普通學校二百二十校私立普通學校八十九校私立學校二十八校ニシテ公立普通學校中實業補習學校ヲ附設スルモノ七校アリ而シテ道ニ依リ補助費ノ一部ヲ割キ公立普通學校職員ヲ増置シ内若干名ヲ指定シテ巡回教師ト爲シ絶ヘス其ノ府郡内ニ於ケル學校及書房ヲ巡回指導シ以テ之カ改善ノ實ヲ舉ゲシムルノ計畫ヲ爲セルモノアリ

三 凶歉救濟事業

凶歉ノ救濟ハ總テ萬已ムヲ得サル場合ニ之ヲ行ヒ救濟方法ハカメテ生業ヲ扶助シ成ルヘク其ノ效果ヲ確實ニスルノ方針ヲ擇ヘリ
道ニ依リテハ救濟金支出ノ都度其ノ方法ヲ定メ認可ヲ經テ施行スヘシト定メタルモノアリト雖多クハ豫メ種穀、農具、食糧給與ノ方法ヲ立テ中ニハ醫藥、家屋料ノ給與及被服貸與ノ方途ヲモ定メタルモノアリ
惟フニ朝鮮開發ノ手段トシテ生業ノ扶助及教育ノ普及ヲ圖ルハ其ノ最先ノ急務ニ屬スルヤ勿論ニシテ國費ヲ以テ是等ノ事業ニ投セラレル所ノ經費ハ固ヨリ尠少ニアラスト雖國費事業ハ必シモ細民救濟ニノミ專ナル能ハス臨時恩賜金ノ下付ニ依リ朝鮮ニ於ケル下層人民ハ實ニ枯草雨ニ遇ヒタル感アルヘキハ言フ須非サル所トス而シテ以上ノ事業ハ將來永久ニ繼續サル所ナルヲ以テ臨時恩賜金ノ效果ハ朝鮮ノ將來ニ對シ實ニ測リ知ルヘカラサルモノアリ積年政弊ノ餘孽ヲ受ケテ困頓業ヲ失ヒ流離產ヲ傾ケタル各道地方民衆ハ令ヤ 聖德ノ治キニ感泣シ往年ニ對比シテ當ニ隔世ノ想ヲ爲シツツアリ

第三章 地方行政

臨時恩賜金及利子各道別調

道名	配與臨時恩賜金	分一年度利子	授產費	教育費	凶歉救濟費
京畿道	二,六三七,〇〇〇	一三二,八五〇	七九,二一〇	三九五,五五五	一三,一八五
忠清北道	七九四,〇〇〇	三九,七〇〇	二三八二〇	一一,九一〇	三,九七〇
忠清南道	一,四八九,〇〇〇	七四,四五〇	四四,六七〇	二二,三三五	七,四四五
全羅北道	一,三二二,〇〇〇	六五,六〇〇	三九,三六〇	一九,六八〇	六,五六〇
全羅南道	一,六九四,〇〇〇	八四,七〇〇	五〇,八二〇	二五,四一〇	八,四七〇
慶尙北道	二,〇一三,〇〇〇	一〇〇,六五〇	六〇,三九〇	三〇,一九五	一〇,〇六五
慶尙南道	一,六〇六,〇〇〇	八〇,三〇〇	四八,一八〇	二四,〇九〇	八,〇三〇
黃海道	一,〇九四,〇〇〇	五四,七〇〇	三三,八二〇	一六,四一〇	五,四七〇
平安南道	一,〇四六,〇〇〇	五二,三〇〇	三二,三八〇	一五,六九〇	五,二三〇
平安北道	一,一四九,〇〇〇	五七,四五〇	三四,四七〇	一七,二三五	五,七四五
江原道	一,一三五,〇〇〇	五六,二五〇	三三,七五〇	一六,八七五	五,六二五
咸鏡南道	八八三,〇〇〇	四四,一五〇	二六,四九〇	一三,二四五	四,四一五
咸鏡北道	五五六,〇〇〇	二七,八〇〇	一六,六八〇	八,三四〇	二,七八〇
合計	一七,三九八,〇〇〇	八六九,九〇〇	五二一,九四〇	二六〇,九七〇	八六,九九〇

第六節 濟生院

濟生院ハ明治四十四年六月始メテ之ヲ設立シ孤兒ノ養育、盲啞者ノ教育及瘋癲者其ノ他病者ノ救療ヲ爲スヲ以テ目的トス基本財産ハ臨時恩賜金五十萬圓及寄附金ニシテ經常費ハ基本財産ヨリ生スル收入及國庫補助金並李王家其他ノ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ本院ニ養育部、盲啞部及瘋癲部ヲ置ク養育部ハ京城西大門外元崇義廟ニ在リ元京城孤兒院ヲ引繼キ明治四十四年九月一日ヨリ其ノ事務ヲ開始セリ同年十一月末現在孤兒總數ハ八十六名ナリ盲啞部及瘋癲部ハ目下準備中ニシテ未タ開設ノ機運ニ至ラス左ニ四十四年度(自八月)ノ歳入出豫算ヲ掲グ

歳入(円)		歳出(円)	
基本財産	三,〇〇〇,〇〇〇	俸給	八,七〇〇
産利	三,〇〇〇,〇〇〇	給聽費	二,三〇〇
入寄附金	五,〇〇〇,〇〇〇	旅費	二,三〇〇
計	一〇,〇〇〇,〇〇〇	雜費	三,七二五
		修繕費	三,四六六
		救養及新營設備費	一〇,九五三
		豫備費	三,五八六
		計	六四,八三三

第七節 土地家屋證明

舊韓國ニ於テハ不動産上ノ權利ノ移轉又ハ設定ヲ爲シタル場合ニ於テハ古昔ノ慣習上文記又ハ文券ト稱スル私署證書ノ引渡ニ依リテ以テ之ヲ證明スルノ外他ニ何等ノ方法ナカリシカ光武十年（明治三十九年）十二月ニ至リ勅令第六十五號ヲ以テ土地家屋證明規則ノ發布ヲ見ルニ至ル之レ蓋シ韓國ニ於ケル不動産上ノ權利ノ移轉、設定、保存行爲ヲ確保スルニ至リタル規定ノ嚆矢ナリ此規定ハ契約當事者ノ申請ニ因リ其双方又一方カ韓國人ナル場合ニ於テ其ノ契約ノ目的タル不動産ノ所在地ヲ管轄スル府尹、郡守ヲシテ其ノ契約事項ヲ確保スルノ方法トシテ其ノ契約書ノ末尾ニ證明ヲ爲サシムルコトトシ其ノ効力トシテハ其ノ證明ヲ受ケタル契約書ハ完全ナル證據トナルモノニシテ例ヘハ典當證明ノ如キハ其ノ債務者カ期限内ニ債務ノ履行ヲ爲ササルトキハ典當執行規則ニ依リ其ノ擔保物件ノ上ニ權利ノ執行ヲ爲スノ特權ヲ有セシメタリ而シテ韓國内ニ於ケル不動産上ノ權利ノ得喪等ニ關シテハ本令ニ依ルモノノ外統監府令ヲ以テ土地建物證明規則、土地建物所有權證明規則、土地建物ノ典當執行ニ關スル規定ヲ發布シ其契約當事者ノ双方カ韓國人ニアラサル場合及其ノ一方カ韓國人ニシテ韓國勅令ニ依リ府尹郡守ノ證明ヲ受ケタルモノノ查證ニ關シ事項ヲ規定シ其ノ證明

手續及典當執行ニ關シテハ韓國勅令ニ依ル證明令規ヲ準用スルコトトナセリト雖其ノ職務ハ理事官ノ權限ニ屬セシメタルカ故ニ契約當事者ノ如何ニ依リ其ノ證明機關ヲ異ニセシカ統監府ノ設置ニ依リ理事官廢止ノ結果自然其ノ職務ニ屬セシ證明事務ハ韓國勅令ニ依ル證明事務所共ニ其ノ目的物件ノ所在地タル府郡ニ新ニ配置セラレタル府尹郡守ノ權限ニ屬シ茲ニ證明機關ノ統一ヲ計ルヲ得タリ證明令規實施後ノ傾向ヲ見ルニ漸次之カ法令ノ周知ト共ニ年月ヲ遂ヒ申請件數ノ増加ヲ來タセシカ爾來新思想ノ普及ニ伴ヒ權利觀念ノ向上ヲ來タシ各般ノ權利關係亦漸次複雑トナリ加フルニ併合後著々新政ノ實施ニ依リ内地人トノ關係亦一段ノ密接ヲ加ヘ殊ニ併合後國內一般ニ平靜ニシテ内地人投資者ノ増加ニ連レテ經濟上大ニ活氣ヲ呈スルニ至リタルカ爲本年ニ於ケル證明件數ハ前年ニ比シ頗ル激増シタルヲ見ル今年上半年期ニ於ケル取扱件數ヲ前年同期間中ノ取扱數ニ比較スルニ件數ニ於テ四割六分價格又ハ償權額ニ於テ八割手數料ニ於テ四割七分ノ増加ヲ來タシタルモノニシテ其ノ詳細左表ノ如シ

第三章 地方行政

證明取扱件數 價格又ハ債權額 手數 料	明治四十三年上半期	明治四十四年上半期	增減	增減比率
	四、六八五 九、五五五、八五九、四〇〇 三六、八三三、三三〇	六、五三九 一七、二〇六、〇四九、九八二 五七、四三四、四三三		

第四章 財政及經濟

第一節 財政

一 財務機關

明治三十七年八月日韓協約成立ノ結果トシテ舊韓國政府ハ日本政府ノ推薦ニ係ル財務顧問ヲ聘シテ
 財政ノ整理ニ著手シタリシカ是ヨリ前合法的豫算ナルモノ、編成セラレタルコトナク財務機關ノ設
 備ハ不完全ニシテ宮中ハ國家以外別ニ徵稅官ヲ派シテ各種ノ租稅ヲ徵シ徵稅機關ハ郡守主トシテ徵
 稅ノ局ニ當ルノ外宮内府及中央官廳ノ派遣ニ係ル收稅官アリテ各種ノ徵稅ヲ爲シ其ノ間一定ノ規律
 ナク殊求苛歛ノ弊風大ニ行ハレタリ

從來舊韓國政府ニハ度支部ナルモノアリテ財務機關ノ任ニ當レルカ財政顧問ハ先ツ之ヲ廓清シ徵稅
 機關ノ特設ヲ提議シ明治三十九年管稅官官制ヲ制定シ度支部大臣直轄ノ下ニ各道ニ稅務監ヲ置キ觀
 察使ヲシテ兼務セシメ以テ稅務監督ノ任ニ充テ更ニ樞要ノ地ニ稅務官ヲ配置シ稅務執行機關トシ稅

第四章 財政及經濟

務主事ヲ各郡ニ派駐シ稅務ノ執行ヲ分掌セシメ又漸次各地ニ財政顧問支部及分廳ヲ設置シ獨リ稅務ノミナラス地方財務ヲ監督シ以テ不正ノ徵求不當ノ支出ヲ防遏シ且地方經濟狀態ノ進捗ニ努メタリ明治三十九年統監府設置セラレ宮中ノ廓清、制度ノ革新、財政ノ整理孰モ一段ノ進捗ヲ告ケ就中財政整理ニ關スル施設ノ要項ヲ擧ケレハ

- 一 舊貨ノ回收ヲ實行シ株式會社第一銀行ヲシテ中央銀行ノ事務ヲ執ラシメ兌換券ノ發行ヲ公認シ
- 二 諸銀行ヲ保護助長シ農工銀行、手形組合及金融組合ヲ設立セシメ無利子ヲ以テ之ニ資金ヲ貸與シ
- 三 豫算ノ編成及實行ヲ計リ、第一銀行ヲシテ國庫金ノ出納ヲ掌ラシメ
- 四 徵稅機關ヲ改良シ之ヲ統一ヲ謀リ徵稅ノ方法ヲ公示シ
- 五 從來英國人ブラカン氏專掌ノ下ニ獨立經營セル關稅事務ヲ統一シ國庫ノ收入トシ更ニ稅關ヲ増設シ保稅倉庫ヲ設置シ

六 皇室有及國有財産ヲ整理シ驛屯土及雜稅ノ處理、紅蔘專賣ノ經營ヲ爲シ

七 財源調査ヲ實行シ

八 港灣ノ修築、燈臺ノ増設及水道ノ施設ヲ企圖シ

九 賭官衙ノ改築ヲ行ハシメ其ノ材料ノ潤澤、低廉ヲ圖ル爲ニ麻浦ニ煉瓦製造所ヲ起シ

十 模範事業トシテ印刷局ヲ創設シタリ

又地方財務機關ノ組織ヲ制定シ度支部ノ管轄ノ下ニ財務監督局ヲ京城、平壤、大邱、全州、元山、公州及光州ノ七ヶ所ニ設置シ其ノ管下ニ財務署ヲ設ケ全國二百三十四ヶ所ニ配置セリ

次テ日韓併合及新官制實施ト共ニ舊韓國政府度支部ヲ移シテ朝鮮總督府ノ管下ニ置キ度支部ヲシテ朝鮮ニ於ケル豫算決算、租稅並國庫金融ニ關スル事務ヲ掌リ總務部會計局ヲシテ豫算執行ノ任ニ當ラシメ相倚リ以テ朝鮮ニ於ケル財政ヲ掌理スルコト、爲レリ

二、歲 計

從來韓國政府ニ於テハ豫算ノ編成ナカリシカ明治三十八年初メテ之ヲ編成シ爾來累年豫算ノ制定ヲ

第四章 財政及經濟

見タリシカ明治四十三年八月韓國併合ノ結果帝國政府ハ同年勅令第三百二十六號ニ依リ八月二十九日ヨリ舊韓國政府八月廿八日ニ於ケル豫算殘額ヲ製川施行シ更ニ同年勅令第四百六號ヲ以テ朝鮮總督府特別會計ニ關スル件發布同十一月一日ヨリ之カ施行ヲ見タリ
 今明治四十年以降舊韓國政府歳入歳出及明治四十三年度以降朝鮮總督府特別會計歳入歳出ヲ表示ス
 ノハ左ノ如シ

舊韓國政府歳入歳出累年比較 (四)

年 度	入			出		
	經 常	臨 時	合 計	經 常	臨 時	合 計
明 治 四 十 年	九、九六、三三三	六、四三、四八八	一六、四〇、八二一	七、一八、三六七	一、七、七〇、九五二	一七、九六、〇一九
同 四 十 一 年	一三、四〇、七五七	九、八六、八八九	二三、二七、六四六	八、四七、九三三	三、三三、八五七	二六、六一、七九〇
同 四 十 二 年	一五、一七、六〇三	一四、〇四、一〇八	二九、二一、七一〇	一〇、六三、六九七	二、九、三七、四四九	三二、一五、一〇六
同 四 十 三 年	九、〇五、一三九	四、五三、一四九	一三、五八、二八八	四、八七、五三三	一、四、四八、六三三	一五、〇五、八二一

備考：四十二年前ハ豫算額四十二年ハ現計(八月二十八日迄)ヲ示ス

朝鮮總督府特別會計歳入歳出 (四)

年 度	入			出		
	經 常	臨 時	合 計	經 常	臨 時	合 計
製川豫算會計 (明治四十三年度)	七、八、四四四	三、三三、一五五	一、一、〇一、六九九	一、五四、五五二	一、三三、〇一三	二、八六、五六四
明治四十三年度	二、六二〇、三三六	一〇、五七、〇〇〇	一三、一九七、三三六	九、四七、八九六	八、五三、七二九	一七、〇一、六二五
同 四 十 四 年 度	三、四〇、七五三	二、四、六四、一九九	四、八、七四、九五二	三、七、八九、四七七	三、〇、八五〇、三三三	四、八、七四、九五二
同 四 十 五 年 度	三、七三、三三三	三、七〇、八七七	七、四四、一〇九	三、九、七二、四九〇	三、六九、七二九	七、四四、一〇九

備考：四十三年度前ハ現計四十四、五年度ハ豫算額ヲ示ス

舊韓國政府四十三年度及朝鮮總督府製川豫算

會計歳入歳出科目別 (四)

歳 入

科 目	製川豫算會計	隆熙四年度(四十三年)
地 戸 税	五五、一〇三	五、七〇二、九三六
其 他 税	九一、六二四	二六九、一四五
合 計	一四六、七二七	六、〇七二、〇七一

第四章 財政及經濟

第四章 財政及經濟

歲出

總計	部 時 臨				雜 合	部			
	導 前 公 借 公 合 掌 年 債 債	賜 剩 金 入 金	公 金 餘 債 債	公 債 入 金		入 收	其 平 林 度 計 壤 量 衡	礦 野 事 業 收 業	所 收 業 益 收 收
二、九〇二、六一九	二、一三三、一九五		一、〇〇〇、〇〇〇	一、一三三、一九五	七七八、四二四	一九三、九六九	五、五九八	八、九〇八	
一三、五九七、二七八	四、五三二、一四九	一一六、八二五	一、〇〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	九、〇六五、一二九	三八八、九五二	三七六、二六九	一七、八四七	二八、九七四

105

常 經		稅 租	
及 業 官	聯 印	稅 租	
鹽 蔘 水 器 業 業 道 院 收 收 業 收	也 紙 賭 收 收 入	既 雜 繳 鹽 喇 關 煙 酒 家 計 往 年 度 未 納 地 稅 收 入	草 屋 稅 稅 稅 稅 稅 稅 稅 稅
一、五八三	一〇、四五〇	五、一八二、〇〇四	五、九八二
一〇、三三五	六、二九九	二、一五二	一三、六二二
	二、八四三	三、一八六	三、七八一
	二、二四三	二、四九七	三、〇六四〇
	一〇、四七三	二、一八七	七、四三三
	二〇二、八七六	二、四七〇	一、七八九、二五五
	四三、七六七	一〇、四七八	四八、〇七一
	五九、六一七	一七、六五四	一、七八九、二五五
	一一、一一九	七、八九六	二、〇七二
一六九、三七五		八、〇五三、二六五	二、一〇七二
四、五八一			三三、三三五

104

部	時	元	千	百	十	元	千	百	十	元	千	百	十
鎮南浦水道工事費		100,000											
赤田川改修費		15,000											
京城水道改良及擴張工事費		177,838											
鎮海市街經營費		53,000											
地圖及結數名簿費		50,000											
平壤鐵業所探礦費		40,000											
林野地積整理費		17,714											
臨時外國行諸費		80,204											
鹽田築造及廳舎新設費		30,000											
平壤鐵業所第二次擴張費						235,366							
發電水力調査費						78,771							
印刷局營業諸費						30,000							
水道新營及設備費													
地方土木工事費													
地方法院設置費													
醫務院出備費													
諸親衛府													
元親衛府													

總計	水道買收他費	其計
五二,四四二,二〇九	三,六五九,七一九	二〇,八五〇,三四五
四八,七四一,七八二	二,九二六,三四五	八,三四三,七一三
△ 一七,八一五,六五四	△ 四七,八一三	二〇,八四七
二七三,七六五		

備考 明治四十三年度一般會計所屬韓國通信事業ニ要スル經費並韓國鐵道及韓國森林ノ各特別會計ハ明治四十三年ニ限リ從前ノ豫算ヲ繼承使用セルモノナリ
 △印ハ豫備金豫算中ヨリ他費目へ補充支辨セシ金額ニシテ内書ナリ
 總督府醫院及慈惠醫院ハ別ニ特別會計ヲ立ツルコト、爲レリ

三 特別會計

明治四十三年度朝鮮總督府平壤鐵業所特別會計ハ舊韓國政府平壤鐵業所特別會計ノ計算ヲ繼承シタルモ同四十四年度ニ於テ朝鮮總督府特別會計ニ編入セラレ朝鮮鐵道用品資金及朝鮮森林ノ兩特別會計ハ明治四十四年度ヨリ施行セラレタリト雖概テ各從前ノ韓國鐵道用品資金及韓國森林特別會計ヲ

第四章 財政及經濟

起業公債	同年十二月	一、〇〇〇、〇〇〇	六分	五箇年	十五箇年
尊掌賜金公債	四十三年六月	一六、八五五	五分		借入の年目は 二十九年以内
特別會計一時借入金	四十四年三月	三〇、九四、六七七	五分		借入の年目は 三十一年以内
事業費借入金	四十四年九月	二、〇〇〇、〇〇〇	五分五厘		借入の年目は 三十一年以内
總計		三、九七五、四三三			同

前表所掲以前ニ於ケル各年末現在高ヲ示セハ左ノ如シ

明治四十三年	二九、二五五、三三五
同 四十二年	四四、一二六、四五三
同 四十一年	三六、七四一、四四一
同 四十年	一五、四九八、〇三二
同 三十九年	一五、五〇九、二五四
同 三十八年	九、四五四、〇六四

六 租 税

國税ハ地稅、戶稅、家屋稅、酒稅、煙草稅、關稅、噸稅、鹽稅、釐稅、水產稅及雜稅ノ十一種トス
其ノ主要ナルモノ、稅率ヲ舉ケレハ左ノ如シ

一 地稅 稅率ヲ十三等ニ分チ一結ニ付二十錢以上八圓以下ノ稅ヲ課ス(一結ハ一町步乃至四町步餘ニ至ル)

二 戶稅 一戶毎ニ三十錢ヲ課ス

三 家屋稅 家屋ヲ分チテ甲乙ノ二種ト爲シ甲種トハ石造、煉瓦造又ハ瓦葺ノ家屋ヲ總稱シ乙種トハ甲種以下ノモノヲ包含ス更ニ之ヲ家屋ノ間數ニ依リ四等ニ分チ左ノ稅ヲ課ス

等 級	稅 率 標 準 及 稅 率
一 等	三十間以上 甲種 金二五八 乙種 金四四四
二 等	十間以上 甲種 金一四二 乙種 金五十五
三 等	四間以上 甲種 金八十五 乙種 金一十五

第四章 財政及經濟

四 等 四間未滿 甲種 金一圓
乙種 金三圓

四酒稅 酒類ヲ三種ニ分チ左ノ區別ニ從ヒ課稅ス

第一類 釀成酒

五石迄 金一圓
十石迄 金二圓
二十石迄 金四圓
五十石迄 金二十圓
百石ヲ超過スルモノハ五十石迄ヲ増ス毎ニ金十圓ヲ増ス

第二類 蒸餾酒

一石迄 金一圓
二石迄 金二圓
五石迄 金五圓

第三類 混成酒

十石迄 金十圓
二十石迄 金二十圓
五十石迄 金五十圓
五十石ヲ超過スルモノハ三十石迄ヲ増ス毎ニ金三十圓ヲ加フ
六圓
二石迄 金六圓
五石迄 金十五圓
十石迄 金三十圓
二十石迄 金六十圓
五十石迄 金百五十圓

五煙草稅 煙草稅ヲ分チテ耕作稅及販賣稅ノ二種ト爲シ煙草耕作稅ハ左ノ種別ニ從ヒ耕作者ヨリ徵

第四章 財政及經濟

收ス

第一種耕作(植付根數九百以下ノモノ)

一箇年 金五十錢

第二種耕作(同上九百ヲ超過スルモノ)

一箇年 金二四

烟草販賣稅ハ左ノ種別ニ從ヒ販賣業者ヨリ徵收ス

第一種販賣(卸賣者)

一箇年 金十四

第二種販賣(小賣者)

一箇年 金二四

六關稅 第九章商業中貿易ノ部ニ附明セリ

七噸稅 一噸ニ付五錢ヲ課ス

八鹽稅 製造者ニ對シ百斤ニ付キ六錢ノ率ヲ以テ賦課ス、百斤ニ滿タサル端數ハ之ヲ百斤トシテ計

算ス

九釧稅 左ノ種別ニヨリ徵收ス

釧 產 稅 釧產物價格ノ百分ノ一

釧 區 稅 釧區一千坪一箇年金五十錢(許可後一箇年ハ半額トス)

砂金採取稅 釧區一千坪或ハ河床延長一町毎ニ一箇年金二四

十水產稅

第一種第三種第四種及第五種ノ免許漁業 採捕物價格ノ百分ノ一

一 四

第二種免許漁業 區劃水面一千坪迄

一 四

第一種許可漁業 曳網類各一漁具

三十 四

第二種許可漁業 小地曳網類同

三十四 四

汽力ニ依ル底曳網類 噸數百噸以上一艘ニ付

百五十四 四

風力又ハ潮流ニ依ル底曳網類 同 噸數未滿

七十五 四

小打瀬網類 各一漁具

六 四

第三種漁業 同 捲網類 各一漁具

三十四 四

第四種許可漁業 同 綵網類 同 各一漁具

四十二 四

潜水器一臺ニ付 同 綵網類 同

五十二 四

第四章 財政及經濟

第五種許可漁業 一漁業ニ付 五十圓
 第一種届出漁業 同 四圓
 第二種届出漁業 同 四圓
 第三種届出漁業 同 三圓
 流船ヲ使用スルモノ一漁船ニ付一圓
 流船ヲ使用セサルモノ同 五十錢
 其ノ他ノ收入ハ印紙收入、驛屯土收入(國有地小作料)官業及官有財産收入ノ公債等ノ臨時收入並雜收入ヲ其ノ主ナルモノトス

第二節 朝鮮經營費

明治三十九年統監府設置以來最近數年間ニ帝國政府カ朝鮮經營ノ爲ニ支出シタル經費ハ左ノ如シ

所管	像算額				
	明治三十五年度	明治三十六年度	明治三十七年度	明治三十八年度	明治三十九年度
陸軍	五三三、八六七	三八〇、〇七四	四二八、三三六	三九四、六三三	四二〇、五二〇
海軍	一、一七〇、〇五五	一、七〇、九三二	一、六九七、七六六	一、〇四一、〇一九	一、六八八、九二一
總計	一、七〇三、九三二	二、〇八〇、〇〇六	五、九七六、一〇二	五、〇三五、六六二	五、九〇九、四四一

部	臨時部					特別會計	總計
	陸軍	海軍	統監府	統監府司法及臨時費	通信官署		
陸軍	三、三三三、〇〇〇	五、三三三、〇〇〇	八、八八八、〇〇〇	五、三三三、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇
海軍	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇
統監府	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇
統監府司法及臨時費	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇
通信官署	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇
特別會計							
朝鮮森林							
鐵道							
其他							
合計	五、三三三、〇〇〇	五、三三三、〇〇〇	八、八八八、〇〇〇	五、三三三、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇

内 軍 事 費	一、八〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	九八〇、二七五	一〇、一五七、九四三	一、三三九、一六六	一、〇六六、八八六
行政費其ノ他	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	一〇、八八八、八四六	一、五〇〇、〇〇〇	一、六七〇、一五五

本表中通信官署及鐵道ニ關スル明治四十三年度經費ハ現計額ニ依ル尙通信官署經費ハ歲出ニ對シ歲入不足額ヲ計上シ四十三年度ハ歲入超過額ヲ便宜上臨時部經費ヨリ控除シタリ但印紙收入ハ之ヲ調査セス又×印紙附シタルハ舊韓國政府立替金ヲ示シ内書トス

第三節 貨幣

朝鮮ノ幣制ハ從來幾多ノ變遷ヲ重テ明治二十七年ニ至リ漸ク銀本位制ヲ採用シ次テ三十四年金本位制ニ改メシモ尙全ク空文ニ屬シ葉錢舊自銅ハ各地ヲ異ニシテ寡ラ流通シ幣制紊亂ヲ極メタリ依テ明治三十八年貨幣整理ニ着手シ先ツ幣制ヲ改正シ其ノ品位量目ヲ帝國貨幣ト同一トナシ新貨幣ヲ發行シテ其ノ流通普及ニ努メ且第一銀行券ノ流通ヲ公認シ舊白銅貨及葉錢ノ回收ニ努メタリシカ舊白銅貨ハ四十二年十二月限り全ク其通用ヲ禁止シ葉錢ハ漸次引上ノ結果其ノ流通額大ニ減少シ新貨幣モ亦到ル處圓滿ニ流通スルニ到レリ而シテ四十三年八月日韓併合ノ結果朝鮮ノ通貨ハ帝國貨幣ヲ以テ

統一スルノ方針ヲ採リ爾後舊韓國貨幣ハ一切銷毀ヲ停止シ從來發行シタル分ハ漸次帝國貨幣ト交換シテ引上ケルコト、セリ今明治二十八年以降毎年末貨幣流通額ヲ掲ケルハ左表ノ如シ

明治三十八年以降貨幣流通額 (圓) 各年十二月末日

年 次	新硬貨	兌換券	舊白銅貨	葉 錢	各本 通 貨 邦	合 計	指 數
明治卅八年	五、七六〇	八、二五二、六七	五、四一三〇	六、五〇三、三六	一、七〇〇、〇〇〇	三、三三〇、〇〇〇	100
同卅九年	三、一三七、四三	九、三三四、〇〇	五、六〇七、〇〇	五、七九八、〇三	九、四四〇、〇〇	三、七三六、四四	109
同四十年	五、九五四、〇〇	一、六五五、五五	三、九八七、七元	四、六四四、九四	六、七七七、七	三、八四六、五五	113
同四十一年	三、一三三、三三	九、三三三、〇〇	一、四一六、六四	四、四一四、九四	三、九四二、〇〇	一、八五〇、二五	117
同四十二年	四、五七四、三三	一、三三三、六八七	七、五九〇、〇〇	一、四一四、五五〇	三、三〇〇、〇〇〇	二、〇五二、九六	119
同四十二年	六、一五二、五五	一、六三三、一六四	一、四一四、五五〇	一、四一四、五五〇	二、六九〇、〇〇〇	二、四四〇、三九九	125
同四十四年九月末	五、九七五、三三	二、〇〇〇、〇〇〇	—	七、五九四、三三	一、六三三、一六四	三、〇五八、五九二	134

新硬貨發行高 (圓) 各年十二月末日

年 次	金 貨	銀 貨	白銅貨	青銅貨	合 計	指 數
明治三十八年	—	二、四九、四二〇	一、一八、二六〇	—	三、六七、六八〇	100

第四章 財政及經濟

兌換券發行高 (圓) 各年十二月末日

同	三十九年	九五五〇〇〇	一〇七、三六八	九五二、六〇一	一八〇、七五五	二、一三七、五四三	五八一
同	四十年	九五、五〇〇	二、九〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、五〇〇	二〇四、七五五	四、一〇〇、一七五	一、一三五
同	四十一年	九五〇、〇〇〇	三、〇三二、五〇〇	九八一、三五〇	一九五、七七五	四、一五八、五三五	一、一三一
同	四十二年	一、四五〇、〇〇〇	三、五九五、〇〇〇	七三六、九〇〇	三四二、五四五	六、一二四、四四五	一、六六六
同	四十三年	一、九五〇、〇〇〇	五、二五八、五〇〇	五七四、七五〇	四三二、五四五	八、二二五、七九五	二、二三四
同	四十四年九月末	五五、〇〇〇	四、二八三、五八九	四八四、四九二	四三三、九二一	五、一九七、五〇二	一、四一四

年次	十四券	五十四券	一圓券	五十錢券	二十錢券	十錢券	十	計	指數
明治三十五年	一七五、〇〇〇	三五、九一五	九七、七五				六五、五五〇	一〇〇	一〇〇
同 三十六年	一七五、〇〇〇	四八、六六五	一七、七一				八〇、三三三	一〇〇	一〇〇
同 三十七年	一、五五〇、〇〇〇	一、〇九二、五〇〇	三、五六一	七〇、六九九	一、二二二		三、五七一	一〇〇	一〇〇
同 三十八年	一、五五〇、〇〇〇	一、〇九二、五〇〇	八、〇六〇	七〇、六九九	一、二二二		三、五七一	一〇〇	一〇〇
同 三十九年	一、五五〇、〇〇〇	一、〇九二、五〇〇	一、九九九	七〇、六九九	一、二二二		三、五七一	一〇〇	一〇〇
同 四十年	一、五五〇、〇〇〇	一、〇九二、五〇〇	一、九九九	七〇、六九九	一、二二二		三、五七一	一〇〇	一〇〇
同 四十二年	一、五五〇、〇〇〇	一、〇九二、五〇〇	一、九九九	七〇、六九九	一、二二二		三、五七一	一〇〇	一〇〇
同 四十四年九月末	一、〇六六、六六六	四、〇九二、〇〇〇	一〇、一五五、〇〇〇	二、〇〇〇	一、〇〇〇		一、〇〇〇	一〇〇	一〇〇

第四節 金融機關

從來朝鮮ニハ金融機關ノ設備見ルヘキモノナカリシカ明治卅六年二月第一銀行ノ支店ヲ京城ニ開設スルヤ舊韓國政府ハ之ニ委託スルニ中央金庫事務取扱ヲ以テシ銀行券ノ發行ヲ公認シ日本政府モ亦特ニ勅令ヲ以テ同行ニ於テ銀行券ノ發行ヲ認メ以テ同行ヲシテ中央銀行ノ任務ヲ遂行セシメシカハ明治四十年中ニ至リ同行ハ元山、大邱ヲ初メトシ地方十三箇所ニ支店及出張所ヲ有スルニ至レリ是ヨリ先キ半島内陸ノ發展ニ伴ヒ十八銀行及第五十八銀行等支店ヲ開設セリ明治三十九年三月舊韓國政府ハ銀行條例ヲ發布シ又漢城、天一ノ兩銀行ニ資金ヲ貸與シ其ノ業務ヲ革新セシメテ韓一銀行ヲ亦設立セラレ財界漸ク順調ニ向ヒ金融年ヲ遂フテ好況ヲ呈セリ

第四章 財政及經濟

明治三十九年三月農工銀行條例發布セラレ農工業ノ開發及一般金融調和ノ目的ヲ以テ政府ハ各地ニ農工銀行ノ設立ヲ獎勵シ政府借入ノ起業資金中其ノ一部ヲ舉ゲテ之ニ補助ヲ與フルコトトセリ、漢湖農工銀行ハ此ノ主旨ニ基キテ設立セラレタルモノ、嚆矢トス次テ大邱、平壤、全州、晉州、光州、海州、鏡城及咸興等ニ農工銀行本支店ノ設立ヲ見ルニ至レリ

明治四十二年十月、韓國銀行ハ中央銀行トシテ設立セラレ從來第一銀行京城支店ニ於テ取扱ハレタル金庫事務、銀行券發行等ハ韓國銀行ニ引繼カレタリ尙併合後同行ハ朝鮮銀行ト改稱セリ

在朝鮮銀行一斑
四十四年九月末日現在

名	種	支店及出張所數	資本金及支店元金	設立者	開業年月
朝鮮銀行	銀行	一四	一〇、〇〇〇、〇〇〇	内地人	四十二年十一月
第一銀行	銀行	二	一、八〇〇、〇〇〇	内地人	十一年五月四日
第十銀行	銀行	八	一、一五〇、〇〇〇	同	二十三年一月一日
百三銀行	銀行	五	七〇〇、〇〇〇	同	二十五年七月二十日
周防銀行	銀行	一	〇	同	四十二年七月十八日

名	種	支店及出張所數	資本金及支店元金	設立者	開業年月
密陽銀行	銀行	一	五〇、〇〇〇	内地人	四十年三月一日
漢陽銀行	銀行	七	四〇〇、〇〇〇	朝鮮人	三十九年六月二日
慶尚農工銀行	銀行	六	二〇〇、〇〇〇	同	六月廿六日
平安農工銀行	銀行	七	二〇〇、〇〇〇	同	六月廿五日
全州農工銀行	銀行	二	一〇〇、〇〇〇	同	七月七日
全州農工銀行	銀行	三	一〇〇、〇〇〇	同	八月六日
光州農工銀行	銀行	四	二〇〇、〇〇〇	同	九月廿日
咸鏡農工銀行	銀行	三	三〇〇、〇〇〇	同	三十六年二月七日
漢城商業銀行	銀行	二	五〇〇、〇〇〇	同	三十二年三月七日
朝鮮商業銀行	銀行	一	五〇〇、〇〇〇	同	三十九年八月八日
合	計	六四	一九、〇五〇、〇〇〇	朝鮮人 内地人 特許	三十八年十二月十一日

二 朝鮮銀行

朝鮮ニ於ケル國庫金ノ出納、銀行券ノ發行、其ノ他中央銀行ノ業務ハ從來株式會社第一銀行京城總支店ヲシテ之ヲ取扱ハシメタルカ財政ノ膨脹、經濟ノ發展ニ伴ヒ金融ノ中樞タル中央銀行設置ノ必

第四章 財政及經濟

要ヲ認メ明治四十二年韓國銀行ヲ設立シ第一銀行ヨリ中央銀行トシテ業務ヲ繼承シ同年十一月ヨリ業務ヲ開始セリ而シテ併合後朝鮮銀行法ノ發布ト共ニ同行ハ朝鮮銀行ト改稱セリ

朝鮮銀行ハ資本金ヲ一千萬圓トシ中央銀行トシテ國庫金ノ出納、銀行券ノ發行ヲ爲スノ外

- 一 爲替手形其ノ他商業手形ノ割引
- 二 平常取引スル諸會社銀行又ハ商人ノ爲手形代金ノ取立
- 三 爲替及荷爲替
- 四 確實ナル擔保附貸付
- 五 諸預リ金及當座貸越勘定
- 六 金銀貨資金屬及諸證券ノ保護預リ
- 七 地金銀ノ買賣及貨幣ノ交換
- 八 尙政府ノ認可ヲ受クルレハ公共團體ニ對シ無擔保貸付ヲ爲スコトヲ得、營業ノ都合ニヨリテハ國債證券、地方債券其ノ他確實ナル有價證券ヲ買入ル、コトヲ得ルモノトス

朝鮮銀行ハ京城ニ本店ヲ有シ支店ヲ大阪、仁川、平壤、大邱及元山ノ五ヶ所ニ設ケ出張所ヲ鎮南浦、群山、木浦、馬山、咸興、城津、新義州及安東縣ノ八箇所ニ有セリ

朝鮮銀行一覽 明治四十四年九月末現在

(イ) 總況

公稱資本金	拂込資本金	積立金	政府貸下金	預金	金貨	付金	銀行	發行	高券	支店	出張所	數
10,000,000 ^圓	5,000,000 ^圓	1,615,000 ^圓	1,110,000 ^圓	6,633,150 ^圓	8,326,250 ^圓	3,563,600 ^圓	14					

(ロ) 預金 (四)

公金預金	定期預金	當座預金	特別當座預金	預金手形	別段預金	通知預金	計
207,321	1,019,088	3,336,322	1,511,625	18,510	595,672	519,563	6,663,636

(ハ) 貸借 (四)

第四章 財政及經濟